徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第62集

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

カネガ谷遺跡
延谷東遺跡
勝明寺谷古墳群
助ヶ谷古墳群
東林院古墳群
西山谷古墳群
大谷山田遺跡
大代古墳
辺露遺跡

本文編
〈第２分冊〉

２００５

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
日　本　道　路　公　団

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第62集

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

カネガ谷遺跡
延谷東遺跡
勝明寺谷古墳群
助ヶ谷古墳群
東林院古墳群
西山谷古墳群
大谷山田遺跡
大代古墳
辺露遺跡

本文編
〈第２分冊〉

２００５

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
日　本　道　路　公　団

XIII　カネガ谷遺跡

例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴うカネガ谷遺跡の発掘調査報告書である。

2　所在地　鳴門市大麻町萩原字カネガ谷4他

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

調査期間　平成12年5月16日～平成13年3月31日

調査対象面積　10,000㎡

試掘面積　330㎡

本調査面積　9,670㎡

報告書作成期間　平成15年4月1日～平成17年3月31日

4　挿図番号、図版番号は通し番号とした。遺物番号は図幅ごとに通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6　まとめ「カネガ谷遺跡の考察」は近藤　玲が執筆した。

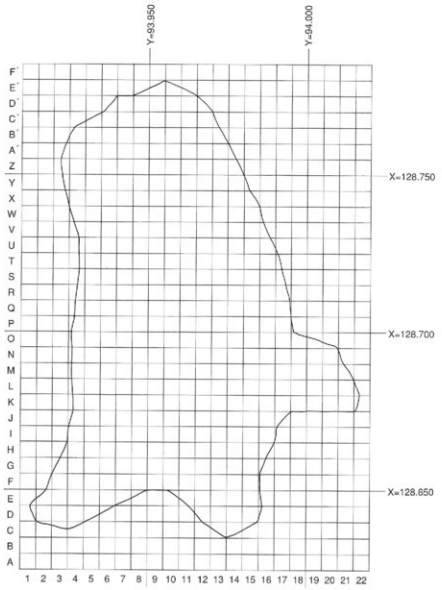
1　調査の経過

（1）調査の経過

カネガ谷遺跡は阿讃山脈南麓、鳴門市大麻町萩原字カネガ谷４他の標高79～119mの尾根上に所在する。この地域は宮谷古墳（前方後円墳）の所在する徳島市国府町の気延山周辺と並び、周辺一帯には多数の古墳群が密集する地域として周知され、以前から古墳群の存在が指摘されている地域である。事前の分布調査の際には中世の山城が存在する可能性が高いと見込まれていた。四国横断自動車道建設に伴い、分布調査で推定された遺跡の範囲の内10,000㎡を調査対象面積として試掘調査を実施した。調査に際し、現況の地形測量を実施した。当初、中世山城と予想されていたため、空壕など山城を構成する遺構およびその範囲の確認に努めた。トレンチの設定に際しては、曲輪と思われる地点と尾根筋の平坦面に試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘調査は平成12年５月16日～６月30日にかけて人力掘削によるトレンチを330㎡実施した。その結果、当初、地形的に中世山城と推定されていたが、中世期の遺構・遺物は検出されず、調査区全域において弥生時代後期の土器・石器の出土がみられ、弥生時代の高地性集落であることが確認された。また弥生時代の遺構・遺物の他に、調査地の南側で古墳時代後期と思われる円墳を確認したため、9,670㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査については、当初、直営方式で実施したが、約10,000㎡の調査面積の大部分が急斜面という地形的条件による掘削作業の困難さ、麓への土砂の流出の危険など安全管理上の問題が生じてきた。これに対応し、なおかつ、発掘調査工程の迅速化もかんがみて、平成12年８月より工事請負方式に変更した。本調査は平成12年７月１日～13年３月31日の期間実施された。

（2）発掘調査の方法（第１図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、５mメッシュを１グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に１・２・３…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。



第1図　グリッド配置図

（3）調査日誌抄

2000年

5月1日　調査準備。物品搬入。試掘調査開始。
5月2日　調査地点平板地形測量（S＝1/200）同始。
5月26日　平板地形測量終了。
6月1日　試掘トレンチ設定。トレンチ掘削開始。
6月5日　尾根頂部平坦面トレンチ掘削。弥生土器片・石庖丁等出土。
6月14日　調査区南側尾根張り出し部トレンチ掘削。
6月17日　1号墳腐植土除去および東側斜面トレンチ掘削。

6月23日　尾根頂部平坦面遺構検出作業。
6月26日　尾根頂部平坦面遺構検出作業および東側斜面トレンチ掘削。
7月5日　1号墳掘り下げ。石室の一部検出。
7月13日　調査区北側人力掘削。1号墳主体部および墳丘掘り下げ。
8月1日　工事請負方式に変更。調査区北側より人力掘削および遺構検出作業を展開。
8月7日　尾根頂部平坦面において竪穴住居跡検出。計10軒確認。
8月17日　竪穴住居跡掘り下げ。調査区東・西側斜面人力掘削。
8月23日　1号墳主体部全景写真撮影。
8月29日　東・西斜面遺構検出作業。
9月4日　西側斜面部において環濠状の遺構（SD1001）検出。
9月14日　SD1001確認トレンチ掘削。立ち上がりは確認できず、壕状にはならないため、段状遺構1（SD1001）と呼称することとする。
9月19日　段状遺構1掘り下げ。弥生土器多数出土。
9月22日　調査区北西部段状遺構平坦面より小形仿製鏡出土。
10月16日　調査区平坦面を囲むように、調査区西および南側において段状遺構を検出。南側では一部3条の段状遺構が巡る。東側斜面では検出されなかった。
10月19日　段状遺構等掘り下げ。
11月6日　遺構掘削と併行して、調査区南側斜面人力掘削を実施。
11月15日　南側尾根張り出し部で墳丘状の高まり確認。2号墳として主体部の検出作業を行うが、主体部を確認することができなかった。
11月27日　調査区南側斜面より袋状鉄斧出土。
12月8日　段状遺構・竪穴住居等掘り下げ。
12月18日　2号墳断ち割り。主体部は検出されなかった。
12月22日　竪穴住居群完掘全景写真撮影。1号墳床面遺物出土状況写真撮影。
12月27日　1号墳・2号墳遺物取り上げ作業。

2001年

1月7日　1号墳石室立面図実測。
1月16日　空撮準備。遺構完掘状況全景。
1月17日　調査地点空撮。
1月18日　段状遺構出土遺物取り上げ作業。
1月30日　調査成果プレス発表。
2月3日　カネガ谷遺跡　現地説明会。来場者430人。
2月8日　1号墳断ち割り。段状遺構セクションベルト除去。
2月12日　現場での発掘調査作業終了。
3月2日　現場撤収。

2　調査成果

（1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・5・16図）

調査地点は鳴門市大麻町萩原の阿讃山脈南麓、標高79～119mの尾根上に位置する。麓（平地部）からの比高差は約69～109mを測る。現況は山林である。徳島県鳴門市の南西部、吉野川河口の北岸、鳴門市大麻町の阿讃山脈南麓の低丘陵には多くの古墳が形成され、近隣には萩原墳墓群・大河別神社古墳群・宝幢寺古墳などの前期古墳が所在する。

（2）基本層序（第3図）

調査に際し、現況の地形測量を実施した。当初、中世山城と予想されていたため、空壕など山城を構成する遺構およびその範囲の確認に努めた。トレンチの設定に際しては、曲輪と思われる地点と尾根筋の平坦面に試掘トレンチを設定した。試掘調査の結果、ほぼ調査区全域にわたり弥生土器片・石器の出土がみられ、遺構も確認されたため全面本調査に移行した。

土層堆積状況は1．腐植土　2．風化砂礫土（包含層・遺構面）3．地山（岩盤）である。斜面部分は急峻な地形のため非常に早い速度で風化砂礫土が堆積していた。基本層序は以下の通り調査区全域でほぼ対応する。

1．黒褐色10YR3/3砂質土（表土、腐葉土。）
2．黄橙色10YR7/4砂質土（ϕ＝3cm前後の砂質泥岩の角礫を含む。やや粘性強い。岩盤風化土。地山。遺物包含層。）
3．明黄褐色10YR6/6砂質土（岩盤・和泉層群の砂質泥岩風化土。ϕ＝20cm前後の砂質泥岩の角礫を含む。やや粘性強い。地山。無遺物層。）

（3）遺構と遺物（第2図）

阿讃山脈南麓の標高79～119mの尾根上に位置し、調査区からは、弥生時代後期初頭の高地性集落と古墳時代中期と後期の円墳が各々1基確認された。

本遺跡は標高110m前後の尾根上に形成された高地性集落である。段状遺構3条・竪穴住居跡13軒・焼土坑1・ピット40などが検出された。出土した土器から弥生時代後期初頭に位置付けられる。その他の遺構としては、性格不明遺構、土坑12基、柱穴36基が出土した。

古墳時代では2基の円墳が出土した。遺存状態は良好ではないが、尾根頂部先端に6世紀後半の横穴式石室をもつ直径11mの円墳が構築されている。また一段低い尾根頂部に墳丘状の地形が残り、裾部より5世紀後半の須恵器甕・杯が出土している。

主な遺構　竪穴住居跡13・段状遺構3・焼土坑1・円墳2　など。
主な遺物　金属器　小型仿製鏡・鍬鎌・袋状鉄斧・鉄製刀子・鉄鏃など。
　　弥生土器　壺・甕・高杯・鉢など（報告書掲載実測点数1,967点）。
　　石　器　石鏃（磨製23・打製141）・石庖丁24・柱状片刃石斧4・太形蛤刃石斧1

石杵２・敲石112・石錘２・台石34・緑色凝灰岩製管玉１・土製投弾５
石製投弾1,224など（報告書掲載実測点数527点）。

遺物総点数　38,600点
（報告書掲載実測点数3,811点）

遺物点数は、38,600点、28ℓコンテナで250箱の出土量であった。本遺跡における出土遺物の大半は包含層および段状遺構から出土したものである。急峻な傾斜地のためか、出土土器は、小片で摩滅が激しく、調整の判別するものは少ないゆえ、器種等の認定に誤りがあった場合は御容赦されたい。最終的に報告書に掲載したのは、報告書掲載実測点数3,811点で、土器2,015点・石器527点であった。また石器・石製品のうちサヌカイトの総重量は、5,326.3gで、内訳は製品3,447.6g、剥片類が1,878gであった。

弥生時代

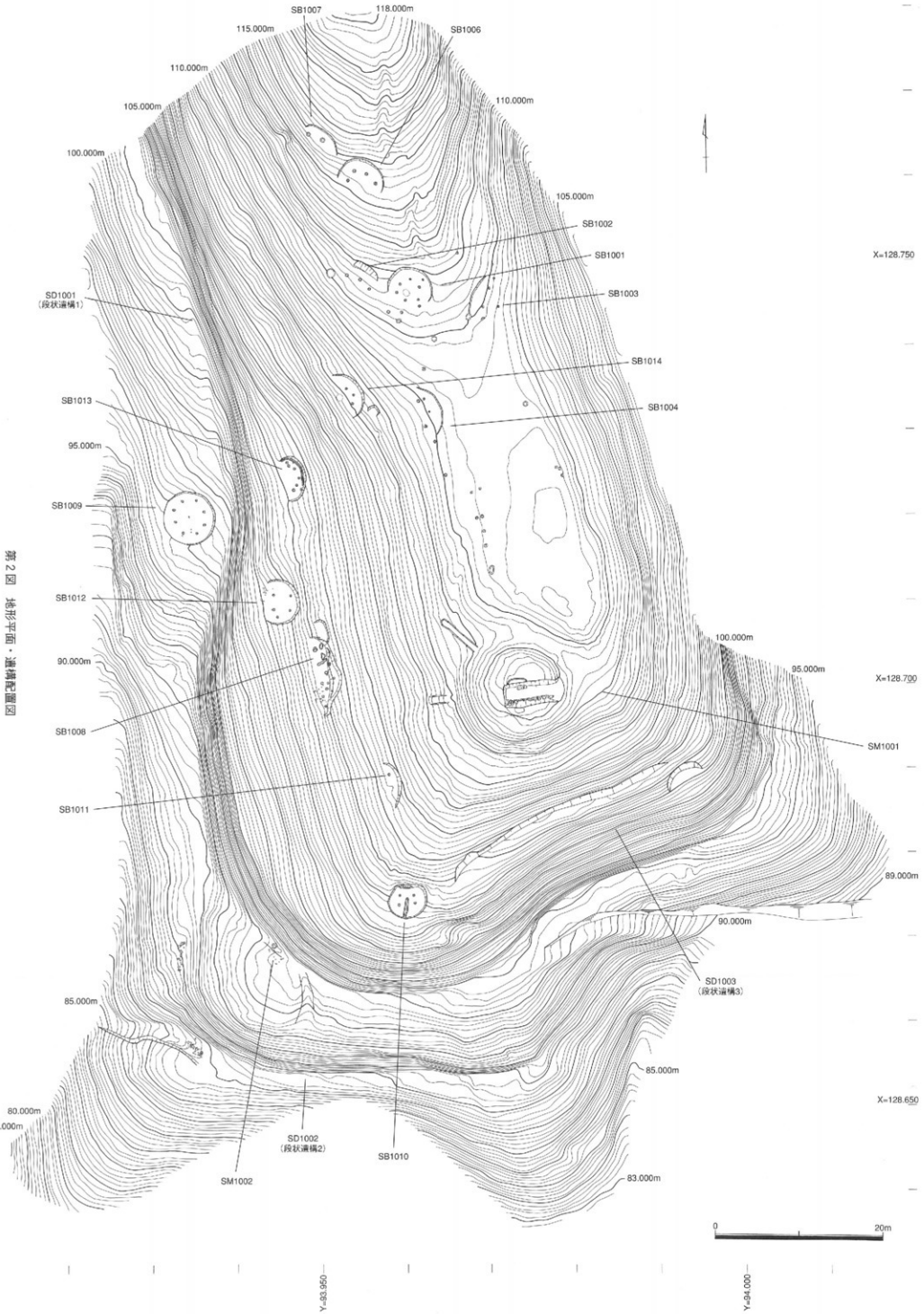
SD（段状遺構）（第２図）

竪穴住居群を囲むように地形に沿って、調査区西側および南側斜面において延長約170mが検出された。斜面を大規模に「L」字状にカットしており、カット面の高さは約５mで、幅約５mのテラス状の地形をとどめる。立ち上がりは確認できないが、環濠であった可能性も残る。一部２重の箇所がある。調査区東側は急峻な地形をそのまま利用しており、段状遺構は構築されていない。調査区から北約50mには尾根を分断する壕状の地形が残っている。段状遺構もしくは環濠が北側壕状地形まで延びるとすれば、これらに囲まれた集落の推定面積は約10,000㎡に及ぶ。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。基底面から多くの弥生土器が出土した。

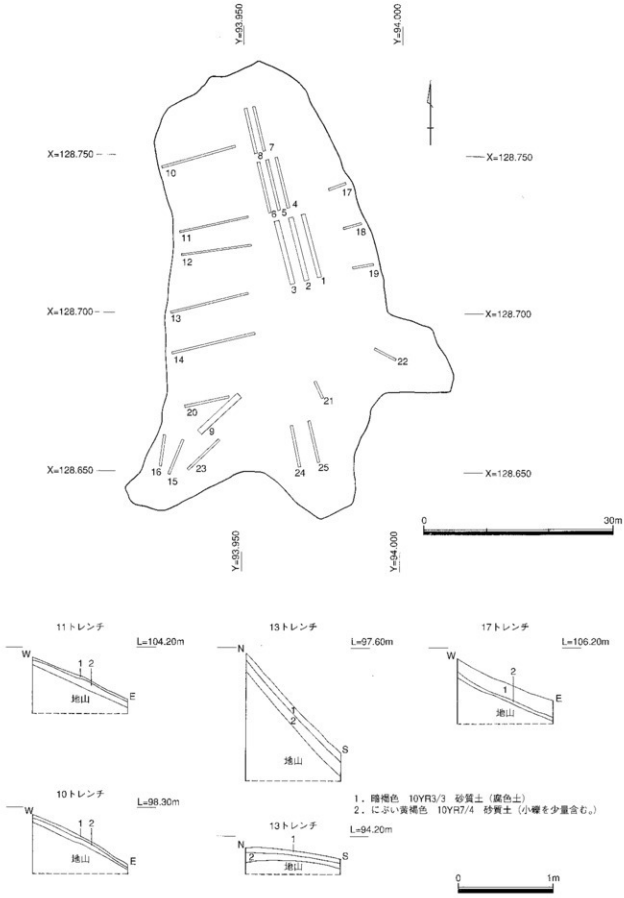
段状遺構は斜面を「L」字状にカットすることで平坦な地形を造りだすものである。段状遺構という呼称については、遺構の造成過程において与えられた名称であり、その形状や規模、および付帯施設等について多くのバリエーションを持っている。従って段状遺構という一遺構の中でも様々な機能的差異を持つと考えられるのである。弥生時代の高地性集落で検出される段状遺構については、未だに機能的に不明な点を残しており、近年においても様々な検討が成されている。

SD1001（段状遺構１）（第２・４～６図）

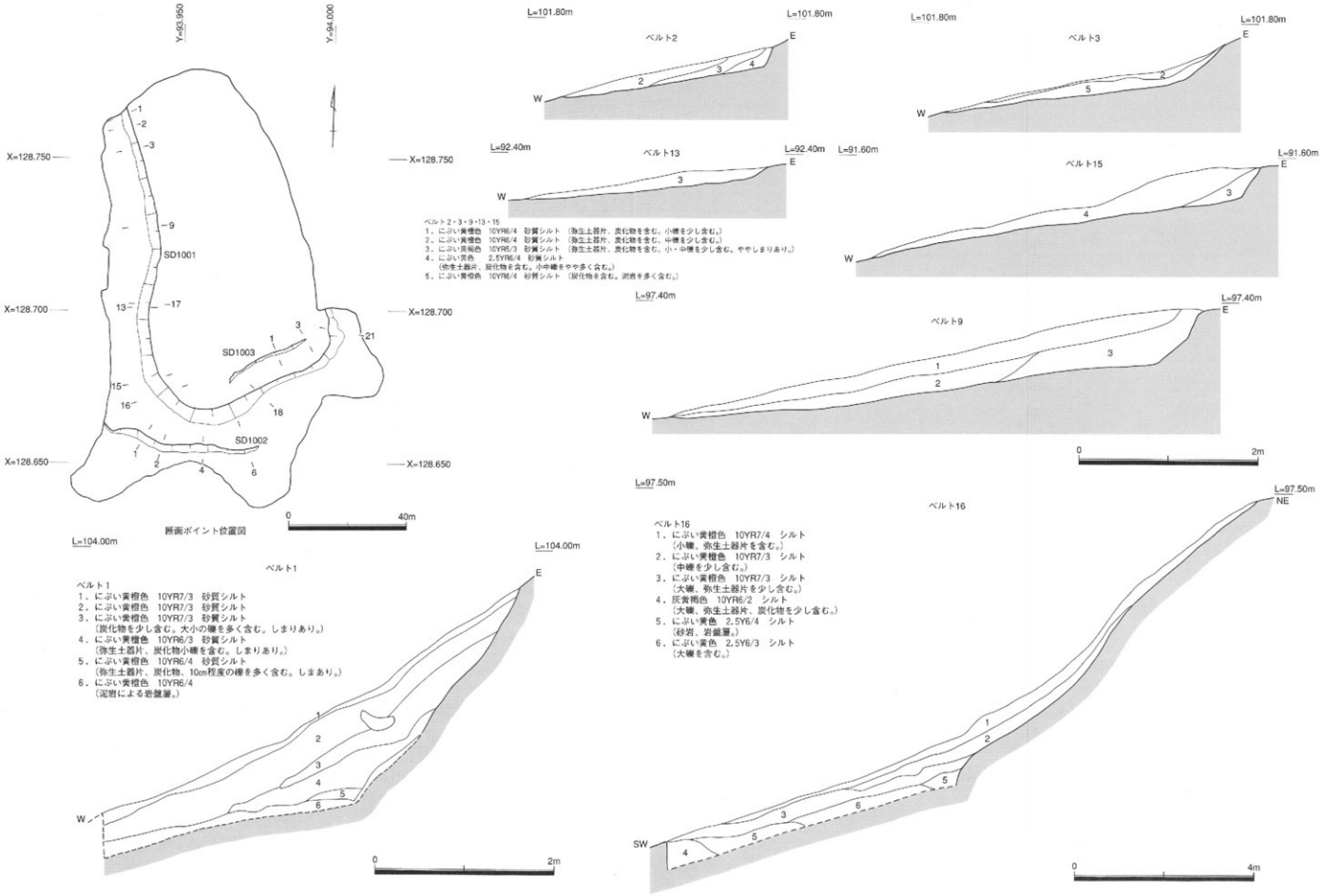
段状遺構はカネガ谷遺跡の性格を特徴付けるのに不可欠な遺構である。遺構は竪穴住居群を囲むように地形に沿って、標高100.00m前後の地点の調査区西側および南側斜面において延長約170mが検出された。斜面を大規模に「L」字状にカットしており、カット面の高さは約５mで、幅約５mのテラス状の地形をとどめる。立ち上がりは確認できないが、環濠であった可能性も残る。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。基底面から多くの弥生土器が出土した。また調査区北西部、A'-8グリッド、段状遺構基底面から小形仿製鏡が出土した。



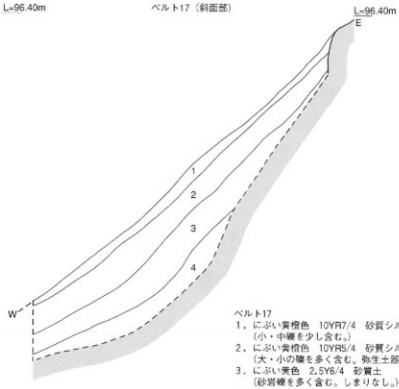
第２図　地形平面・遺構配置図

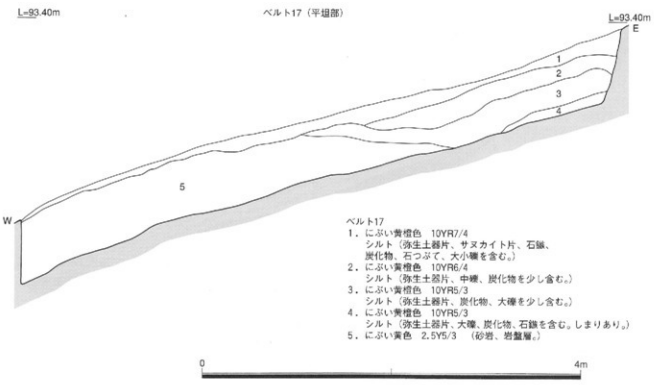


第３図　トレンチ配置・基本土層柱状図

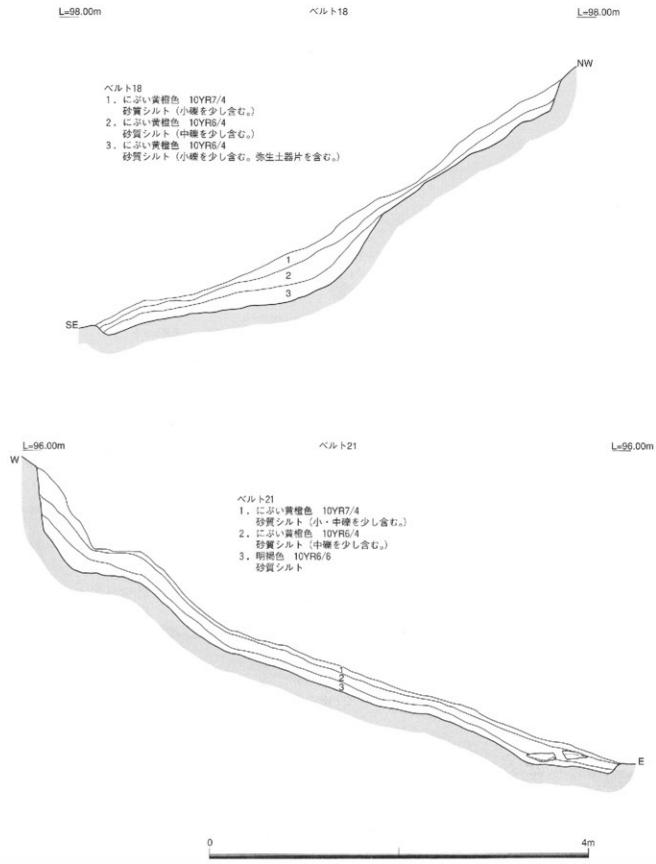


第４図　SD1001土層断面図１

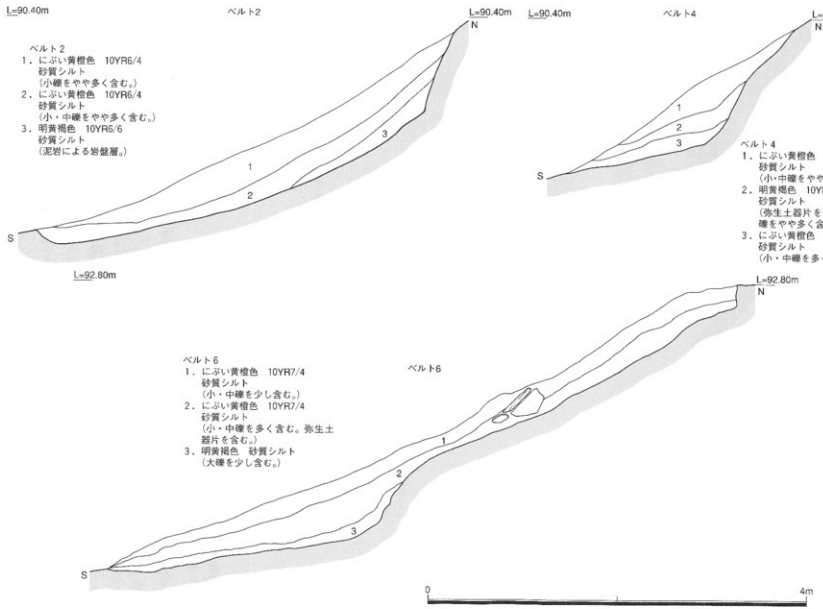




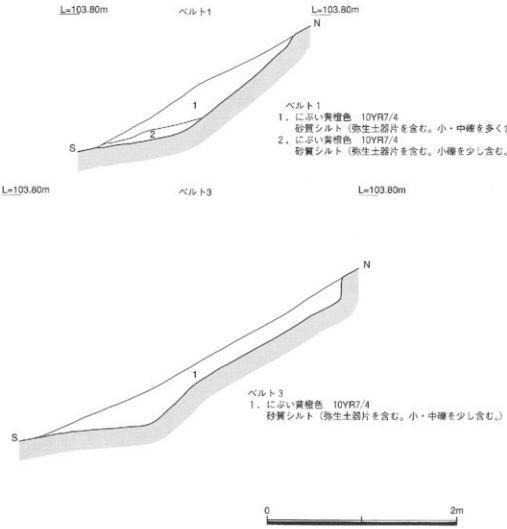
第５図　SD1001土層断面図２



第6図　SD1001土層断面図3



第7図　SD1002土層断面図

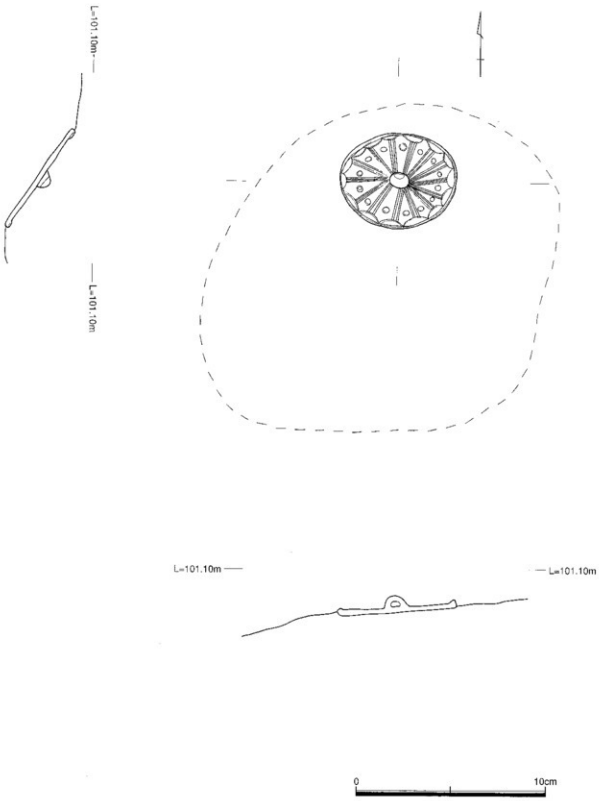


第8図　SD1003土層断面図

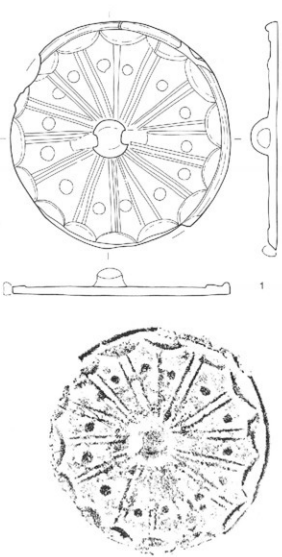
出土遺物（第9～42図）

小形仿製鏡（内行花文放射線状文鏡）（第9・10図）

調査区北西部の段状遺構基底面より出土した。鏡面からの鈕高6.6㎜、鏡縁高3㎜、直径6.1㎝、重量30.4g。鏡縁の1/2を欠損するが、細い蒲鉾縁で、鏡縁に接して連弧文が巡る。双線13本および単線1本からなる平行直線文が鈕から鏡縁に向かって放射状に配され、間に14個の乳文が配置される。鈕座はない。鈕孔のわたし痕が明瞭に残る。鏡周辺から出土した土器の年代（弥生時代後期初頭）ともあわせて初期の仿製鏡とみられる。弥生時代後期以降に出現する面径10cm以下の小形仿製鏡は、これまで全国で200面以上出土しており、北部九州を中心に東は群馬県に及ぶ範囲に分布する。その多くは中国製の内行花文日光鏡や重圏文日光鏡と呼ばれる鏡を原鏡として、主として北部九州で製作された仿製鏡であり、一部朝鮮半島南部での製作も指摘されている。仿製鏡の製作開始期である弥生時代後期初頭では朝鮮半島南部・対馬・北部九州にその分布がある。



第９図　SD1001平坦面　弥生小形仿製鏡出土状況平・断面図（破線は銅イオンによる黒灰色化範囲）



第10図　SD1001平坦面出土　弥生小形仿製鏡（内行花文放射線状文仿製鏡）・拓影

仿製鏡群の中で内行花文放射線状文鏡は、韓国慶尚北道永川郡漁隠洞遺跡・同大邱市坪里洞遺跡に出土例がある朝鮮半島製作の韓鏡である（高倉 1990）。いずれも面径14.9cmの大形鏡で、平縁・内行花文帯（連弧文帯）・突線があり、内区へと続く。内区は放射状に描かれた平行直線で区画され、間を乳または「井」字状文で埋める。この鏡の文様構成に類似する小形鏡がある。1例は熊本県玉名郡菊水町諏訪原遺跡出土鏡で、平縁で内区の乳文と平行直線を写した小片である。もう1例がカネガ谷鏡である。

カネガ谷鏡は内区を分ける突線こそ省略するが、内行花文帯・乳文・平行直線を写した韓鏡と系譜がつながる小形仿製鏡である。朝鮮半島南部で仿製された可能性が高いが、内行花文帯をもつ小形放射線状文仿製鏡としてはカネガ谷鏡が今回初めての出土であり、北部九州以東への仿製鏡の流入時期や経路

を考えるうえでも極めて重要な資料である。

出土状況からは意図的な廃棄であるかは断定できない。周辺の段状遺構平坦面からは弥生時代後期初頭頃の土器片が出土しており、鏡の埋没時期についても当該期と推測される。弥生仿製鏡の編年による時間軸（高倉 1993）と本遺跡出土の土器型式を比較すれば、鏡の製作後、ほぼ時間差なく入手し、短期間のうちに廃棄されたものと想定される。

袋状鉄斧（第11図）

1は調査区南部、H-8グリッド、段状遺構（SD1001）平坦面から出土した。

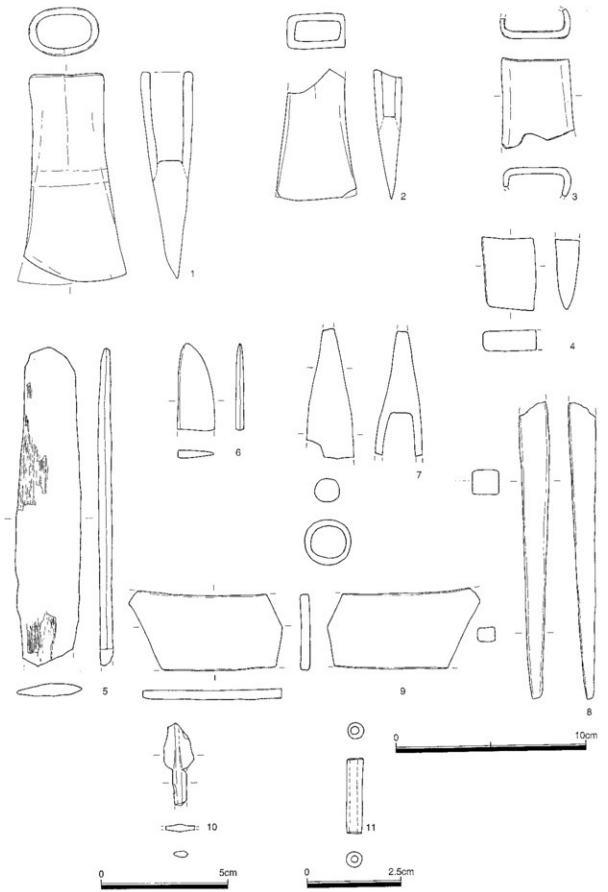
全長11.0cm。刃部幅5.5cm。現状で重量279.5gの鍛造鉄斧である。袋部の断面形は隅丸長方形を呈する。折り返しが密閉しているため、鋳造鉄斧と見紛う精巧な作りである。正面形は刃部左側が使用により磨滅しており、非対称となっている。時期的には、周辺で出土した弥生土器から弥生時代後期初頭と思われる。袋状鉄斧は、袋部と刃部が別作りで袋部の接合痕が容易に認め難く、ヤ（矢）あるいはエバリ（柄張り）と呼ばれる内型を使用して極めて丁寧に鍛打する技術で製作された形式のものである。この形式のものは楽浪郡台城里10号墓（BC２C中）・楽浪郡貞柏洞６号墳（BC２C末～BC１C）に最古例があり、楽浪地域を中心に朝鮮半島で10例ほど散見する。日本では福岡県青ヶ浦遺跡Ａ（弥生中期後半）・福岡県スダレ遺跡（弥生中期前半）・長崎県赤崎遺跡Ａ（弥生後期初頭）・広島県高陽台遺跡Ａ（弥生後期中葉）・広島県金平遺跡Ａ（弥生終末期）に類例があり、朝鮮半島からの舶載品とみられている。カネガ谷例も形態上から朝鮮半島製とみられ、金属学的分析（第２分冊　自然科学分析編参照）からも朝鮮半島製と考えられるが、舶載品としては北部九州以外の地域で出土した最古例である。

出土金属器・玉類（第11図）

段状遺構およびその周辺からは上記の遺物の他、希少な遺物も出土している。2・3・4は1と同様、朝鮮半島からの舶載品とみられる鍛造袋状鉄斧である。技術的には1と同様、丁寧な鍛打により製作されている。3は袋部、4は刃部である。5は鉄剣である。一部木質が残存している。6は鉄製刀子の刃部である。7は鉄鉾である。小片のため全体の形状は判明しないが、縦断面形状から刃部と柄部は鍛接されていると思われる。横断面形状は円形を呈する。8は鉄鑿である。鍛造により製作されている。刃部は片刃である。断面形は長方形で形態的には鏨状を呈する。9は鉄鎌であると思われるが詳細は不明である。10は銅鉄である。鏃身部および茎部の一部が残存する。鏃身部外縁を欠損しているため、遺存状態が悪く詳細な形態は不明である。茎部断面形はやや扁平な楕円形状を呈する。11は緑色凝灰岩製の管玉である。この管玉は石川県小松地域が原産地であるとの分析結果がでている（第２分冊　自然科学分析編参照）。

出土土器（第12～32図）

第12図-1～第22図-56・第26図-41～44・第27図-1～９は壺である。SD1001から出土したものは307点を数える。第23図-1～第26図-40・第27図-10～第28図-59は甕である。出土点数は201点を数える。第29図-1～13は鉢とし、13点を数える。第29図-14～19・第30図-1～第32図-21は高杯である。出土点数107点である。いずれも時期的には弥生時代後期初頭頃に位置付けられる。厳密に正確な傾向を示すとは言えないが、壺が出土点数の約50％を占めている。出土土器の中には１のように、胎土に角閃石を含むも



第11図　カネガ谷遺跡出土遺物（鍛造袋状鉄斧・鉄剣・鉄鉾・鉄鎌・鉄鑿・鉄製・刀子・銅鏃・緑色凝灰岩製管玉）

のが数点みられ、これらは瀬戸内地域からの搬入品と考えられる。

第32図-22～25は土製投弾である。SD1001から出土したものは4点を数える。武器と考えられ、弾弓あるいは投石器（帯）の玉と思われる。形態はラグビーボール状を呈し、両端は尖る。断面形は円形である。小さいが、硬く焼き締まる。完形品は22のみであるが、法量は全長：4.8cm、断面最大径：2.6cm、重さ：30.1gを測り、他の土製投弾もほぼこれに類するものと考えられる。なお25・26の表面に強い被熱痕がみられ、鞴羽口の破片あるいは、それの投弾への転用が考えられ、鍛冶生産の可能性を示唆する。

出土石器（第33～42図）

第33図は石鏃である。磨製と打製のものが見られる。磨製石鏃は金属器模倣とみられ、粘板岩の剥片を素材とする。形態的にはやや細身で弱い凹基で、断面形状は扁平な菱形あるいは六角形となっている。打製石鏃はバリエーションがあるが、サヌカイトを石材とし、4cmを超える大形で細身、断面が菱形を呈する厚手のものが目立つ。第34図-1・2は石庖丁、3・4はスクレイパー、5・6は楔形石器、7は石錐、8・9はUFである。10・11は柱状片刃石斧である。第35図1・2は石核、3～8は剥片である。第36図-1～第39図-5は敲石である。第40図-1・2は磨石である。1は扁平な砂岩円礫を用い、下縁（作業面）に稜が立っている。第40図-3～第42図-2は台石である。第42図-3は砥石である。礫石器は砂岩の自然円礫が主体的であるが、凝灰岩・泥岩も僅かながら使用される。

SD1002（段状遺構2）（第2・7図）

調査区南部、段状遺構1の下を東西に延びる。標高95.00m前後の地点の調査区南側斜面において延長約50mが検出された。段状遺構1より規模は小さいが、斜面を「L」字状にカットして造りだしている。カット面の高さは約1.5mで、幅約1.5mのテラス状の地形をとどめる。立ち上がりは確認できないが、環濠であった可能性も残る。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。基底面から多くの弥生土器の他、銅鏃や袋状鉄斧が出土している。また遺構東側の基底面で明瞭な掘形をもたないが、焼土や被熱し赤褐色に変色した岩盤礫など火の使用の痕跡と思われる直径1m程度の拡がりがみられた。

出土遺物

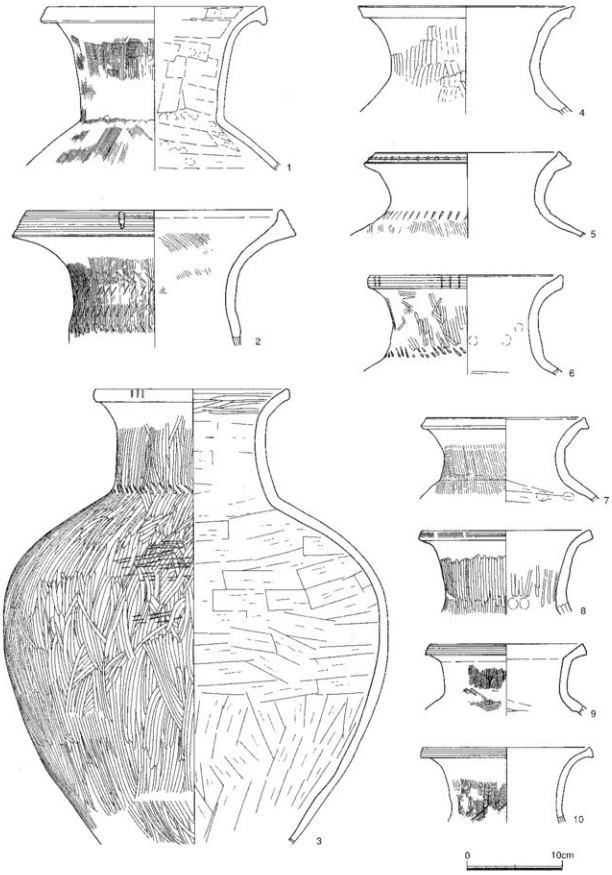
第43図の1～7が壺。8～12が甕。13が高杯である。

SD1003（段状遺構3）（第2・8図）

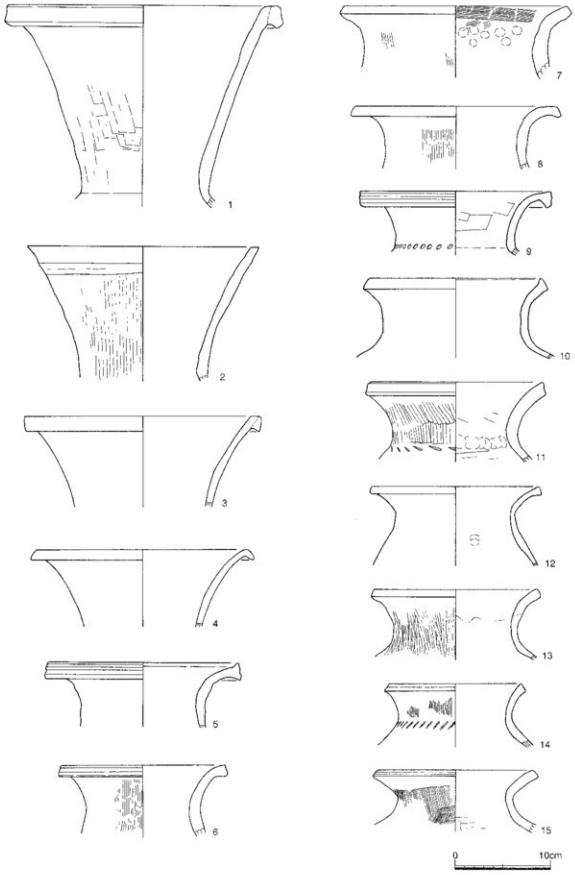
調査区南部、段状遺構1の上を東西に延びる。標高105.00m前後の地点の調査区南側斜面において延長約30mが検出された。出土した段状遺構の中で最も規模が小さい。斜面を「L」字状にカットして造りだし、カット面の高さは約1mで、幅約1mのテラス状の地形をとどめる。立ち上がりは確認できないが、環濠であった可能性も残る。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

出土遺物

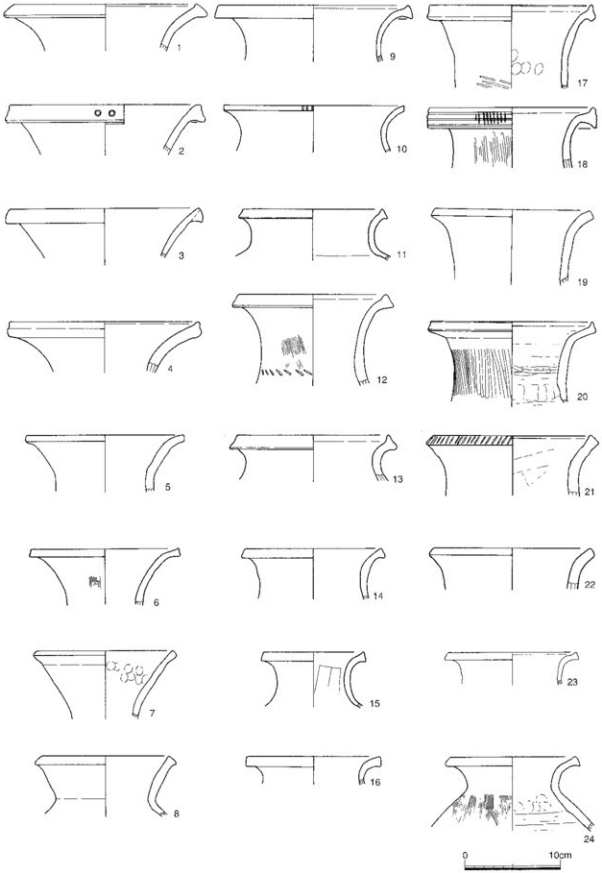
1は高杯の脚部である。



第12図　SD1001出土土器 1

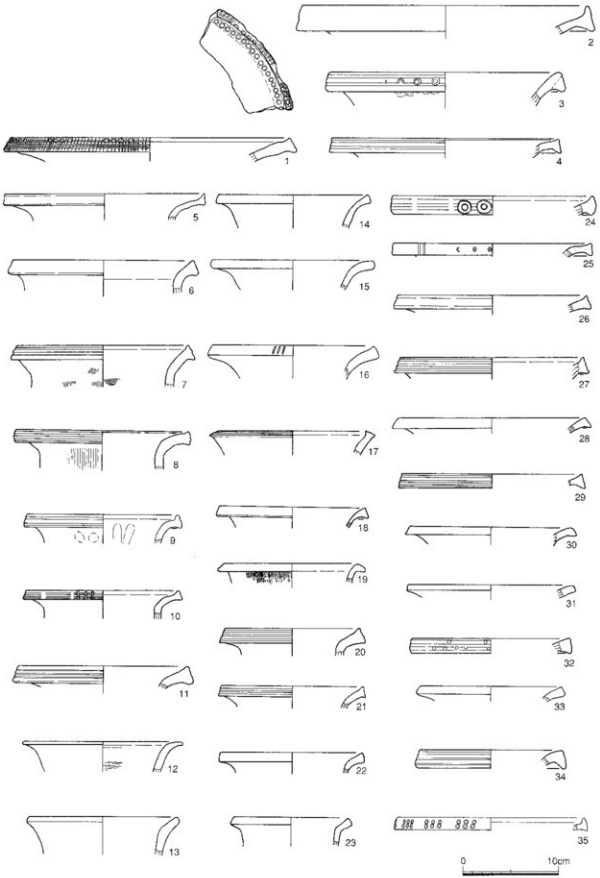


第13図　SD1001出土土器 2

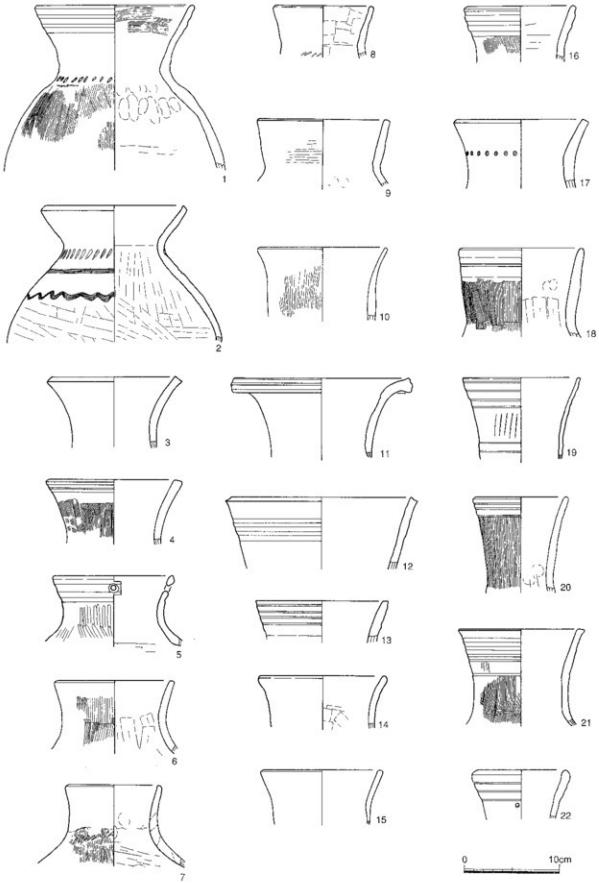


第14図　SD1001出土土器 3

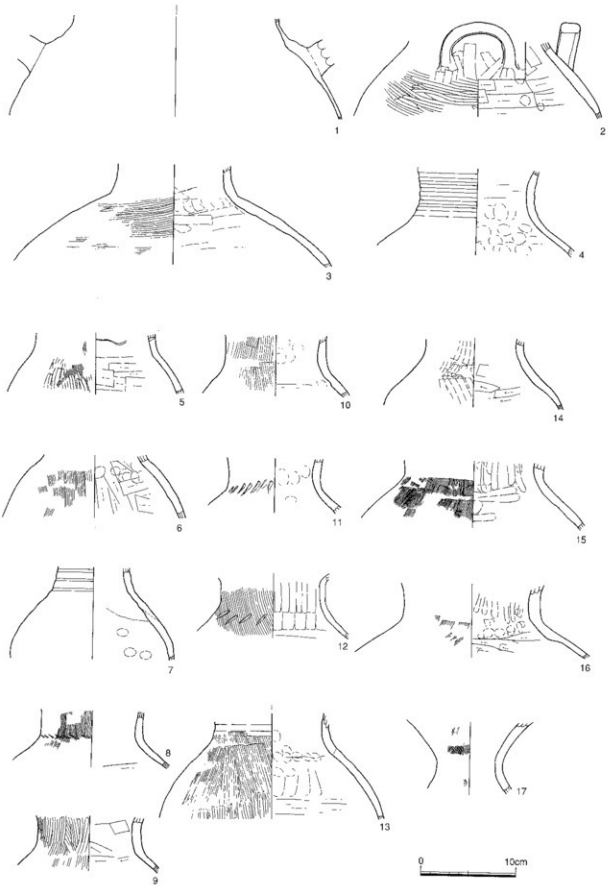
第15図　SD1001出土土器 4



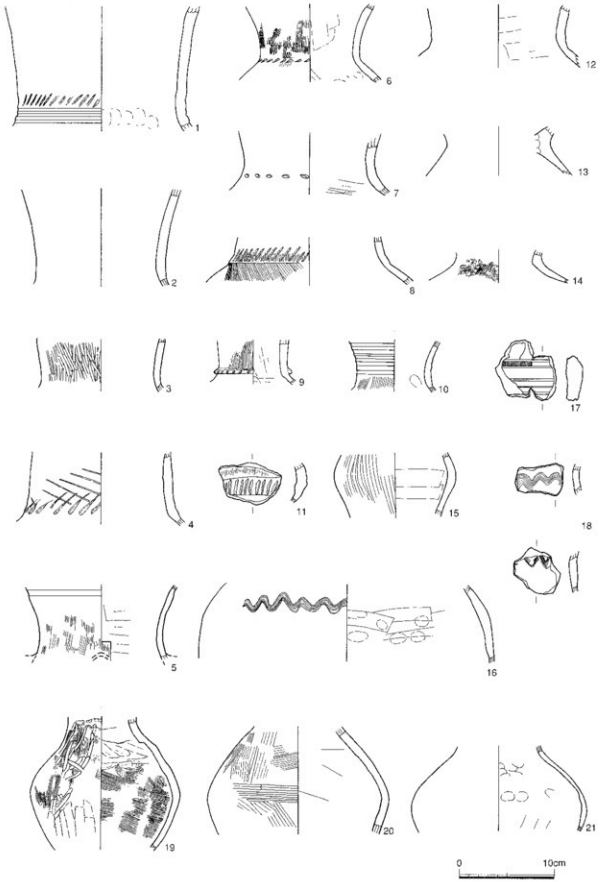
第16図　SD1001出土土器 5



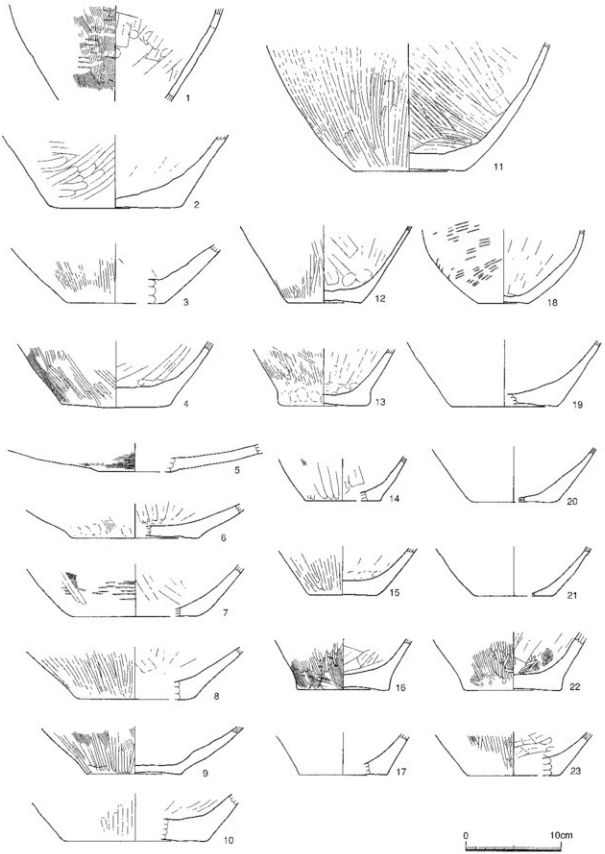
第17図　SD1001出土土器6



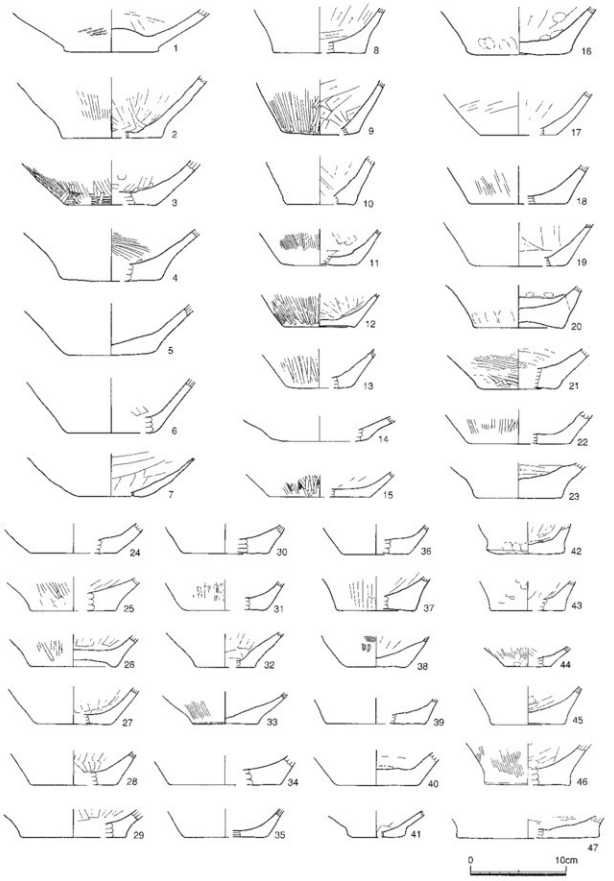
第18図　SD1001出土土器7



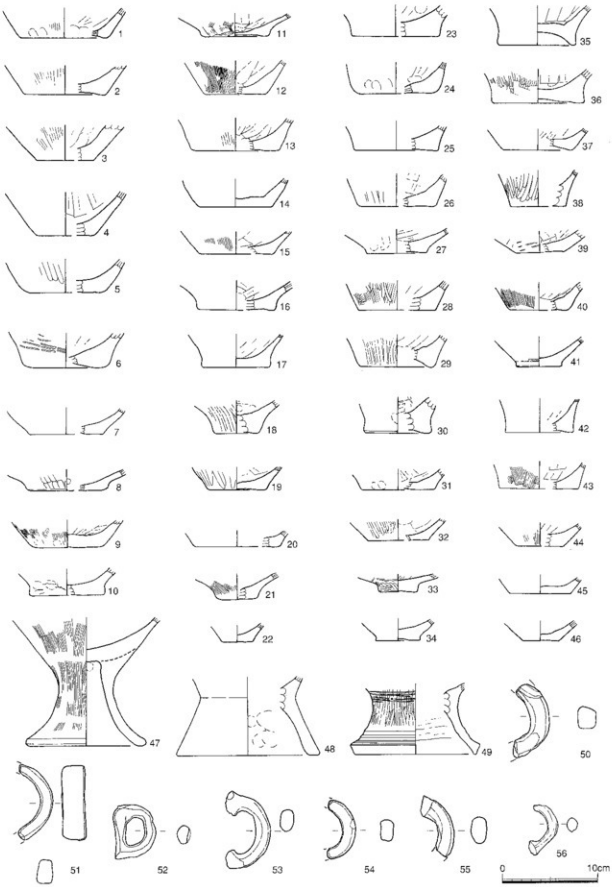
第19図　SD1001出土土器 8



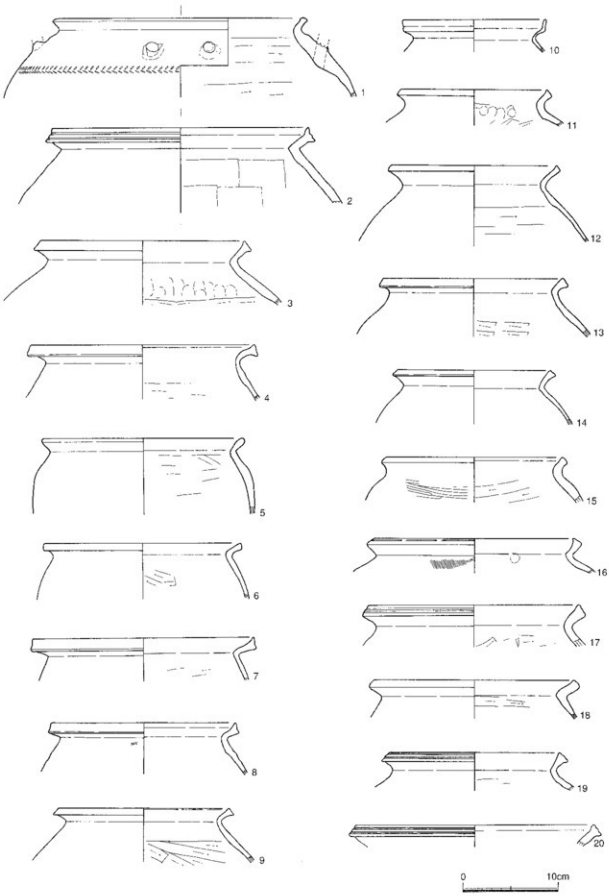
第20図　SD1001出土土器 9



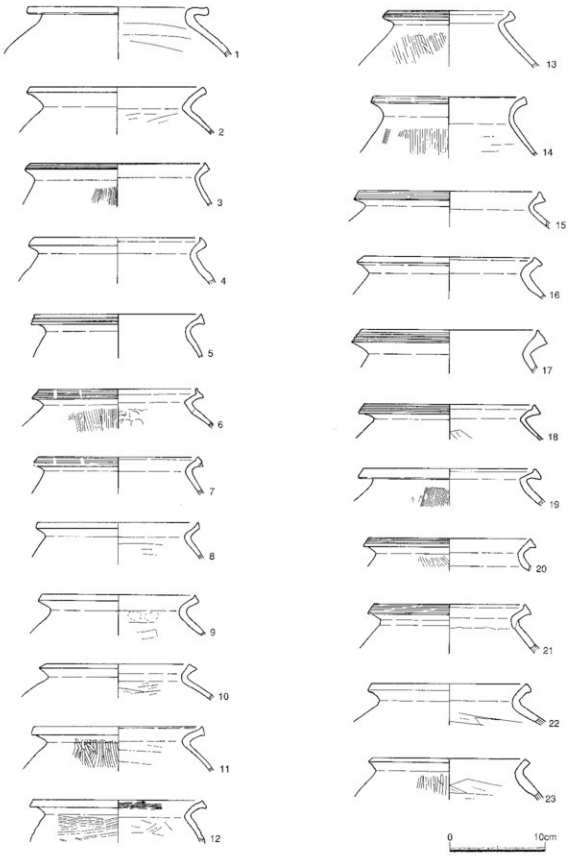
第21図　SD1001出土土器10



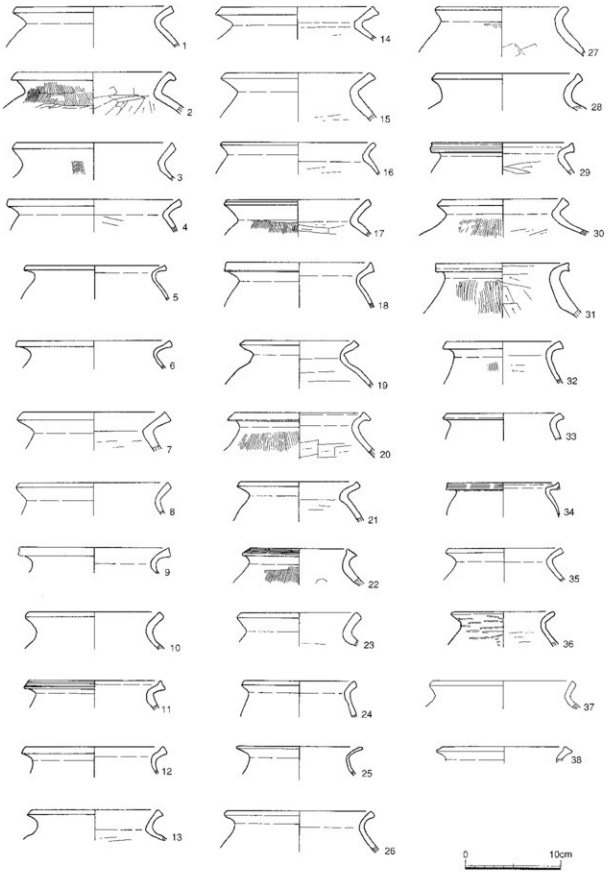
第22図　SD1001出土土器11



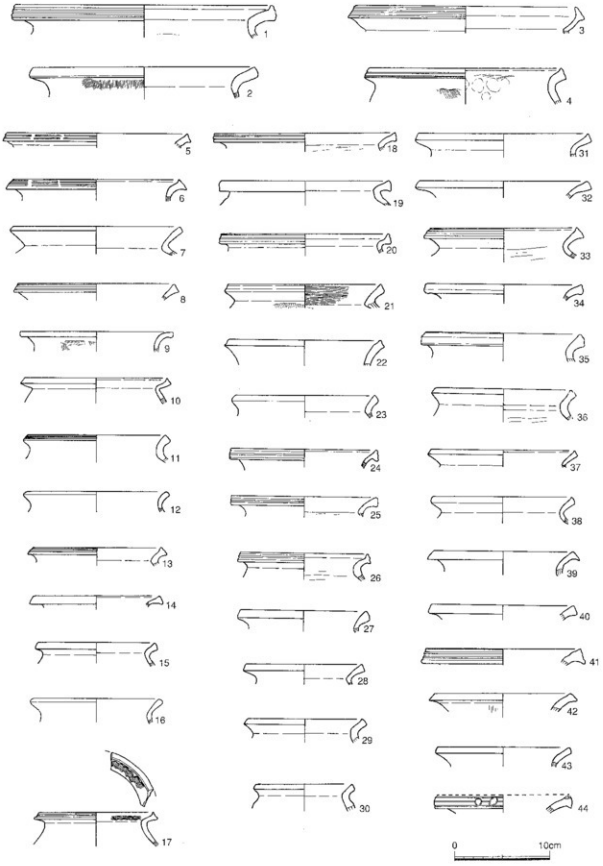
第23図　SD1001出土土器12



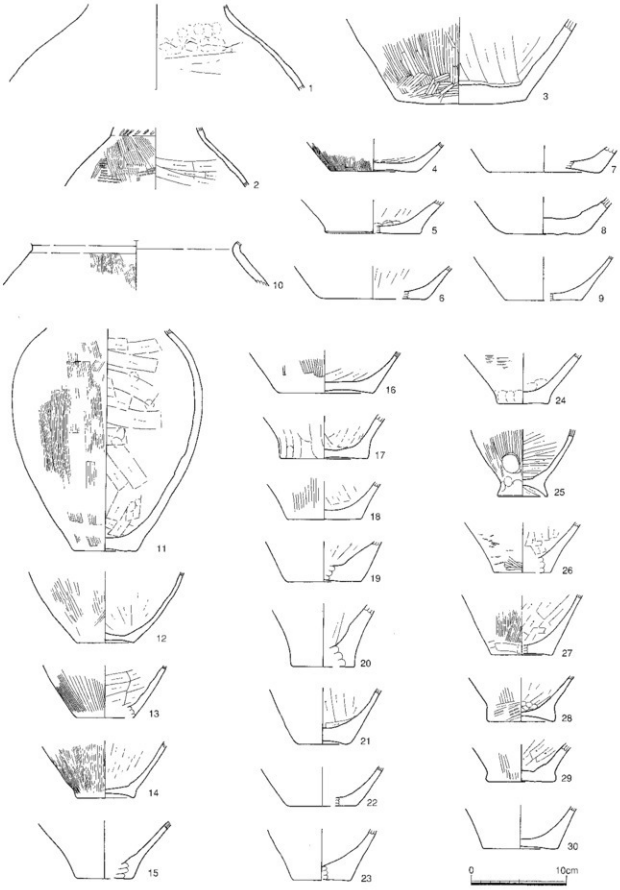
第24図　SD1001出土土器13



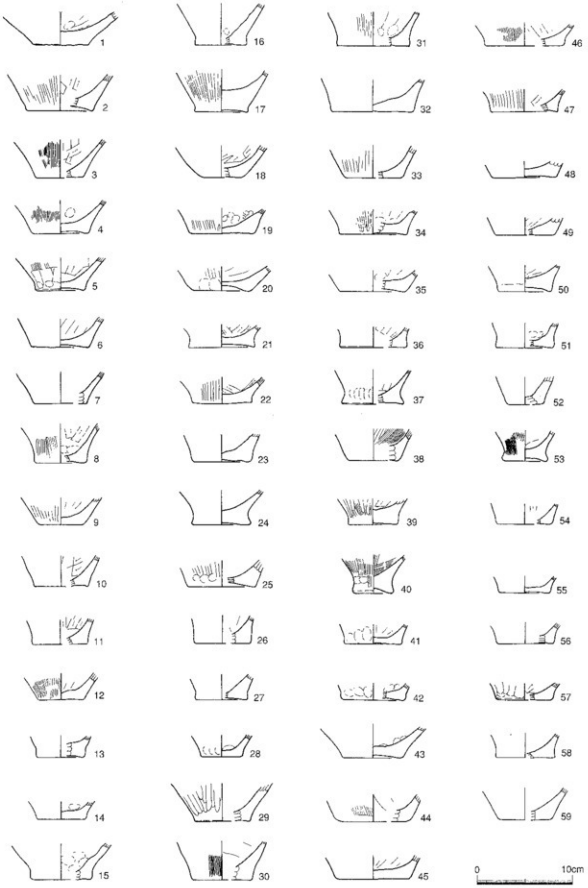
第25図　SD1001出土土器14



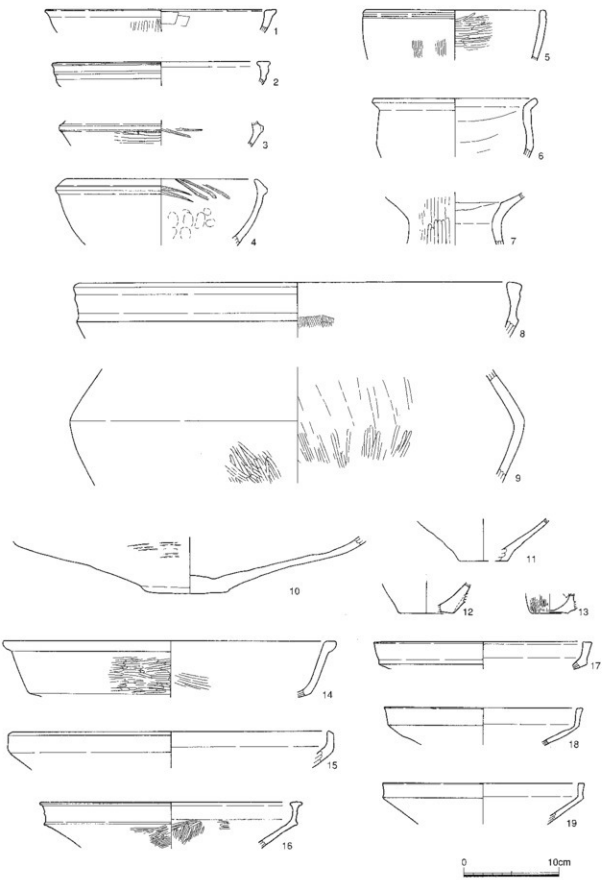
第26図　SD1001出土土器15



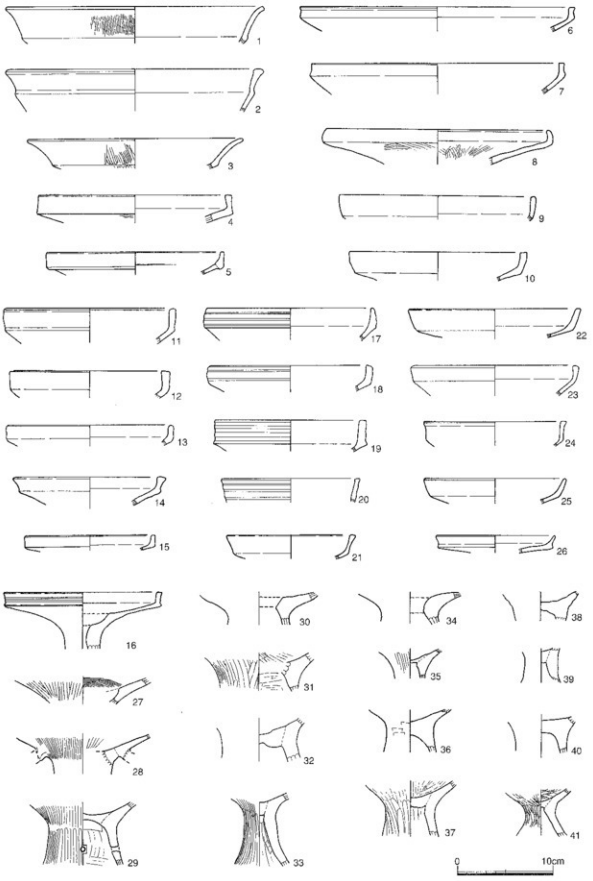
第27図　SD1001出土土器16



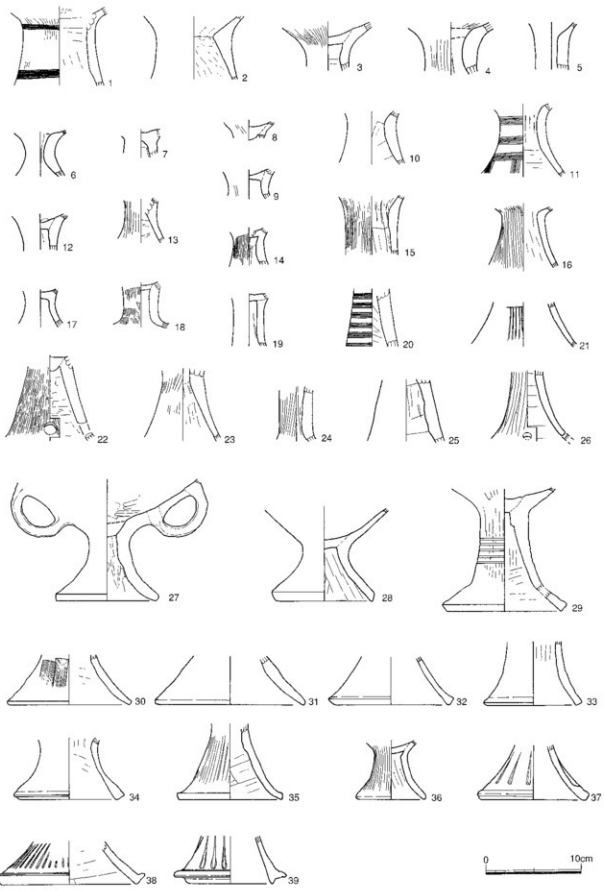
第28図　SD1001出土土器17



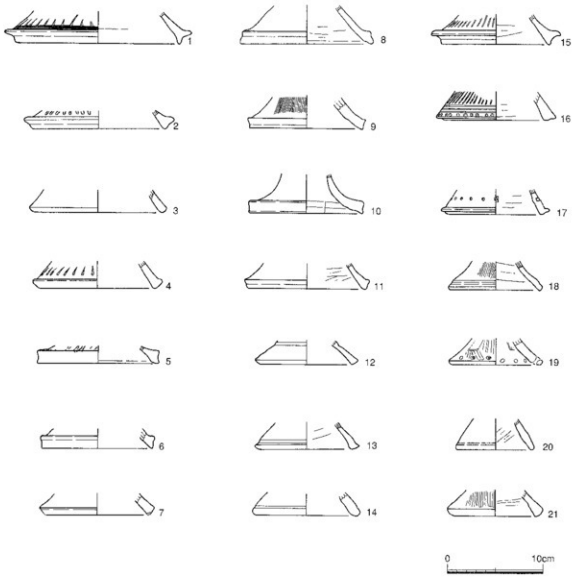
第29図　SD1001出土土器18



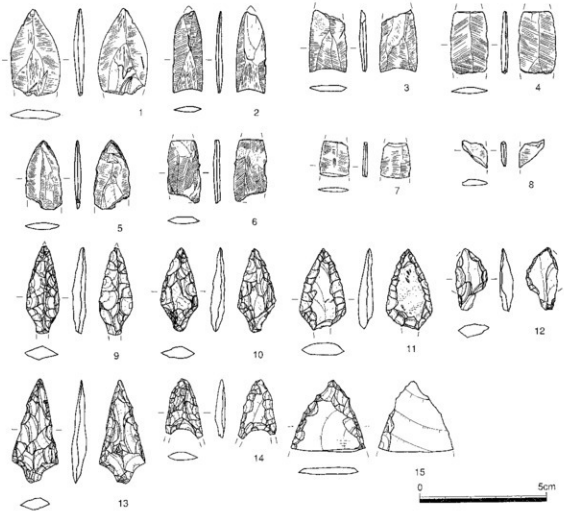
第30図　SD1001出土土器19



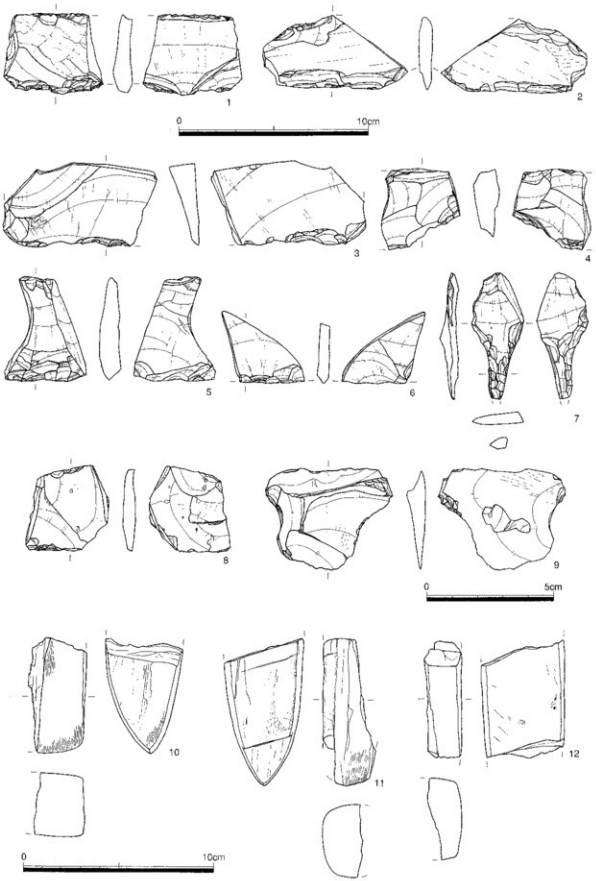
第31図　SD1001出土土器20



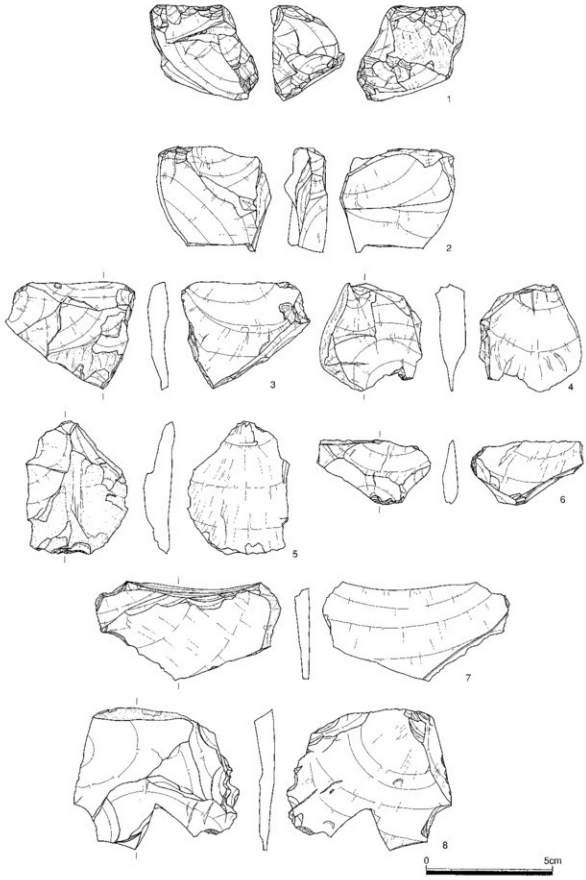
第32図　SD1001出土土器21



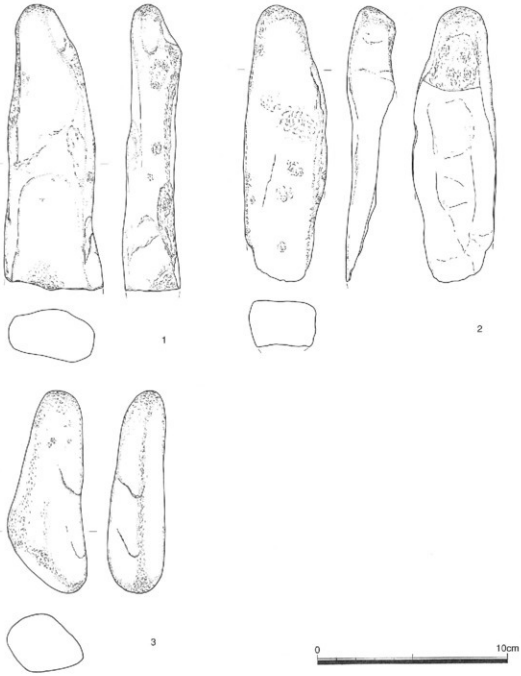
第33図　SD1001出土石器1



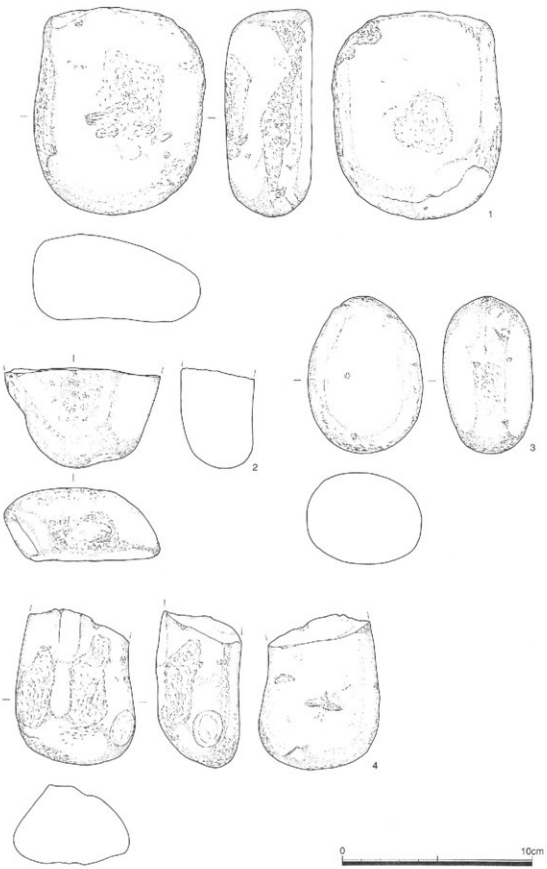
第34図　SD1001出土石器 2



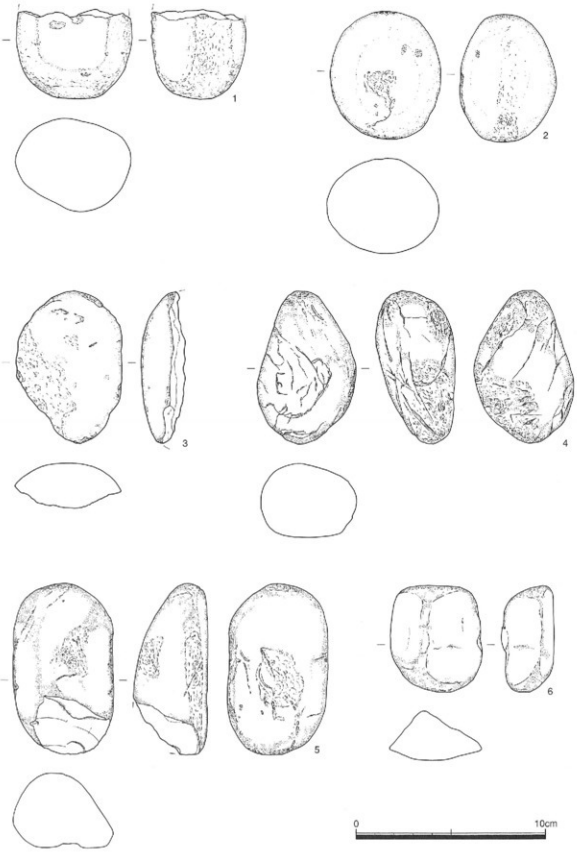
第35図　SD1001出土石器 3



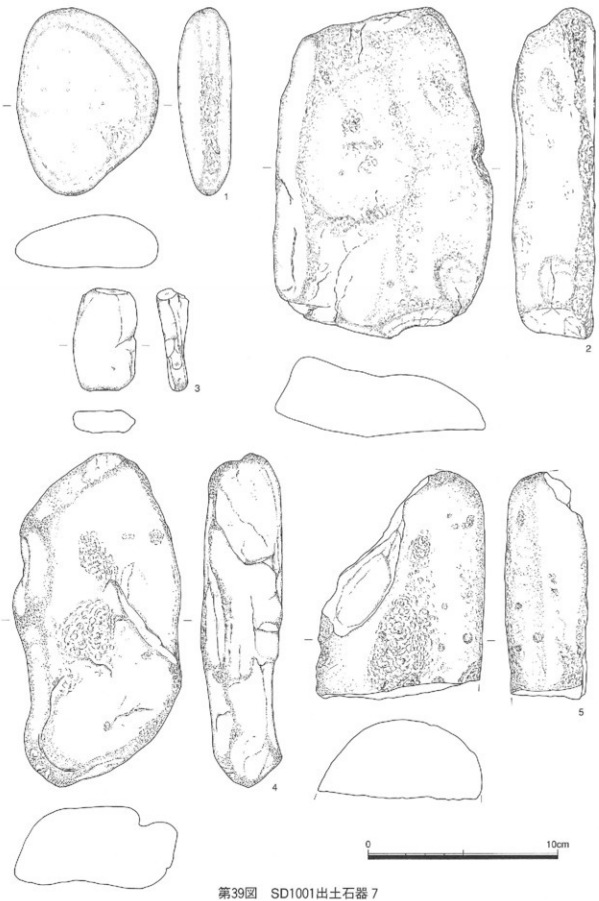
第36図　SD1001出土石器 4



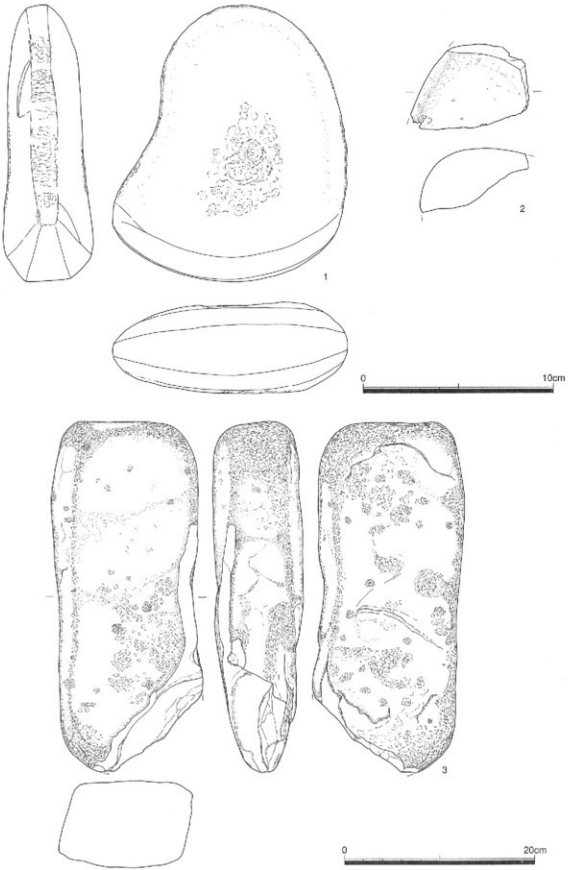
第37図　SD1001出土石器 5



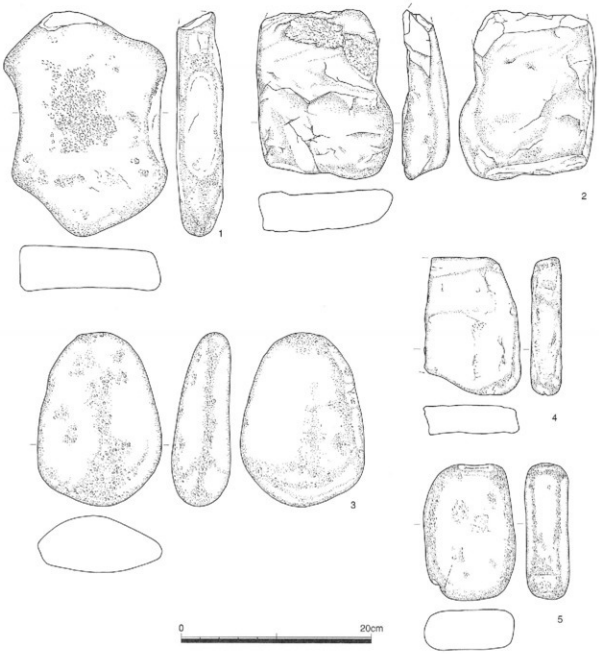
第38図　SD1001出土石器 6



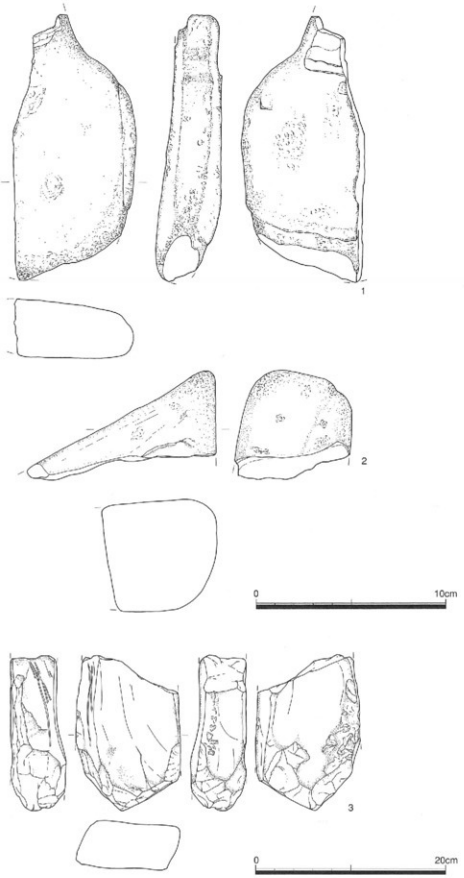
第39図　SD1001出土石器 7



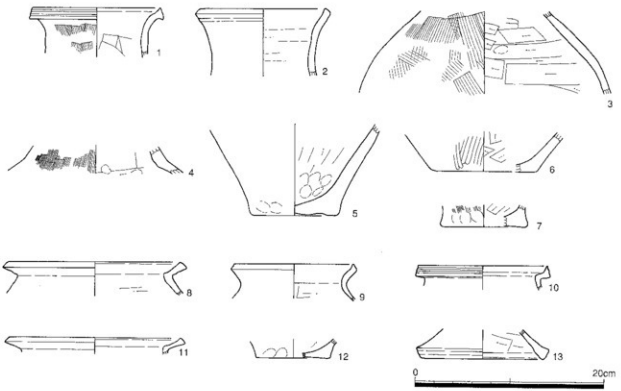
第40図　SD1001出土石器 8



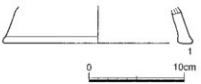
第41図　SD1001出土石器 9



第42図　SD1001出土石器10



第43図　SD1002出土土器



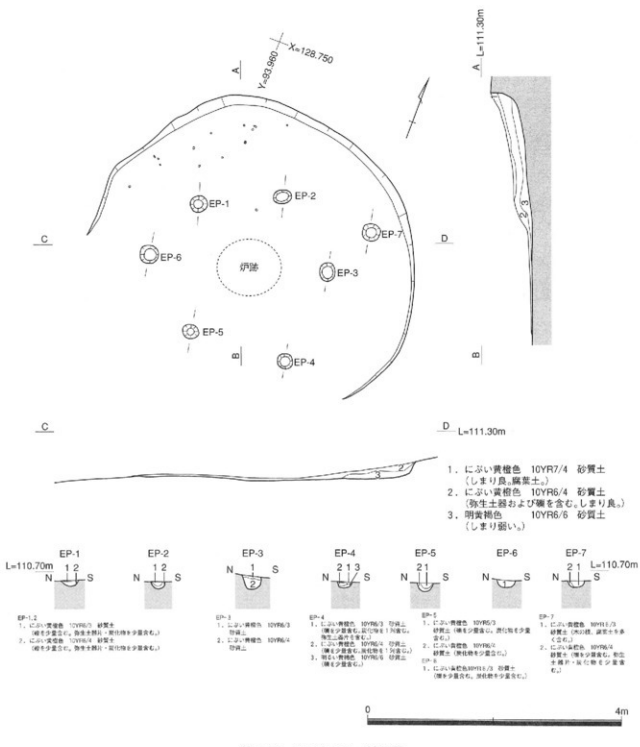
第44図　SD1003出土土器

SB（竪穴住居跡）（第２図）

本遺跡で出土した竪穴住居跡は、計13軒である。南西側斜面において石器製作跡を含む竪穴住居跡群を検出し、段状遺構に囲まれている範囲では12軒が出土している。主柱は６本が主体となるが、全容が分かるものは少ない。山頂部の平坦面には確認されていない。住居内の遺物の出土量が少なく、各住居とも単一時期であることから、集落の存続期間が短期であったことが確認される。竪穴住居跡とした中には平面プランが曖昧なものもあり、必ずしも竪穴住居跡と断定し難いものがあるのも否めない事実である。最終的に住居施設として評価し得るものは10軒程度であると考えられる。なお、SB1005は遺構検出段階でSBとして遺構番号を付したが、その後の発掘調査作業の中でSBとして認定し難いため、SBから削除した。本来なら報告書作製の整理作業の中で遺構番号を見直すべきではあるが、整理作業の混乱を避けるため欠番として扱ったことをご容赦願いたい。

SB1001（1号竪穴住居跡）（第45図）

調査区北部、X・Y-10・11グリッド、標高115.00m前後の南向きの斜面上に位置する。南側部分は一部消失しており、半円形の平面プランを呈する。残存状態は比較的良好である。規模は現存長で直径長軸5.2m、短軸4.6m、最大深度は66cmを測る。主柱穴は6本と思われる。中央部には炉跡も検出された。周壁溝は検出されていない。

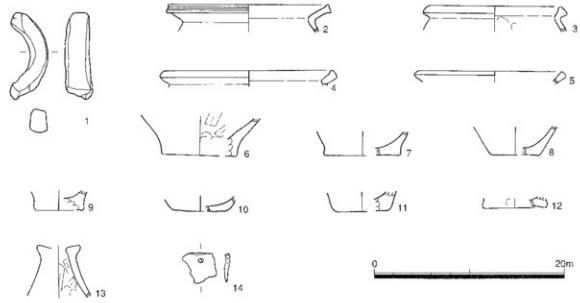


第45図　SB1001平・断面図

出土遺物

出土土器（第46図）

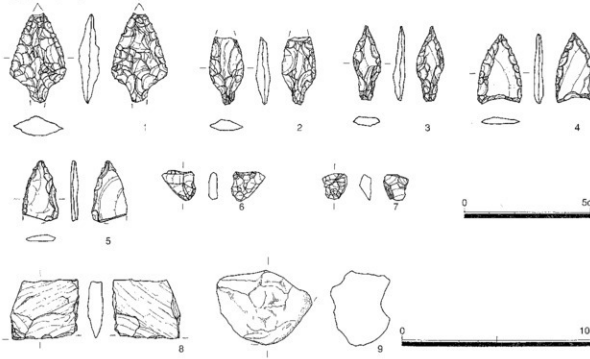
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、器種は甕・高杯が出土している。時期的には後期初頭頃と思われる。



第46図　SB1001出土土器

出土石器（第47図）

1～5はサヌカイト製の石鏃、6・7はチャートの剥片である。8は石庖丁で石材は片岩、9は砂岩の敲石である。



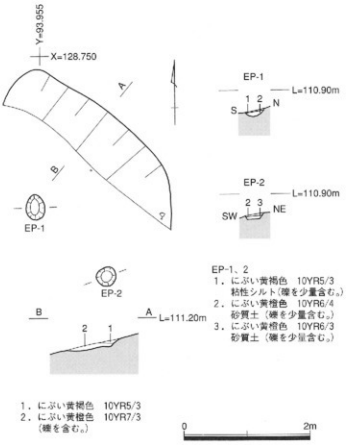
第47図　SB1001出土石器

SB1002（2号竪穴住居跡）（第48図）

調査区中央部、Y-9・10グリッド、標高111.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。直径4m前後の円形であったと思われるが、西側部分は一部消失しており、半円形の平面プランをとどめる。規模は現存長で長軸2.50m、短軸2.20m、最大深度は10cmを測る。主柱穴は6本と思われる。周壁溝は南側で不明瞭になっている。炉跡は検出されていない。

出土遺物

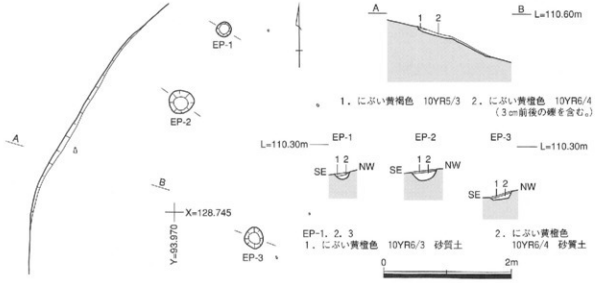
弥生土器片等が出土しているが、小片のため実測可能なものはなかった。



第48図　SB1002平・断面図

SB1003（3号竪穴住居跡）（第49図）

調査区北部、X・Y-12・13グリッド、標高110.00m前後の南東向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランをとどめる。直径5m前後の円形であったと思われるが、南側約2/3が消失しており、全体は不明である。規模は現存長で長軸7.20m、短軸5.90m、最大深度は5cmを測る。床面検出の柱穴は不安定であるが、主柱穴は8本になると思われる。炉跡および周壁溝は検出されていない。

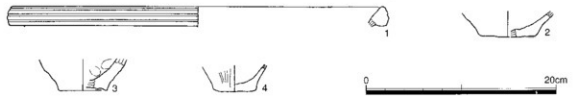


第49図　SB1003平・断面図

出土遺物

出土土器（第50図）

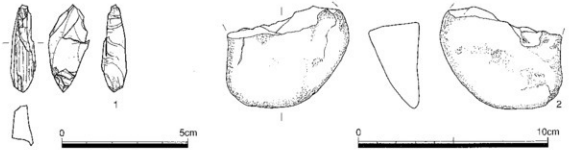
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、1～4はいずれも壺である。時期的には後期初頭頃と思われる。



第50図　SB1003　出土土器

出土石器（第51図）

1は楔形石器、2は敲石である。



第51図　SB1003出土石器

SB1004（4号竪穴住居跡）（第52図）

調査区北部、V-11グリッド、標高110.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランをとどめる。直径5m前後の円形であったと思われるが、西側約2/3が消失しており、全体は不明である。規模は現存長で長軸6.20m、短軸3.00m、最大深度は30cmを測る。床面検出の柱穴は明瞭でなく、主柱穴は不明である。炉跡および周壁溝は検出されていない。

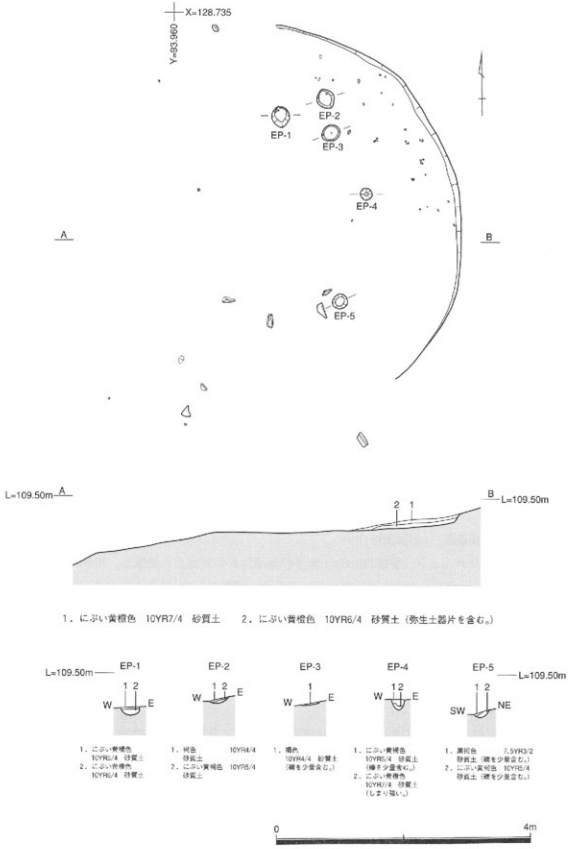
出土遺物

出土土器（第53図）

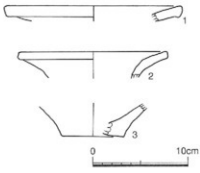
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、1～3はいずれも壺である。時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第54図）

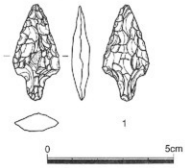
石錘の打製石鏃が1点出土している。石材はサヌカイトで、大形でやや幅広、厚手の形状を呈する。



第52図　SB1004平・断面図



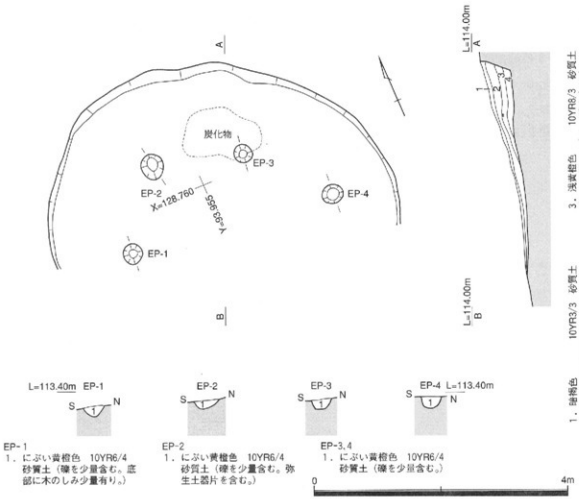
第53図 SB1004出土土器



第54図 SB1004出土石器

SB1006（6号竪穴住居跡）（第55図）

調査区北部、A'・B'-9・10グリッド、標高114.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランを呈する。南側が約1/2消失している。規模は現存長で長軸6.20m、短軸3.00m、最大深度は30cmで、直径6m前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は4本確認されており、柱穴間から推定すると主柱穴は6本であると思われる。炉跡および周壁溝は検出されていない。



第55図 SB1006平・断面図

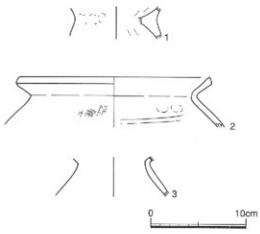
出土遺物

出土土器（第56図）

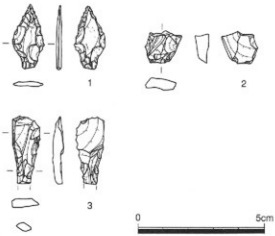
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、1は台付壺の底部、2・3は壺である。時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第57図）

1は石鏃である。2はチャートの剥片、3は石錐で尖端部欠損する。石材はいずれもサヌカイトである。



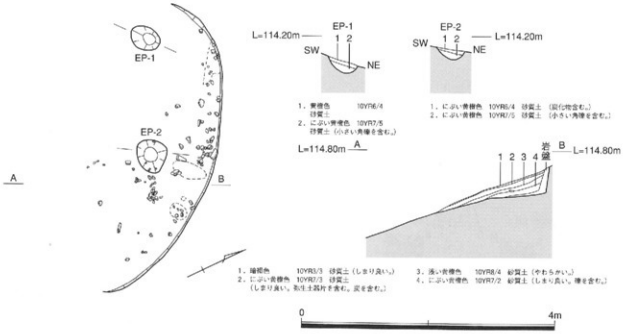
第56図　SB1006出土土器



第57図　SB1006出土石器

SB1007（7号竪穴住居跡）（第58図）

調査区北部、B'・C'-8・9グリッド、標高115.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。南側が約1/2消失しており、半円形の平面プランを呈する。規模は現存長で長軸4.60m、短軸1.68m、最大深度は72cmで、直径5m前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は2本確認されているが、主柱



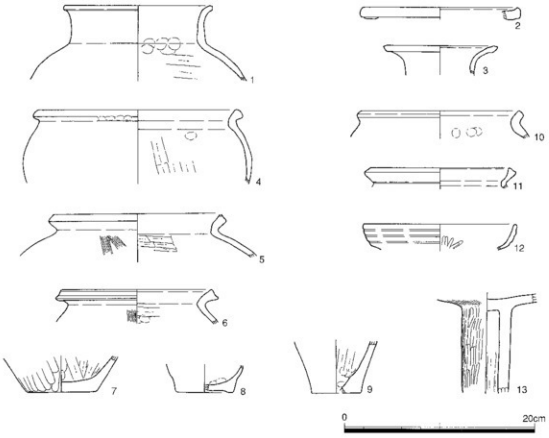
第58図　SB1007平・断面図

穴は不明である。炉跡および周壁溝は検出されていない。図化し得ていないが、床面から炭化米が数点検出された。炭化米の粒長特性から短粒系のジャポニカ種である。

出土遺物

出土土器（第59図）

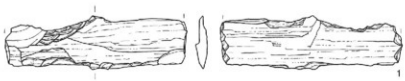
1～3は壺、4～11は甕である。12・13は高杯である。時期的には後期初頭頃と思われる。

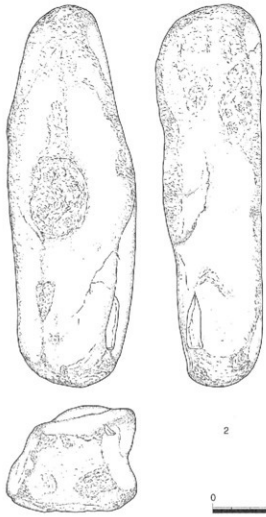


第59図　SB1007出土土器

出土石器（第60図）

1は石庖丁で石材は片岩である。2は敲石である。四角柱状の砂岩自然礫を用いている。





第60図　SB1007出土石器

SB1008（８号竪穴住居跡）（第61図）

調査区中央部、O～Q-8・９グリッド、標高103.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。コンタラインに沿うように検出され、段状を呈する。西側の大部分が消失しているものと思われ、全体は不明である。規模は現存長で長軸11.25m、短軸3.20m、最大深度は1.24mである。平面的には複数の遺構が切り合っているように見えるが、切り合いを確認することはできなかった。床面にはピットが数基出土しているが、不整列であり、主柱穴は不明である。炉跡および周壁溝は検出されていない。遺構内埋土および床面からはサヌカイトの剥片・砕片が多量に検出され、また石鏃などの製品も出土していることから、住居というよりも石器製作工房的な施設であったと考えられる。

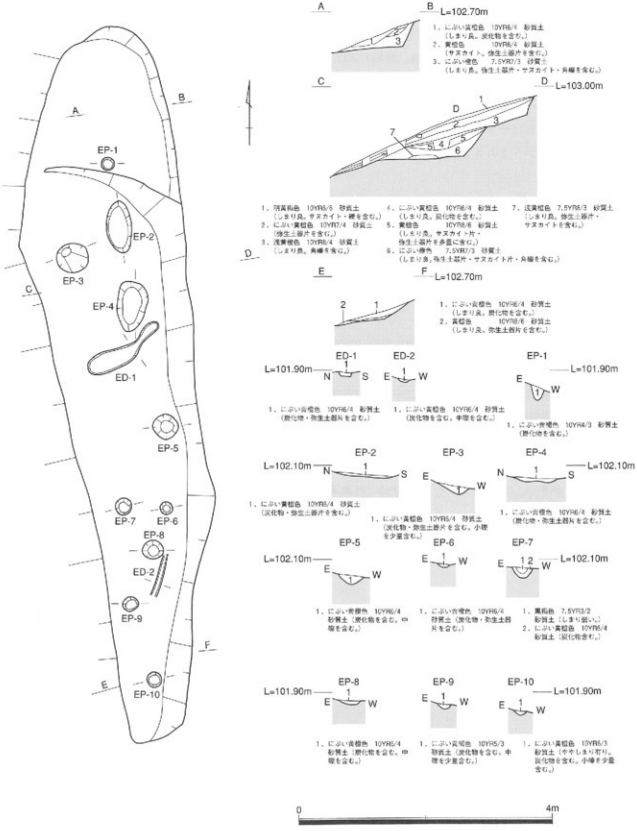
出土遺物

出土土器（第62・63図）

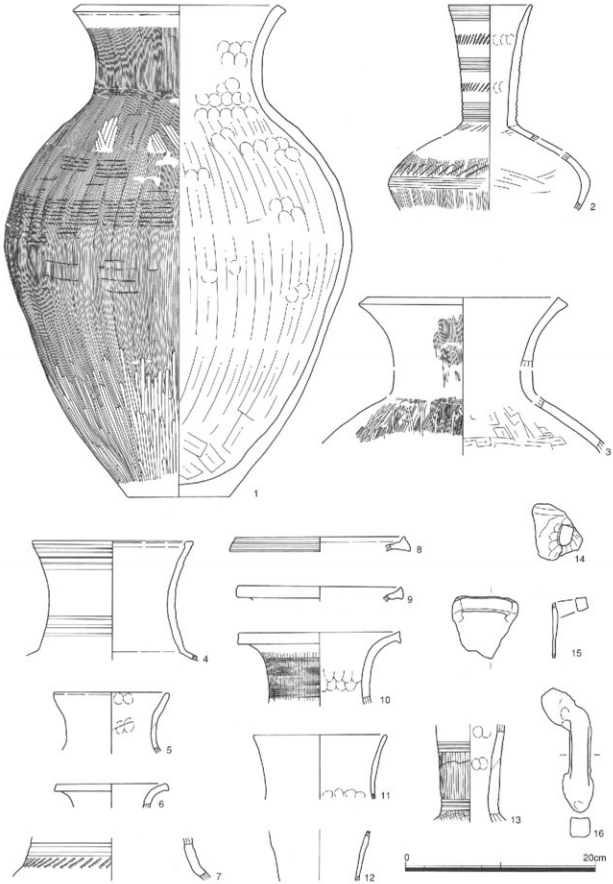
第62図-1～第63図-1～５は壺である。第63図-6～34は甕である。第63図-35～43は高杯である。SD1001と同様、壺が約50%を占める。時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第64～68図）

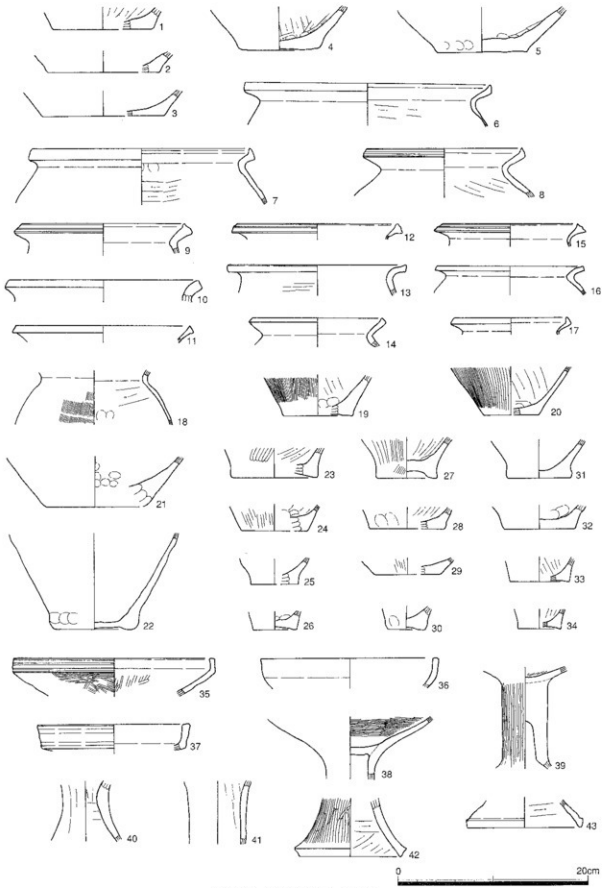
剥片石器の石材はサヌカイト、礫石器は主に砂岩の自然礫を用いているが、凝レイ岩もみられる。第64図-1～６は石鏃である。ただし６については石錐の刃部の可能性がある。第64図-7・８はスクレイパー、９・10は楔形石器である。11～15は剥片の縁辺に調整加工がみられるが、明確でないためRFとした。16は砂岩の自然礫を用いた石錘である。表面に細い溝が彫り込まれている。第65図は石核である。石材はサヌカイトである。一部に自然面が残存しているものも見られる。打面転移あるいは両極打法により、剥片剥離を繰り返して不定形な残核形態となるが、形態的には楔状、または扁平な三角柱状を呈するものが多い。第66図-1～５・第67図-1は敲石である。第66図-6は磨石、第67図-2～４・第68図-1・２は台石である。第67図-2・３、第68図-1・２のように敲打痕が顕著にみられるものもある。



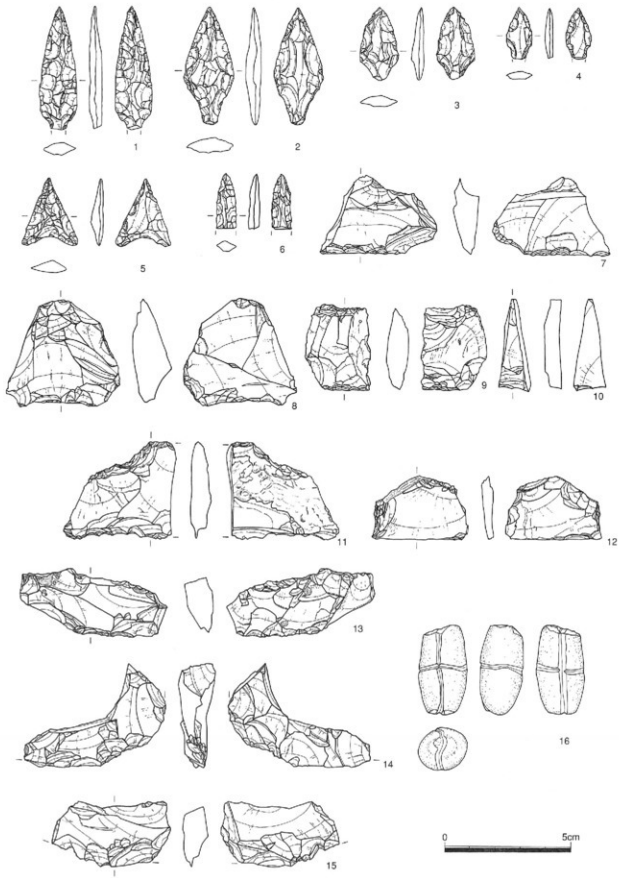
第61図　SB1008平・断面図



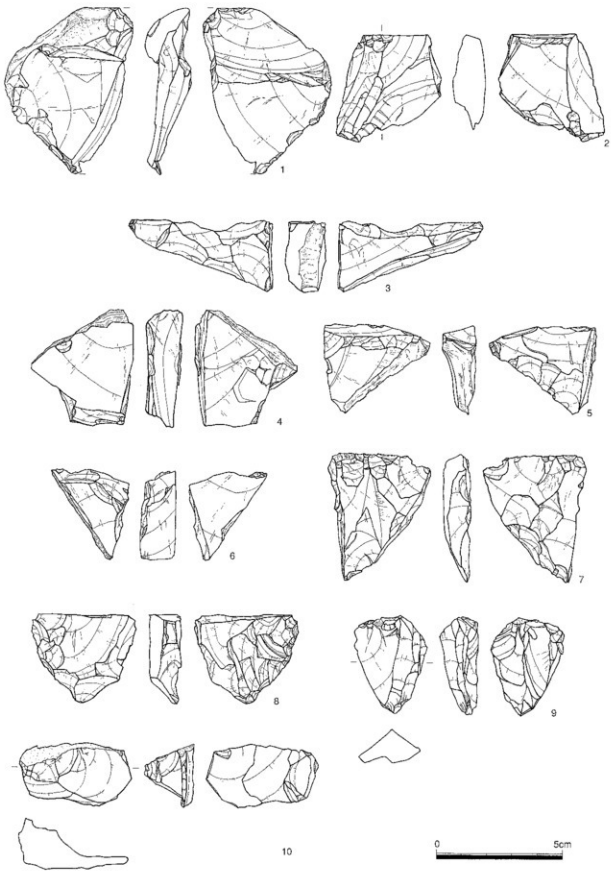
第62図　SB1008出土土器1



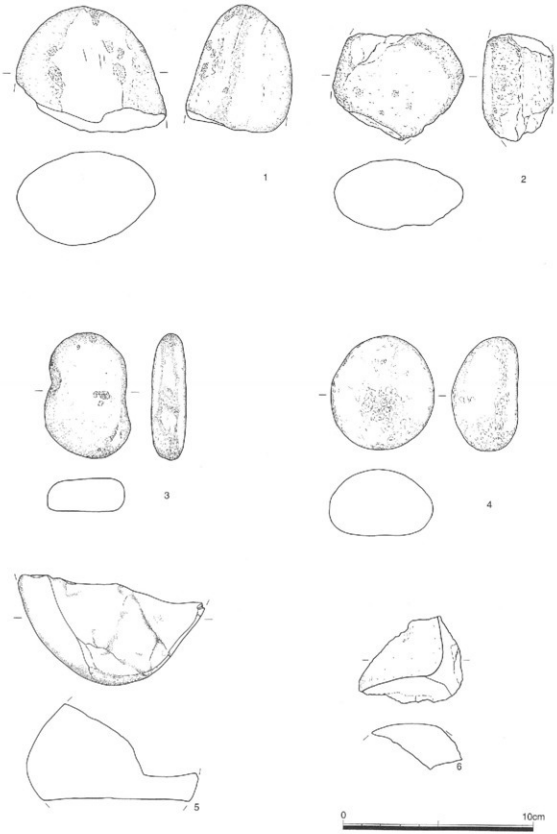
第63図　SB1008出土土器2



第64図　SB1008出土石器 1

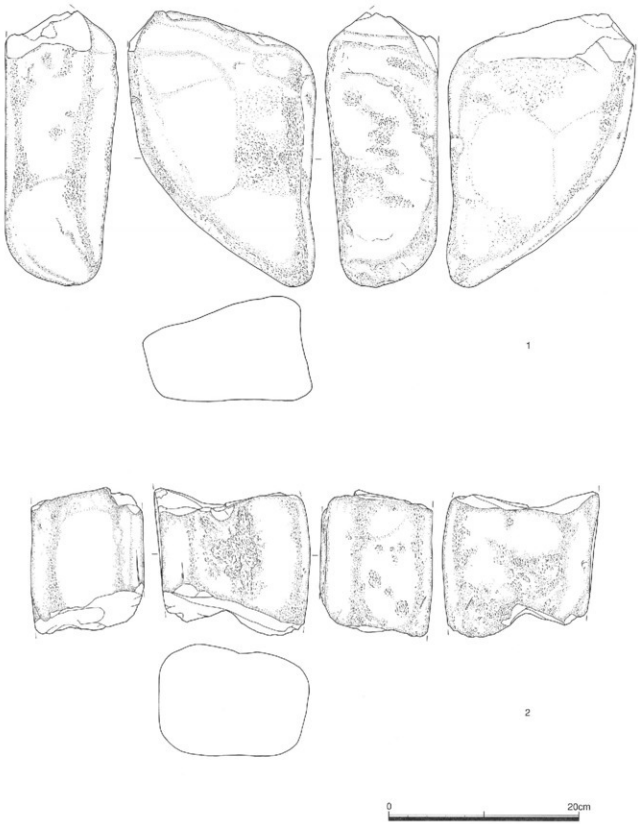


第65図　SB1008出土石器 2

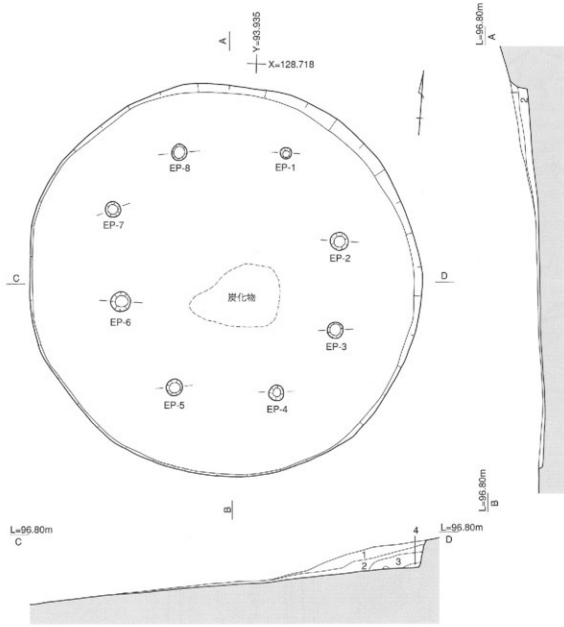


第66図　SB1008出土石器 3

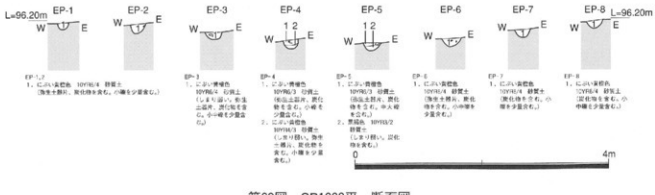
第67図　SB1008出土石器 4



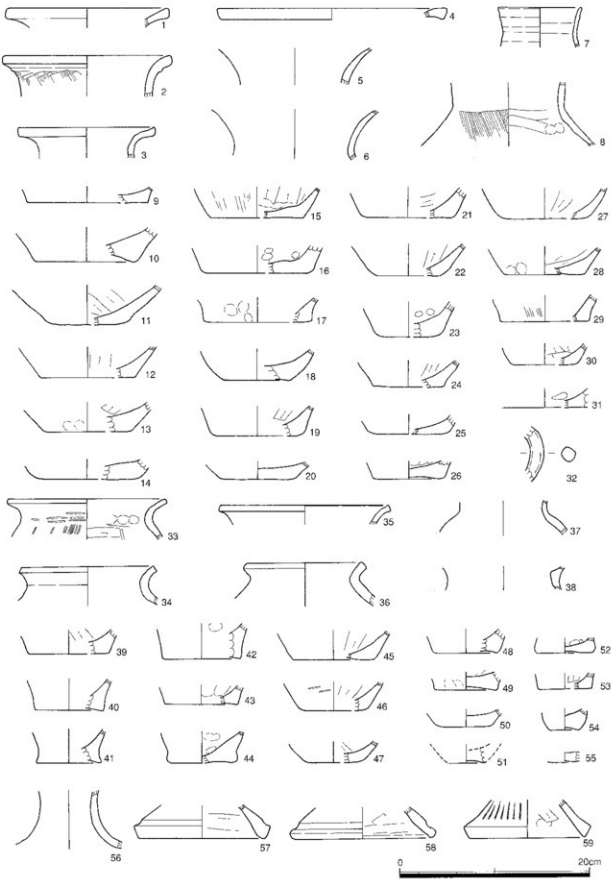
第68図　SB1008出土石器 5



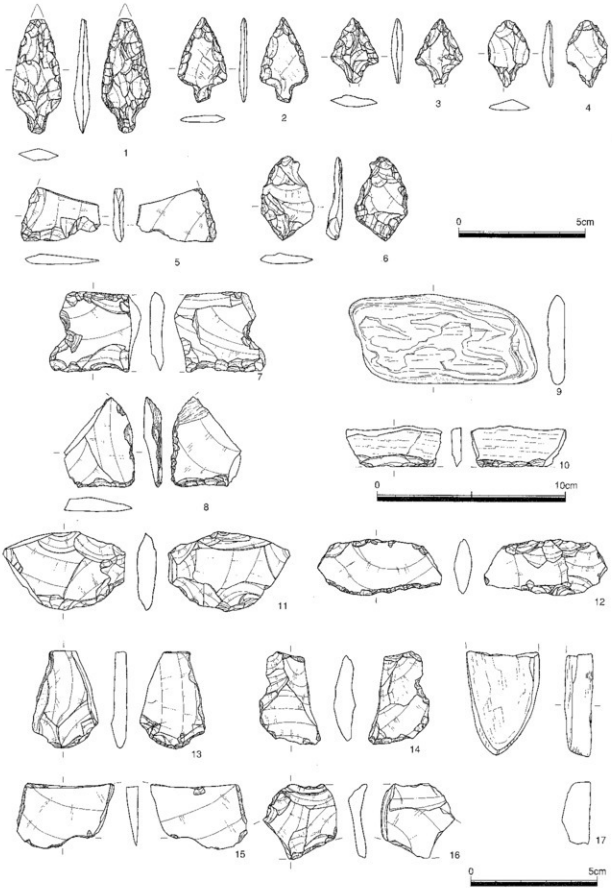
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（小礫、弥生土器片を含む。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（小礫、弥生土器片、炭化物を少量含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（しまりなし。黒いしみを含む。）
4．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（泥岩の小礫を含む。）



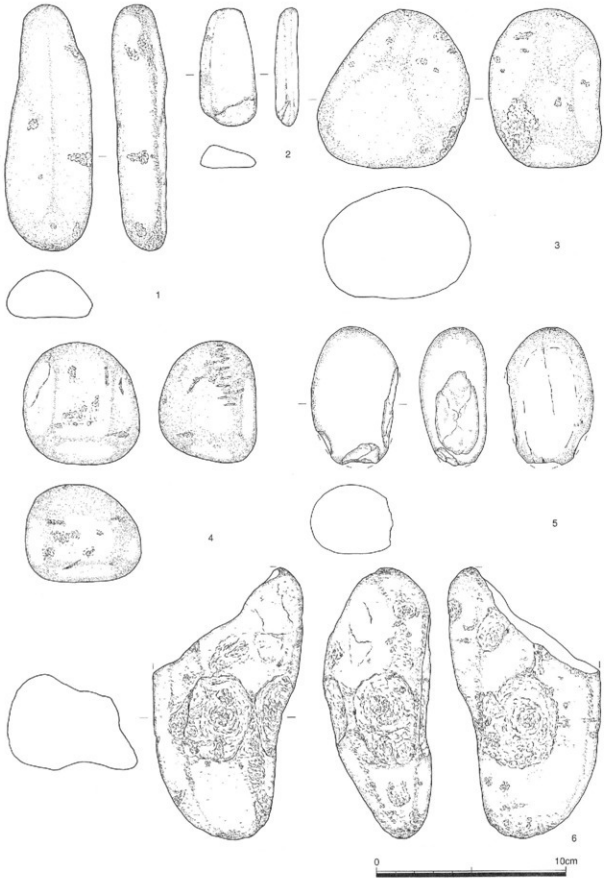
第69図　SB1009平・断面図



第70図　SB1009出土土器



第71図　SB1009出土石器1



第72図　SB1009出土石器 2

SB1009（９号竪穴住居跡）（第69図）

調査区北部、S・T-5・６グリッド、標高97.00m前後のSD1001平坦面に位置する。円形の平面プランを呈する。規模は現存長で直径6.0m、最大深度は40cmを測る。柱穴と思われるピットは８基検出され、主柱穴は８本であるが、深度は浅い。中央部には炭化物の拡がりも検出された。遺構内からは弥生土器片・石器などの遺物が出土しているが、完形品はなく、床面直上の遺物も少ない。断面形は窪むように緩やかに落ち込む。周壁溝は検出されていない。SB1009の立地は他のSBと異にする。居住施設と考えるには多少の違和感があり、一概にその様に考えにくい。発掘調査段階ではSBと解釈したが、SD1001平坦面の緩やかな谷状の落ち込みの可能性も考えられる。

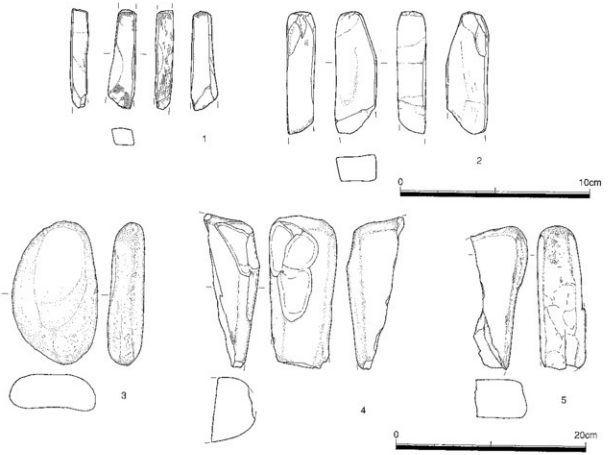
出土遺物

出土土器（第70図）

１～32は壺である。33～55は甕である。56～59は高杯である。いずれも小片のため、詳細な形状は不明であるが、時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第71～73図）

剥片石器の石材はサヌカイトまたは片岩を用い、礫石器は砂岩・斑レイ岩の自然礫を用いている。第71図-1～６は石鏃である。１は尖端部一部欠損するが、全長５cmを超えるものと思われる。第71図-7～10は石庖丁で７・８はサヌカイト、９・10は片岩を石材とする。ただし９は縁辺部に刃部加工が見られず、片岩の扁平自然礫であり、石器素材と考えられる。11・12はスクレイパー、13・14は楔形石器、15・16は剥片で縁辺部に微細な剥離が見られる。17は片岩の柱状片刃石斧である。第72図-1～６は敲石で石

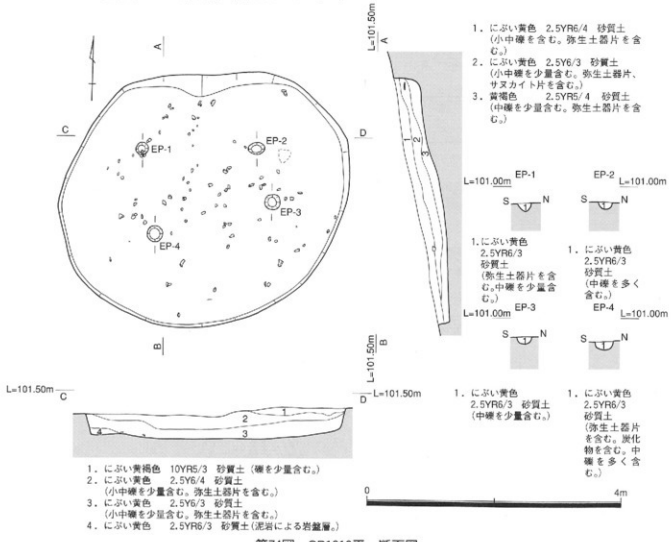


第73図　SB1009出土石器３

材は砂岩の円礫である。6は敲打痕が顕著である。第73図-1・2は砥石で石材は泥岩である。3～5は砂岩の台石である。

SB1010（10号竪穴住居跡）（第74図）

調査区南部、J・K-10・11グリッド、標高102.00m前後の南向きの斜面上に位置し、ほぼ円形の平面プランを呈する。規模は長軸4.40m、短軸4.00m、最大深度は40cmである。床面検出の柱穴は4本確認されている。炉跡および周壁溝は検出されていない。



第74図　SB1010平・断面図

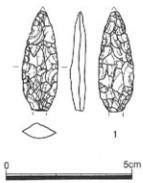
出土遺物

出土土器（第75図）

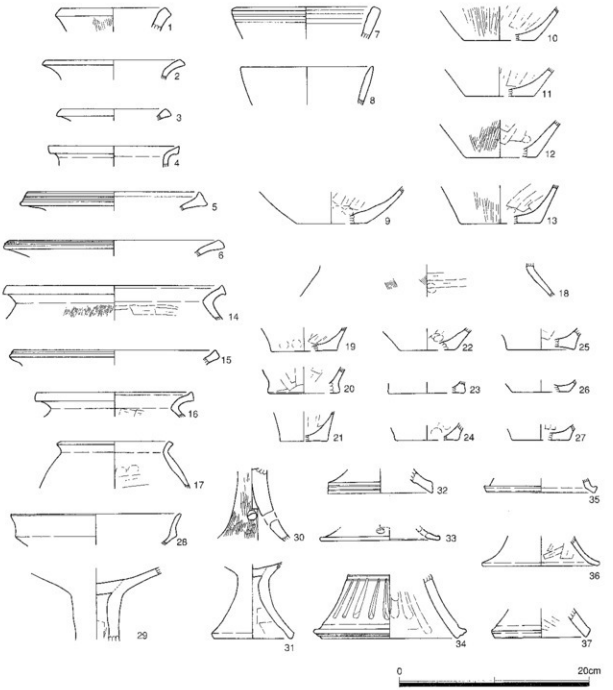
1～13は壺である。14～27は甕である。28～37は高杯である。いずれも小片のため、詳細な形状は不明であるが、時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第76図）

1はサヌカイトの打製石器である。基部を欠損するが、全長5cmを超えるものと思われる。断面形は凸レンズ状を呈する。



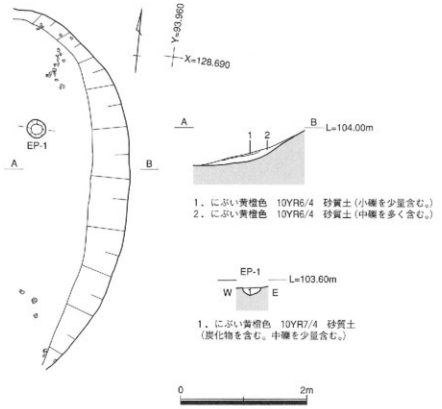
第76図　SB1010出土石器



第75図　SB1010出土土器

SB1011（11号竪穴住居跡）（第77図）

調査区南部、M-10グリッド、標高104.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。西側が約1/2消失しており、半円形の平面プランを呈する。規模は現存長で長軸6.10m、短軸2.50m、最大深度は13cmで、直径5m前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は1本確認されているが、主柱穴は不明である。炉跡および周壁溝は検出されていない。



第77図　SB1011平・断面図

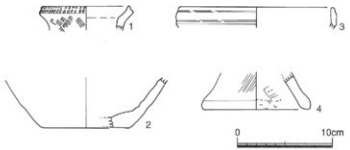
出土遺物

出土土器（第78図）

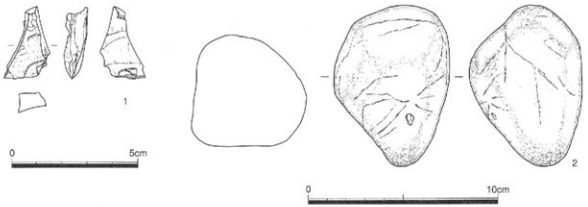
1・2は壺、3・4は高杯である。いずれも小片のため、詳細な形状は不明であるが、時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第79図）

1は楔形石器、2は敲石である。



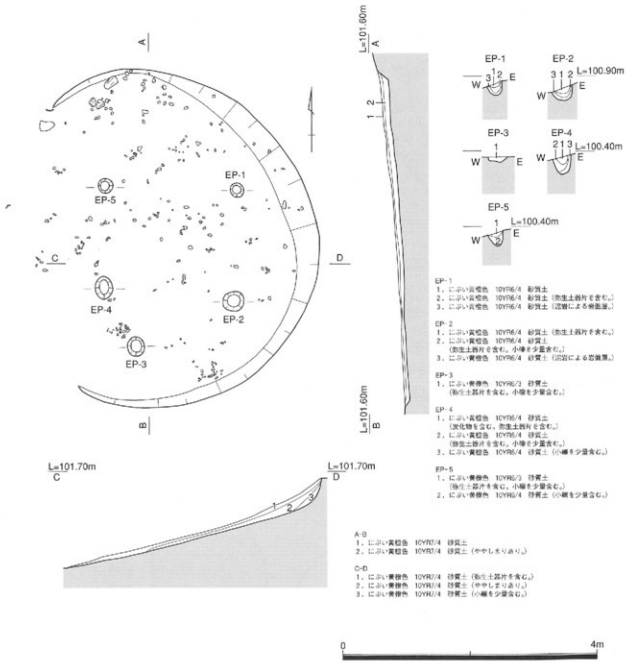
第78図　SB1011出土土器



第79図　SB1011出土石器

SB1012（12号竪穴住居跡）（第80図）

調査区西部、Q・R-7・8グリッド、標高102.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。円形の平面プランを呈し、規模は現存長で長軸5.40m、短軸4.10m、最大深度は30cmである。床面検出の柱穴は5本確認されており、柱穴間から推定すると主柱穴は4本であると思われる。炉跡および周壁溝は検出されていない。遺構内からは弥生土器片・石器などの遺物が出土しているが、完形品はなく、床面直上の遺物も少ない。出土土器から時期的に弥生時代後期初頭頃と考えられる。



第80図　SB1012平・断面図

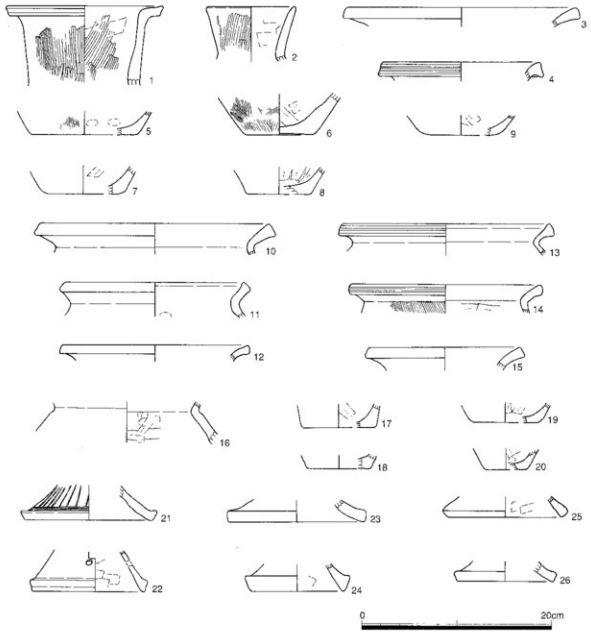
出土遺物

出土土器（第81図）

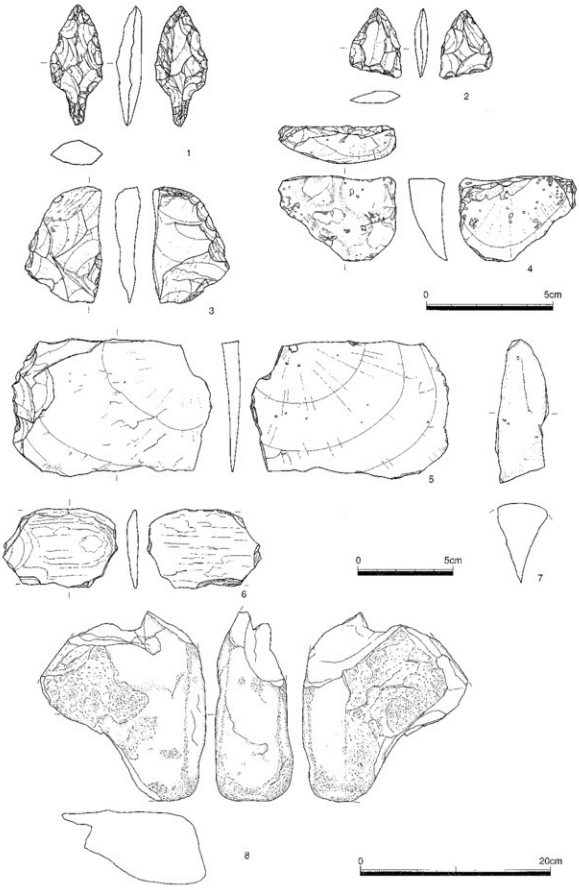
1～9は壺である。10～20は甕である。21～26は高杯である。いずれも小片のため、詳細な形状は不明であるが、時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第82図）

剥片石器の石材はサヌカイトまたは片岩を、礫石器は砂岩・凝灰岩の自然礫を用いる。1・2は石鏃である。1は厚手で重量約8gである。3・5は剥片、4は石核である。3は左側縁に調整加工がみられるが、あまり明確ではないため、RFとした。3・4は一部自然面が残存する。6は石庖丁で片岩を石材とする。7は磨石、8は台石で敲打痕が顕著である。



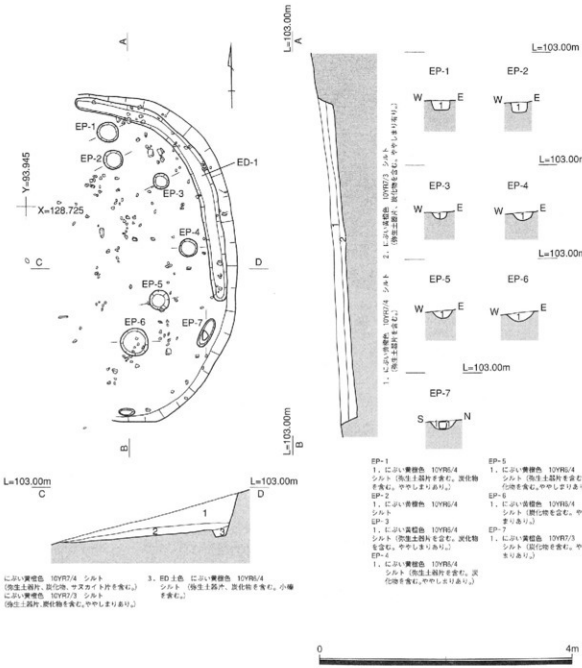
第81図　SB1012出土土器



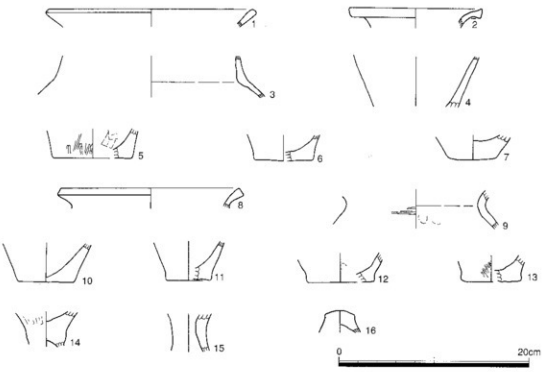
第82図　SB1012出土石器

SB1013（13号竪穴住居跡）（第83図）

調査区西部、T・U-8グリッド、標高103.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランを呈する。西側が約1/2消失している。規模は現存長で長軸5.10m、短軸2.40m、最大深度は30cmで、直径6m前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は7本確認されており、柱穴間から推定すると主柱穴は6本であると思われる。明確な炉跡は無いが、周壁溝が検出された。



第83図　SB1013平・断面図



第84図　SB1013出土土器

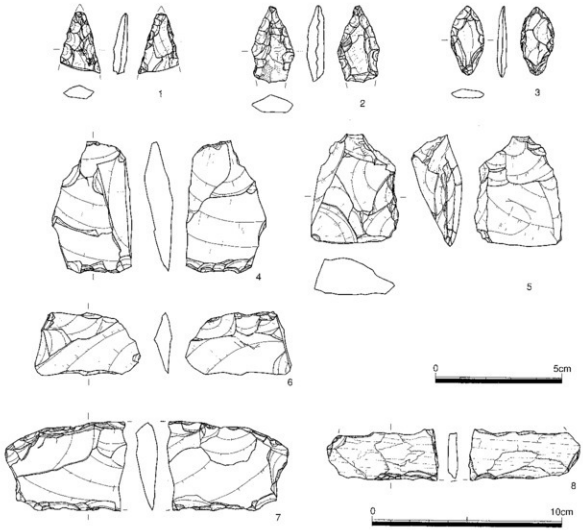
出土遺物

出土土器（第84図）

いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、1～7は壺、8～13は甕である。14～16は高杯である。時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第85・86図）

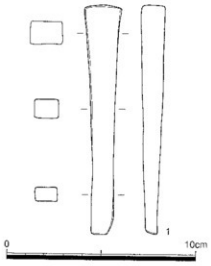
第85図-1～3は石鏃である。4は楔形石器、5は石核、6はRFである。石材はいずれもサヌカイトである。7・8は石庖丁で、7は結晶片岩、8はサヌカイトを石材とする。第86図-1～3は敲石、4は台石である。石材は砂岩である。2は外周縁全周に帯状に敲打痕が巡る。



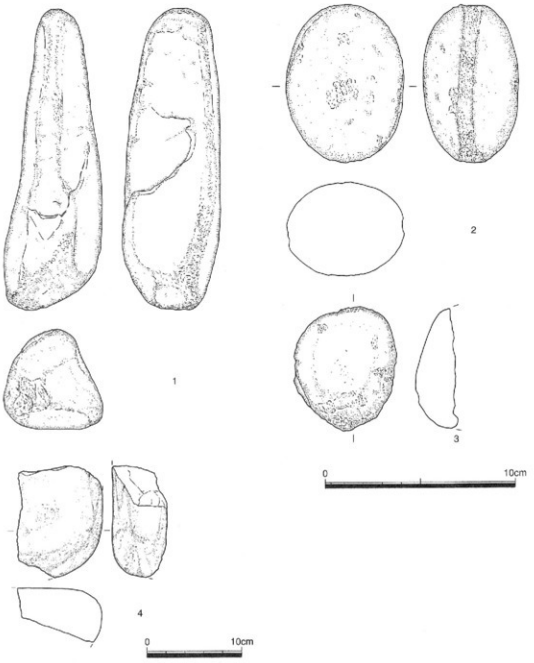
第85図　SB1013出土石器1

出土鉄器（第87図）

1は鉄鑿である。鍛造により製作されている。刃部は片刃である。断面形は長方形で形態的には鑿状を呈する。鑿というよりも、金属板を断ち切る鏨として使用されていたものと考えられる。また刃部とする先端部の角度が鈍く、製品ではなく棒状の鉄素材の可能性もある。



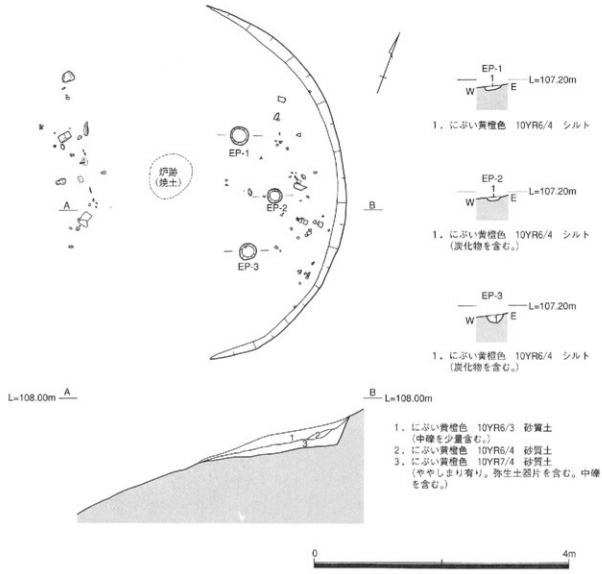
第87図　SB1013出土鉄器



第86図　SB1013出土石器 2

SB1014（14号竪穴住居跡）（第88図）

調査区西部、V・W-8・9グリッド、標高108.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランを呈する。西側が約1/2消失している。規模は現存長で長軸5.50m、短軸2.20m、最大深度は36cmで、直径6m前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は3本確認されており、柱穴間から推定すると主柱穴は6本であると思われる。炉跡および周壁溝は検出されていない。遺構内からは弥生土器片・石器などの遺物が出土しているが、完形品はなく、床面直上の遺物も少ない。出土土器から時期的に弥生時代後期初頭頃と考えられる。



第88図　SB1014平・断面図

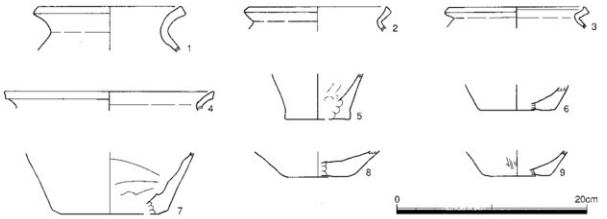
出土遺物

出土土器（第89図）

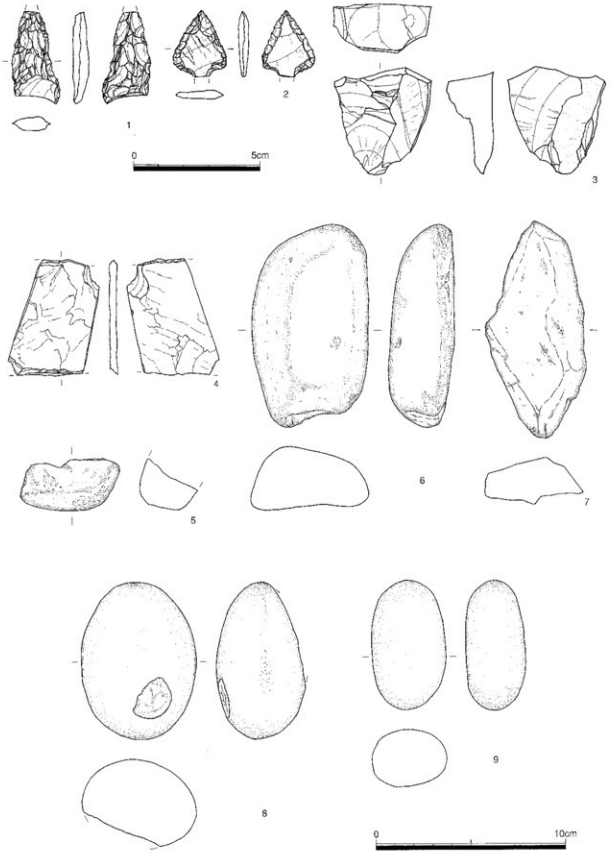
いずれも小片であるため、図化し得たものは少ない。詳細な形状は不明であるが、1～5は甕、6～9は壺の底部と思われる。時期的には後期初頭頃と思われる。

出土石器（第90・91図）

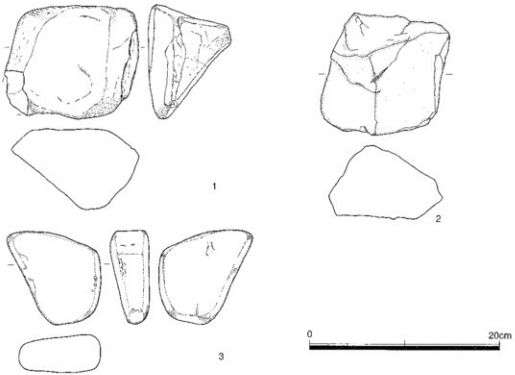
第90図-1～2は石鏃である。3は石核、1～3の石材はサヌカイトである。4は片岩の石庖丁である。刃部加工は弱い。5・6・7は敲石、8・9は磨石、第91図-1～3は台石である。いずれも石材は砂岩である。



第89図　SB1014出土土器



第90図　SB1014出土石器 1



第91図　SB1014出土石器２

包含層出土遺物

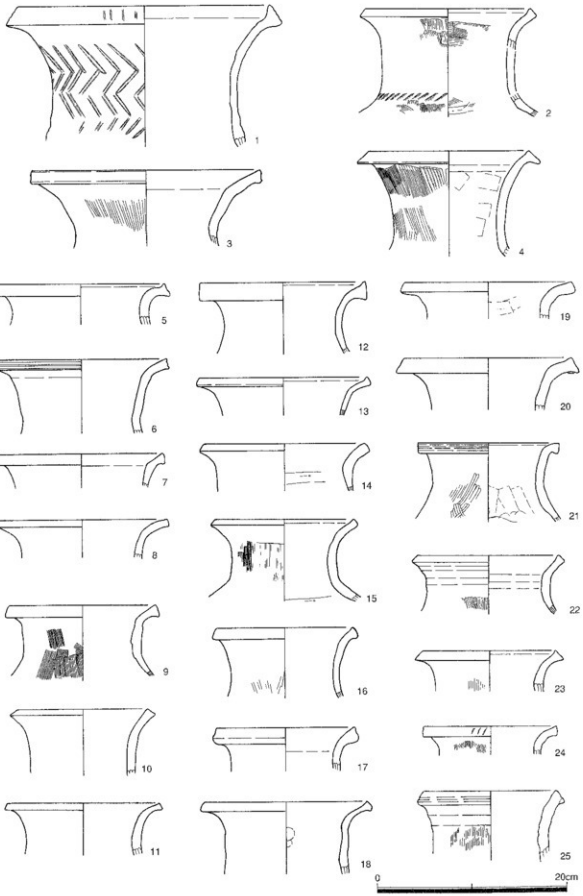
本遺跡における出土遺物は、包含層および段状遺構から出土したものが大半を占める。急峻な傾斜地のためか、出土土器は小片で摩滅が激しいが、実測可能なものはできる限り掲載した。調整の判別するものは少ないゆえ、器種等の認定に誤りがあった場合は御容赦されたい。

出土土器（第92～120図）

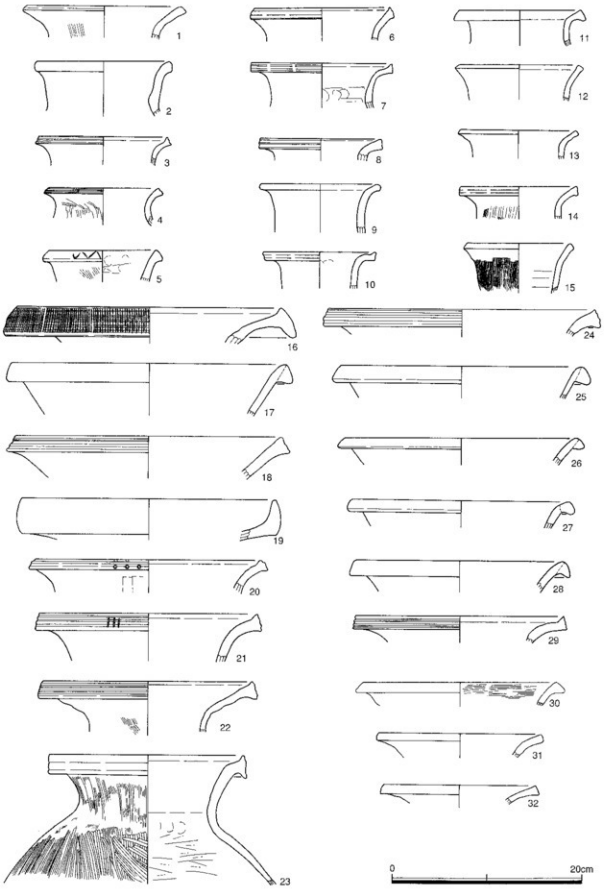
第92図-1～第105図-60・第112図-10～12までは壺である。479点。第106図-1～第112図-1～９・13～23と第113図-1～第115図-27までは甕である。366点。第116図-1～22は鉢である。22点。第116図-23～第120図-30までは高杯である。190点。第120図-31～35は把手である。36は不明土製品で被熱した粘土塊である。片岩等の砂粒を多く含む。37は土製投弾、38はミニチュア土器と思われる土製品、39は壺等の浮文であると思われる。40は土玉である。

出土石器（第121～158図）

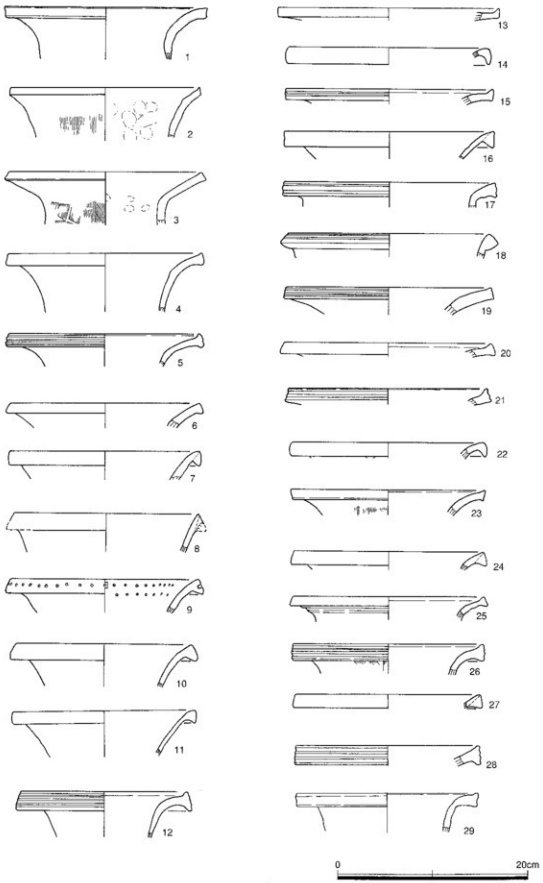
第121図-１～15は金属器を模倣したものと思われる磨製石鏃である。石材には塩基性片岩、粘板岩を用いる。基部の形状が弱い凹基を呈する。器体は薄く、表裏面は平坦に研磨される。両側縁は鋭利に研磨され刃部を作出する。断面形は扁平な六角形あるいは扁平な菱形状を呈する。第122図-1～第126図-24は打製石鏃である。第126図-19はチャートを用いており、調整加工・形態から縄文時代に属するものと思われる。それ以外は石材にサヌカイトを用いる。打製石鏃の形態は一様ではなく、バリエーションがみられる。概して、表裏とも丁寧に調整加工を施されている。特に有茎の石鏃の中には全長４㎝・重量４ｇを超えるものがあり、細身で厚みは厚く、断面形は菱形を呈し、刺突機能を重視したものと思われるものがみられる。第127図-1～第128図-4は打製石庖丁である。石材はサヌカイト、片岩を用いる。



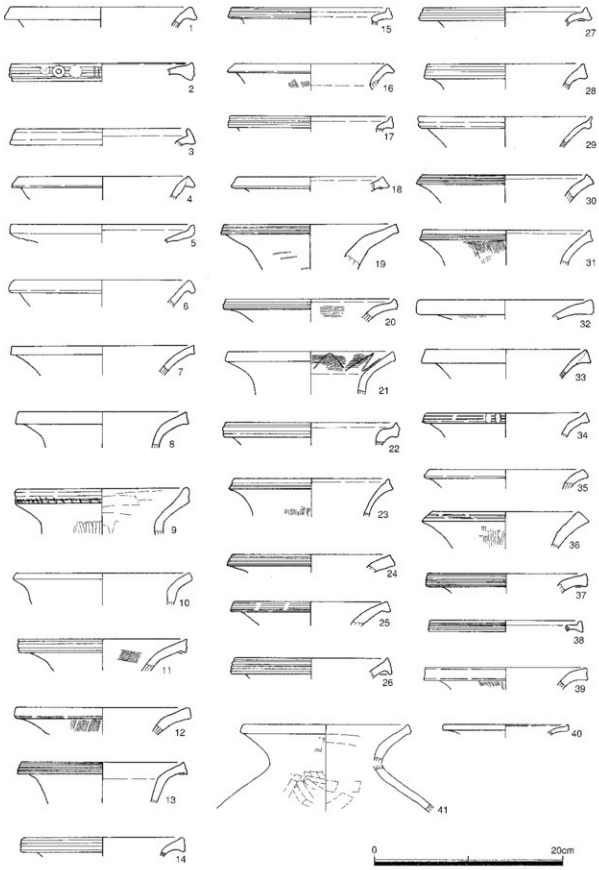
第92図　包含層出土土器 1



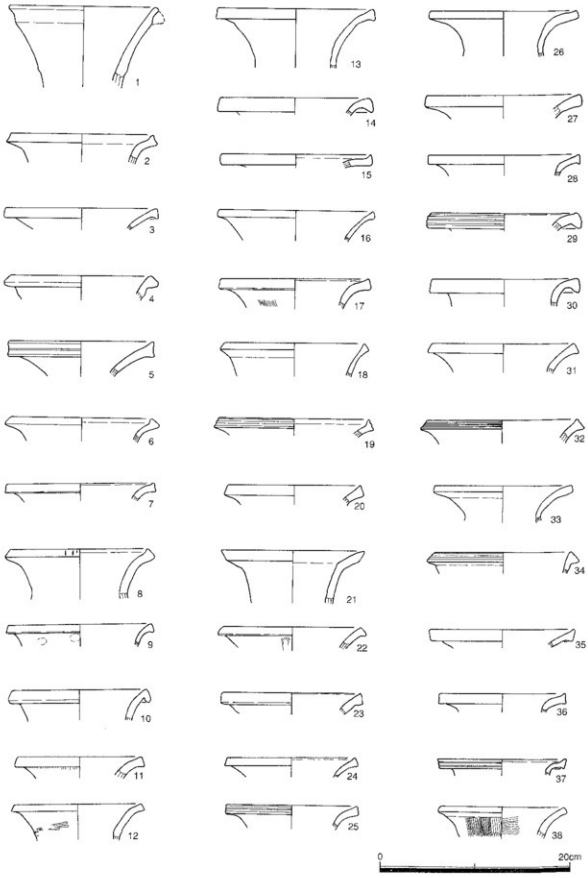
第93図　包含層出土土器2



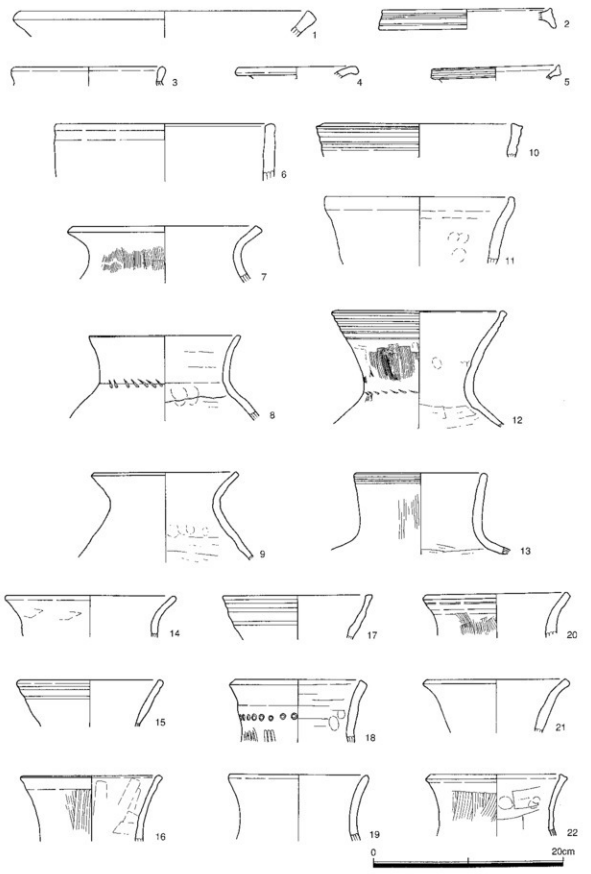
第94図　包含層出土土器 3



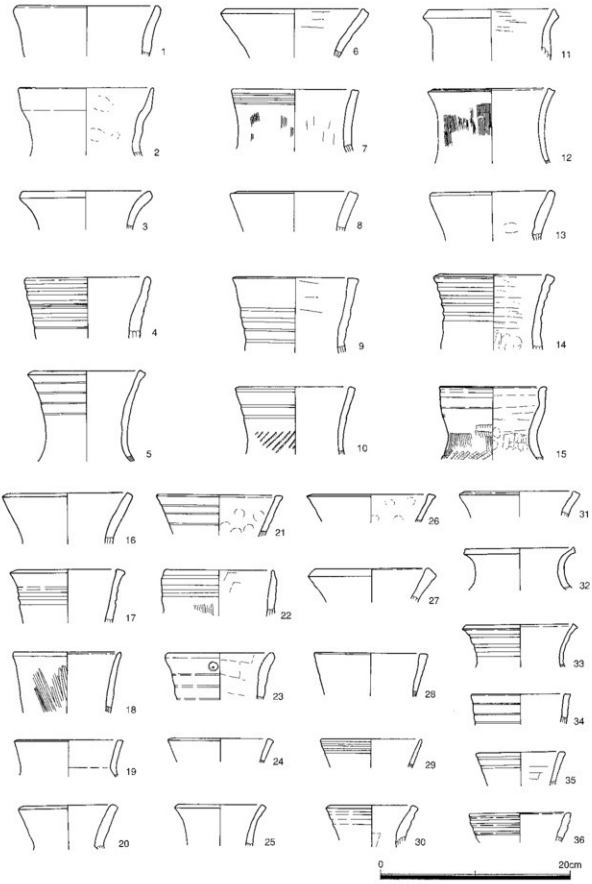
第95図　包含層出土土器 4



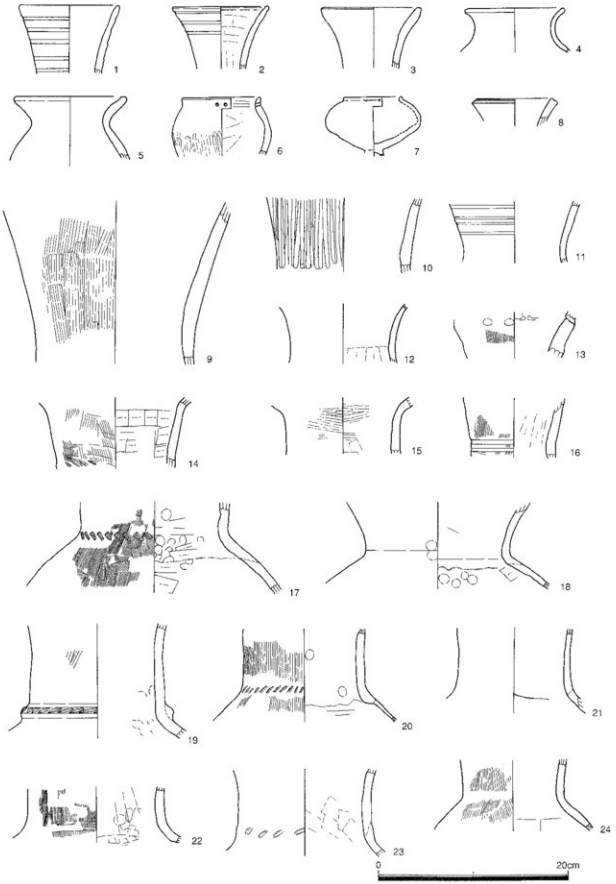
第96図　包含層出土土器 5



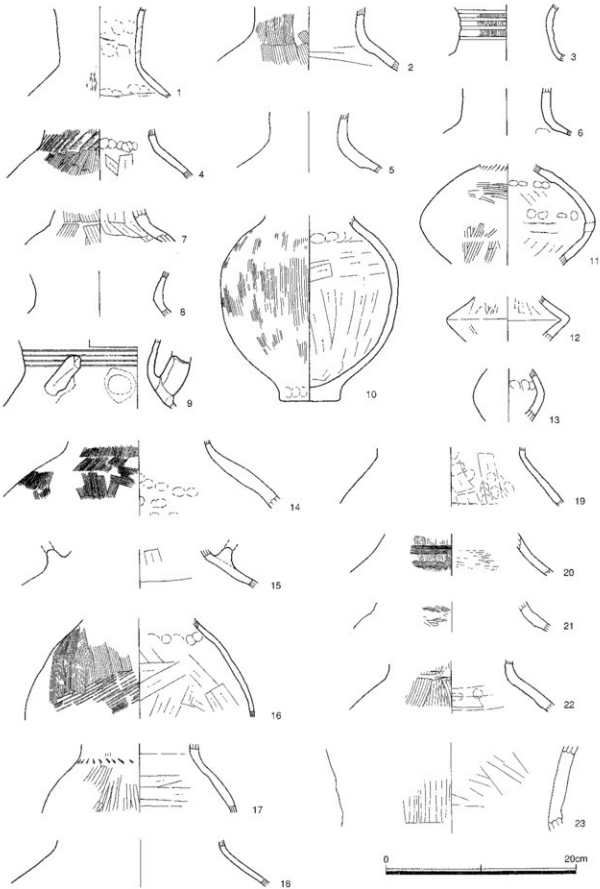
第97図　包含層出土土器6



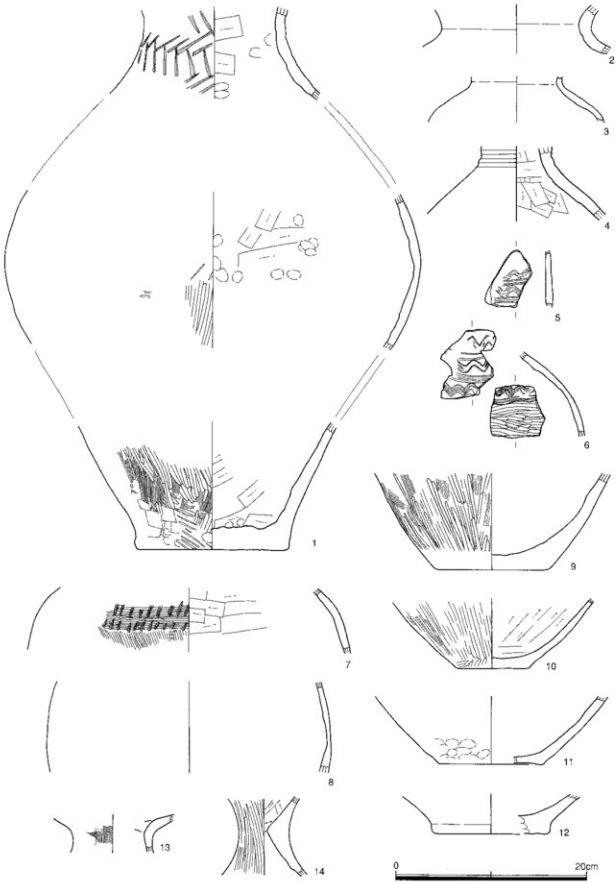
第98図　包含層出土土器 7



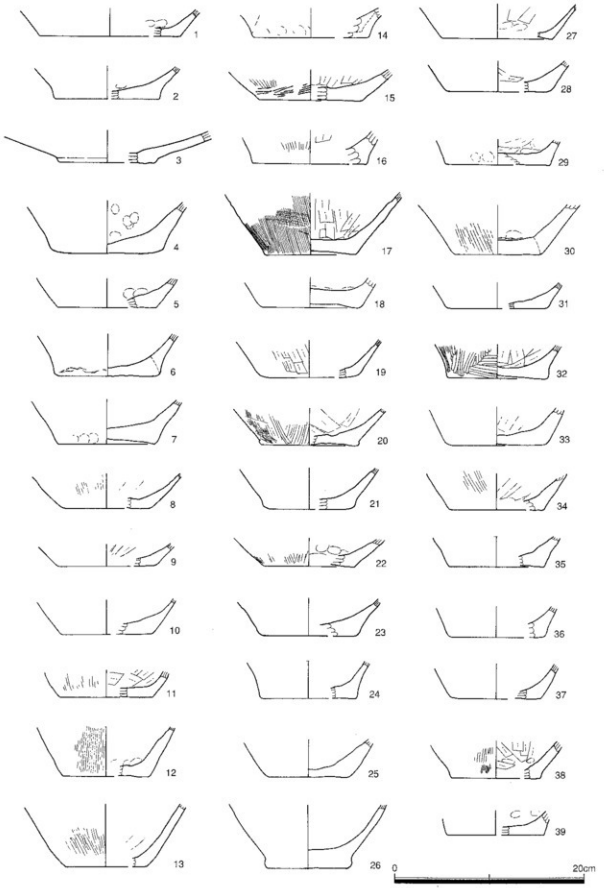
第99図　包含層出土土器 8



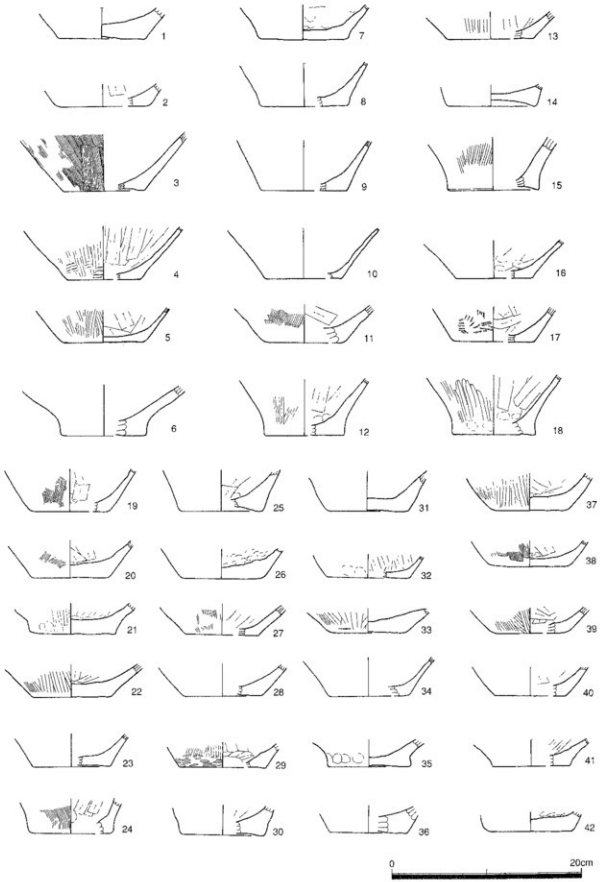
第100図　包含層出土土器９



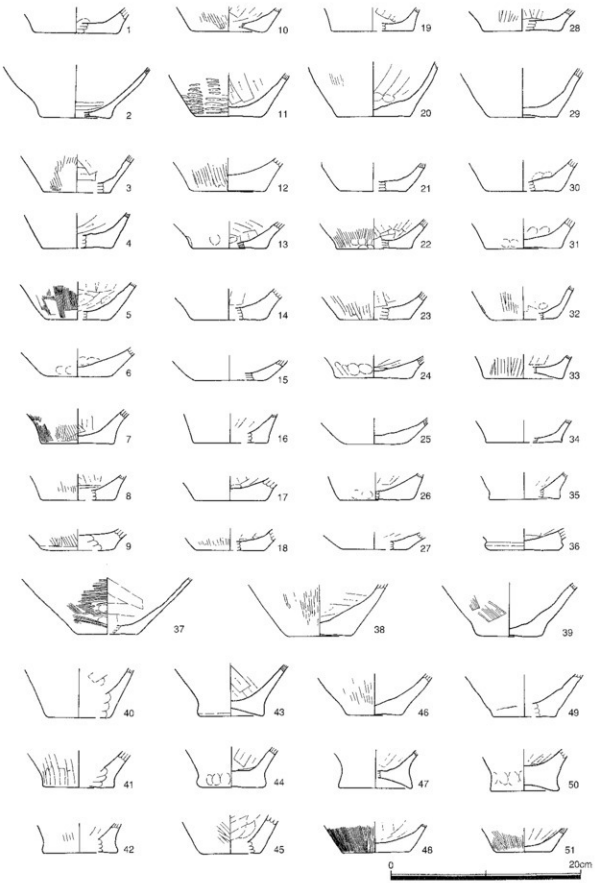
第101図　包含層出土土器10



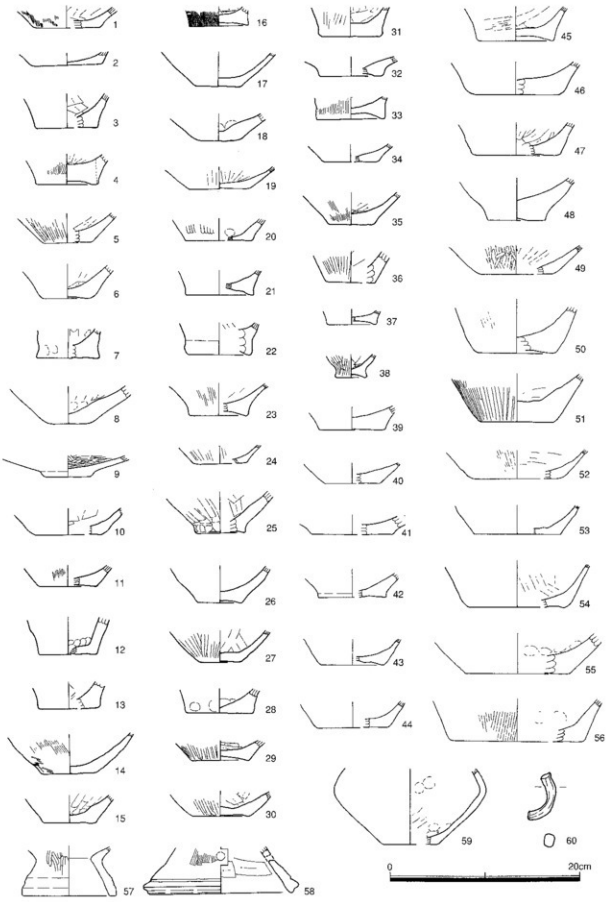
第102図　包含層出土土器11



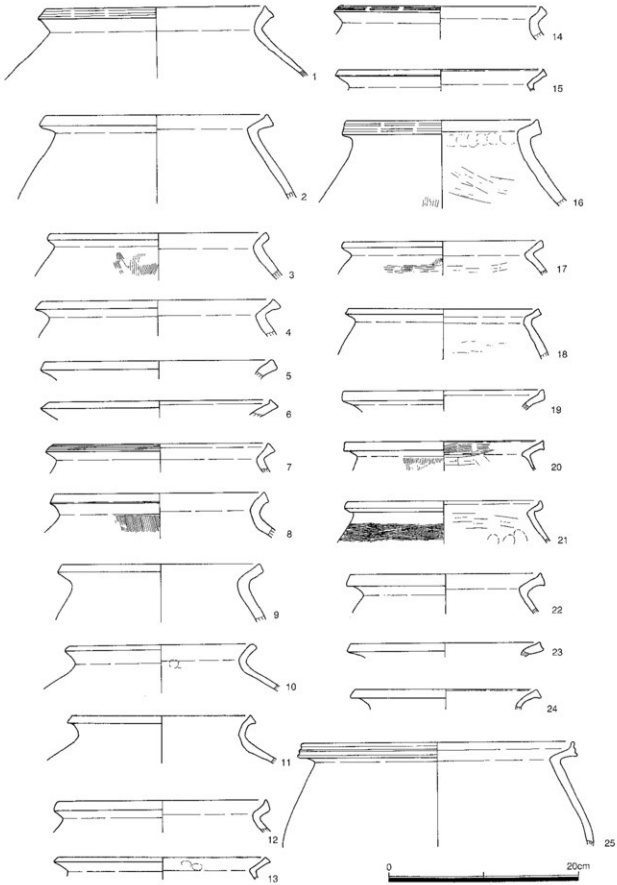
第103図　包含層出土土器12



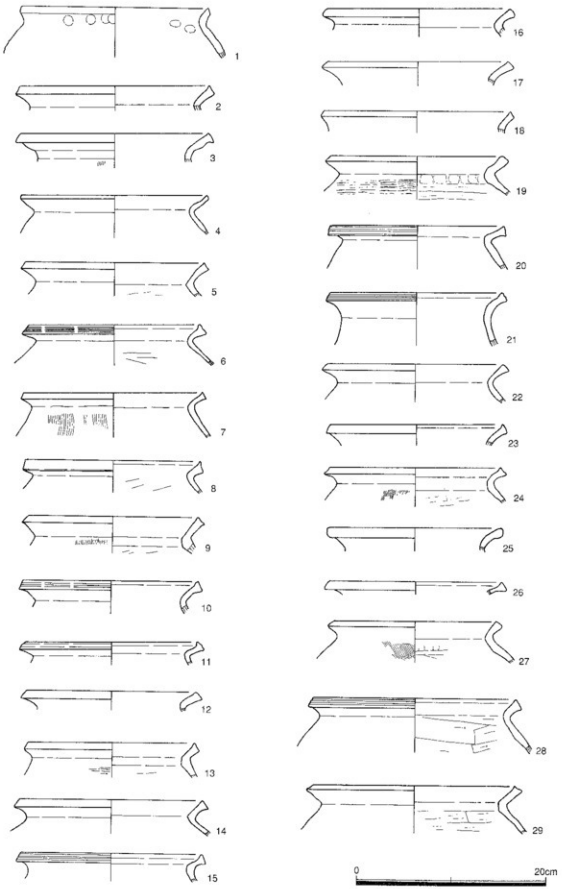
第104図　包含層出土土器13



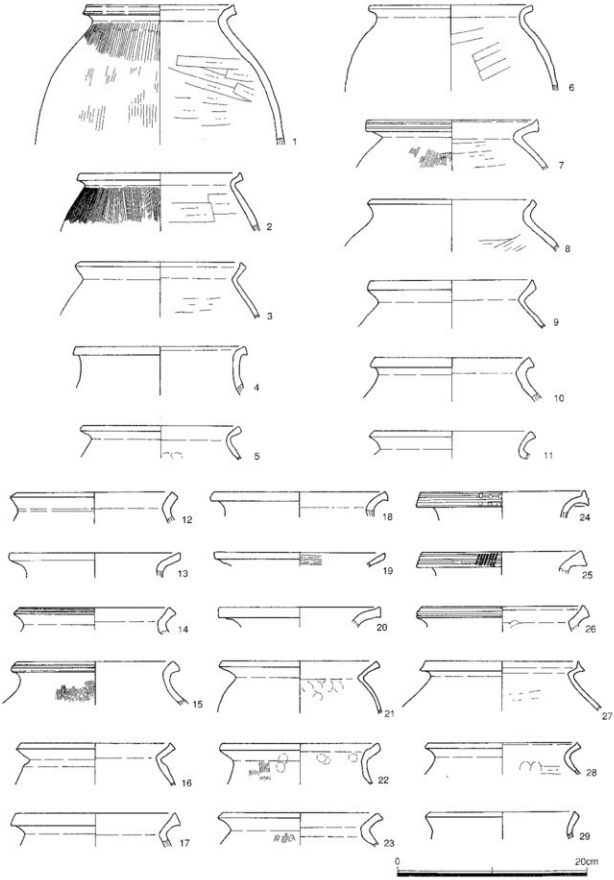
第105図　包含層出土土器14



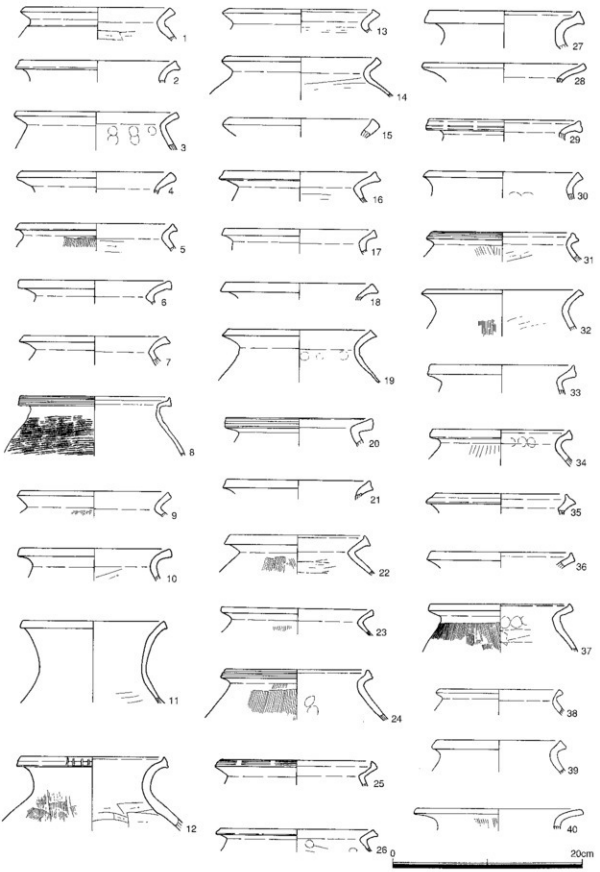
第106図　包含層出土土器15



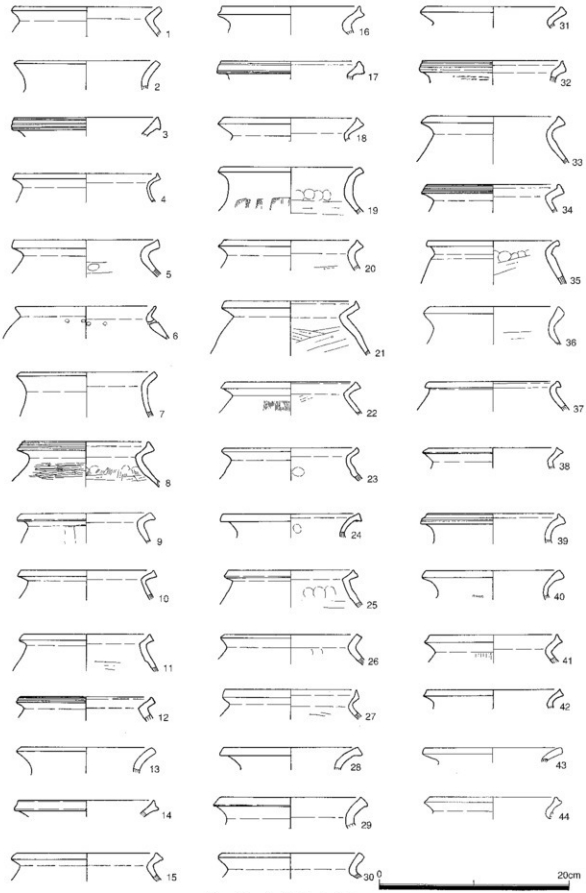
第107図　包含層出土土器16



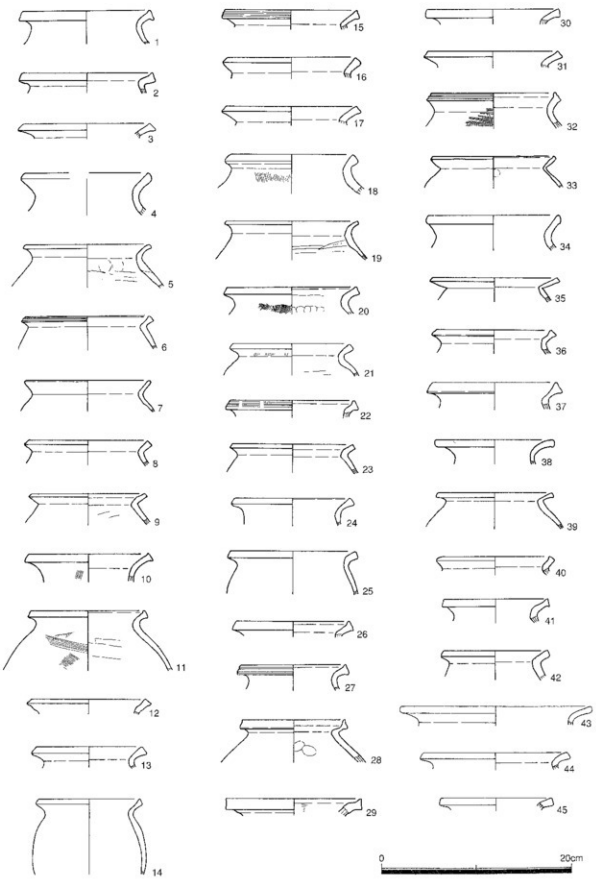
第108図　包含層出土土器17



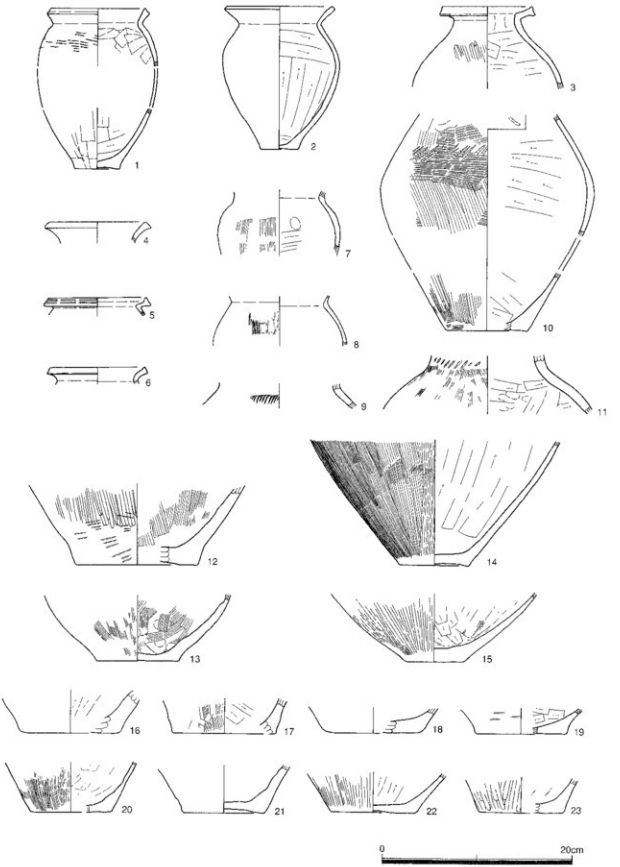
第109図　包含層出土土器18



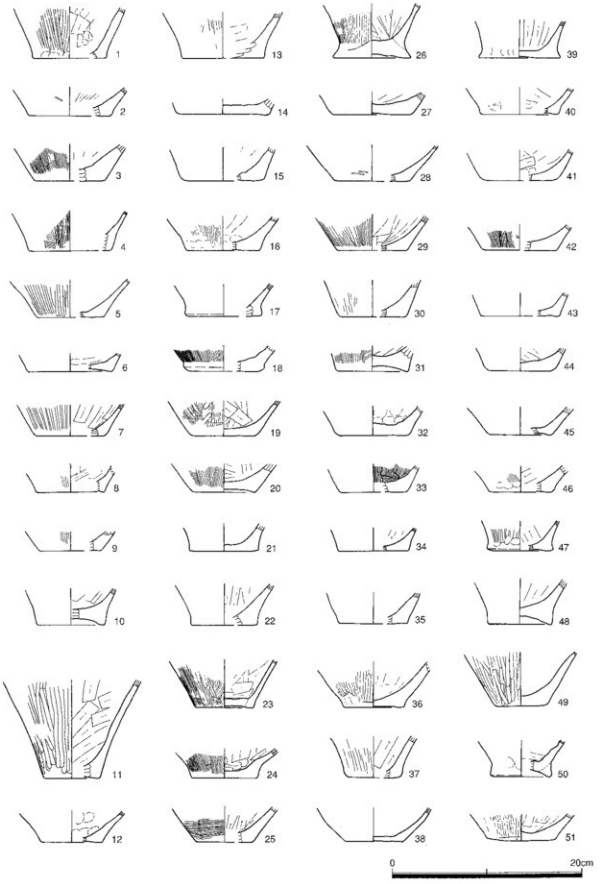
第110図　包含層出土土器19



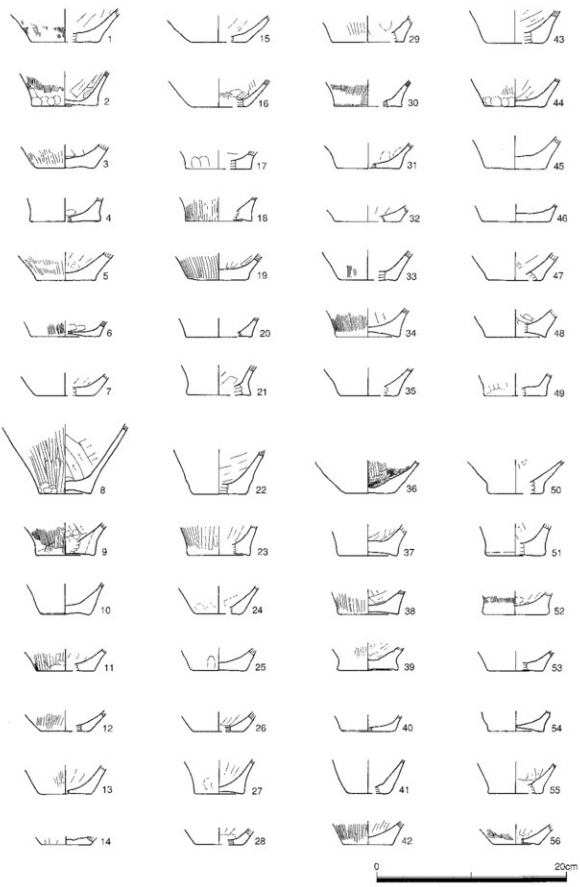
第111図　包含層出土土器20



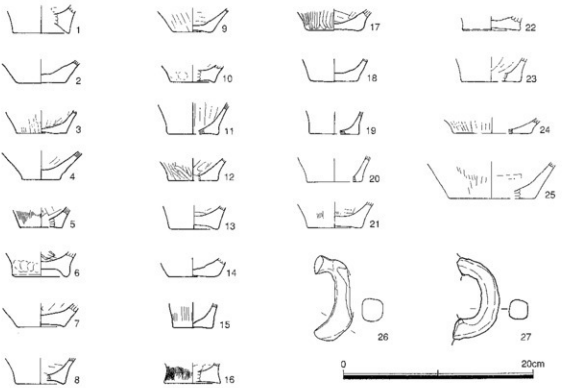
第112図　包含層出土土器21



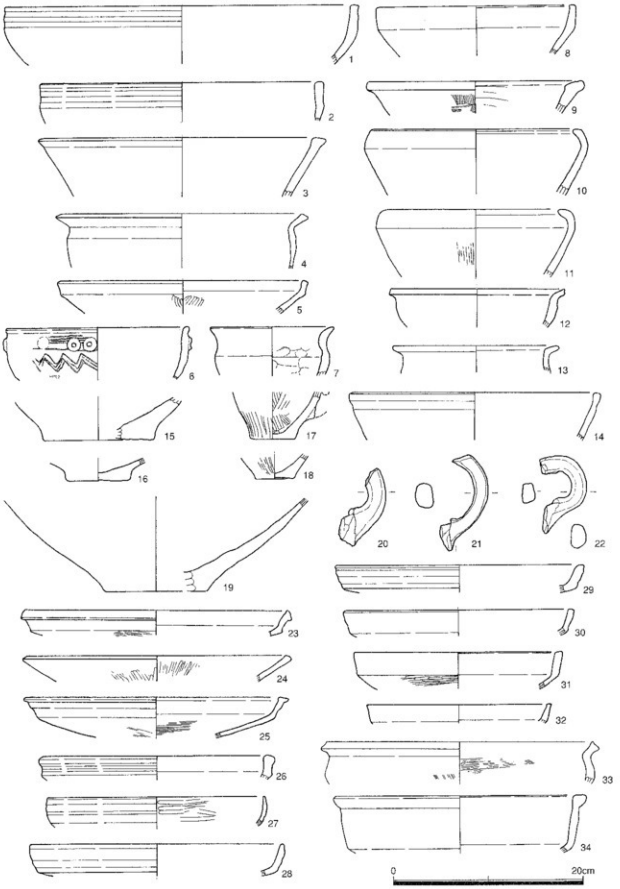
第113図　包含層出土土器22



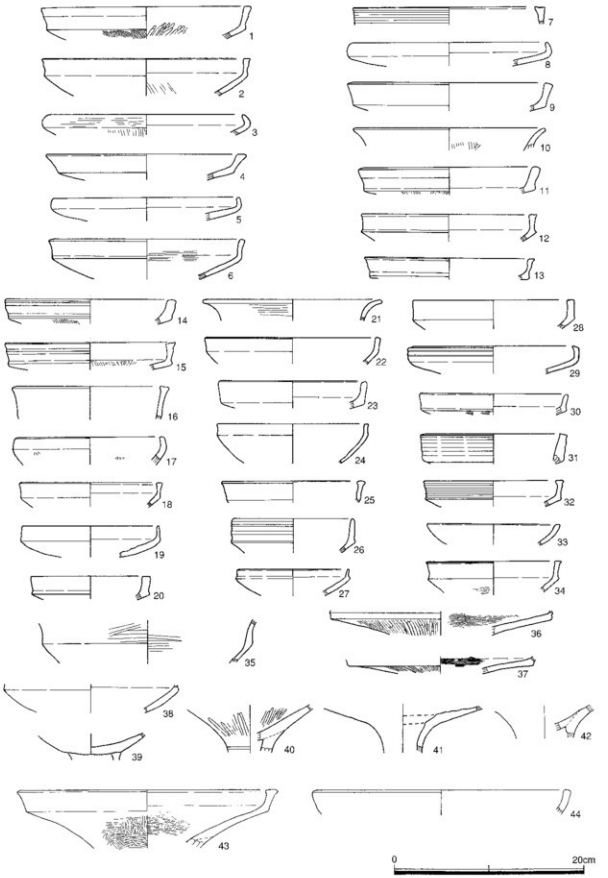
第114図　包含層出土土器23



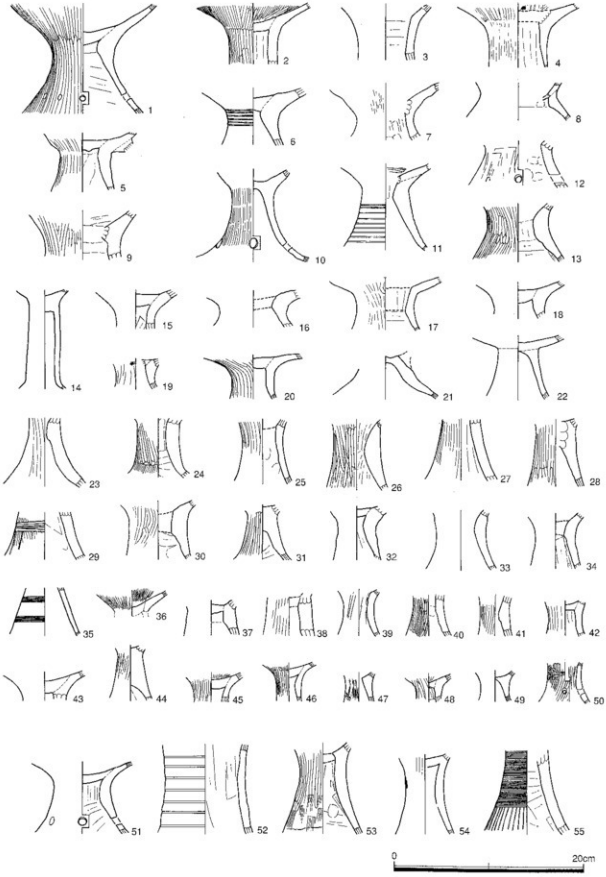
第115図　包含層出土土器24



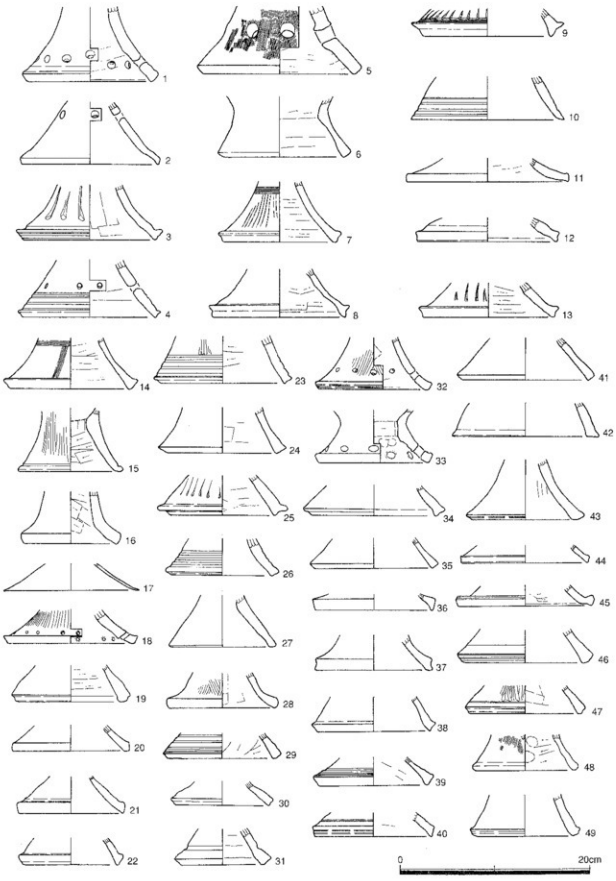
第116図　包含層出土土器25



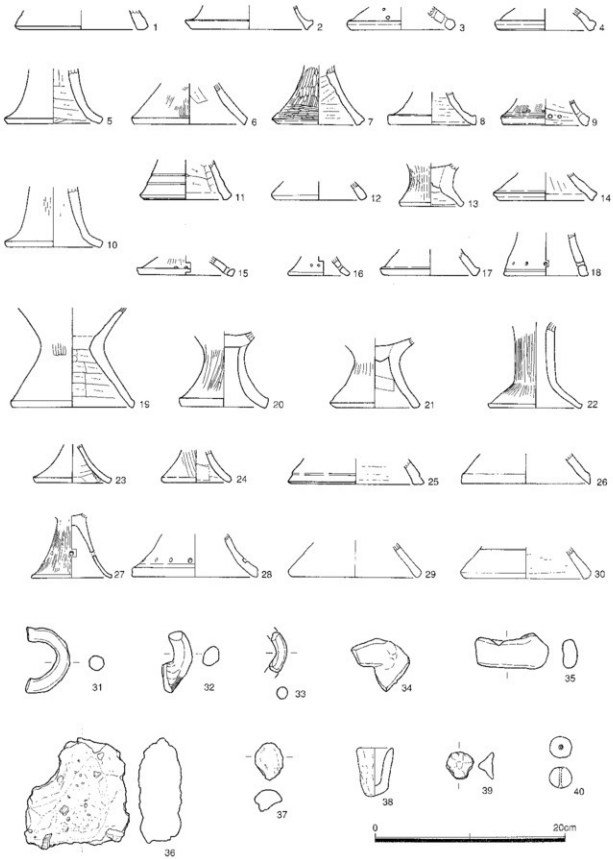
第117図　包含層出土土器26



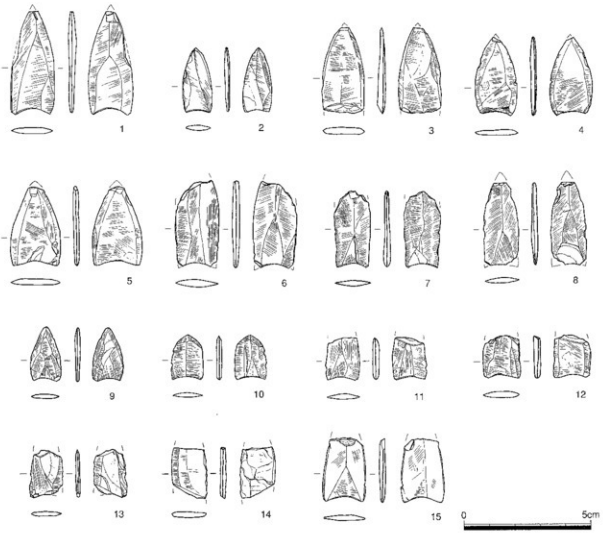
第118図　包含層出土土器27



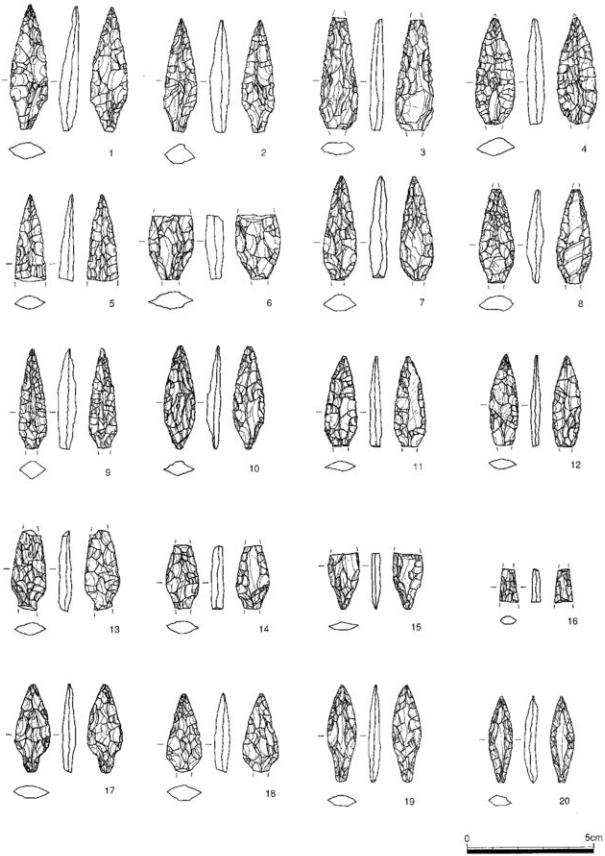
第119図　包含層出土土器28



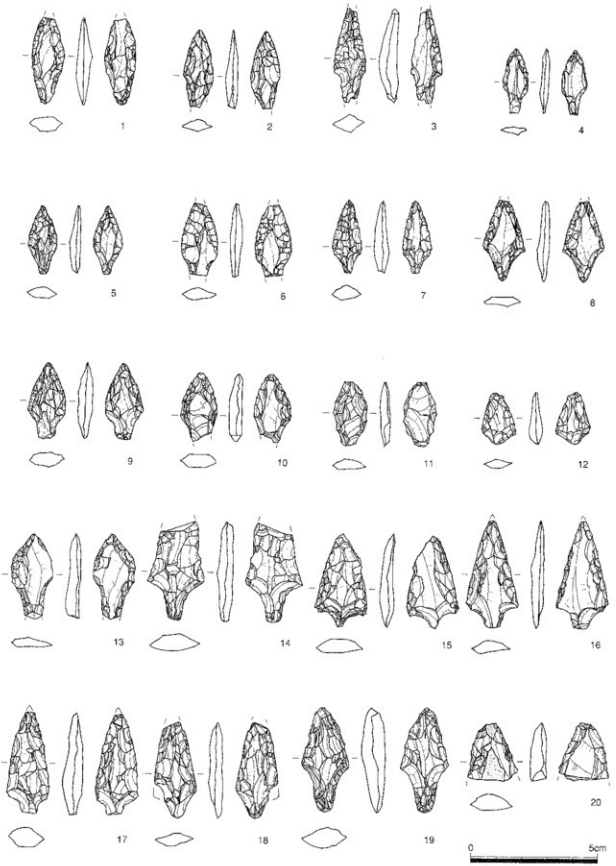
第120図　包含層出土土器29



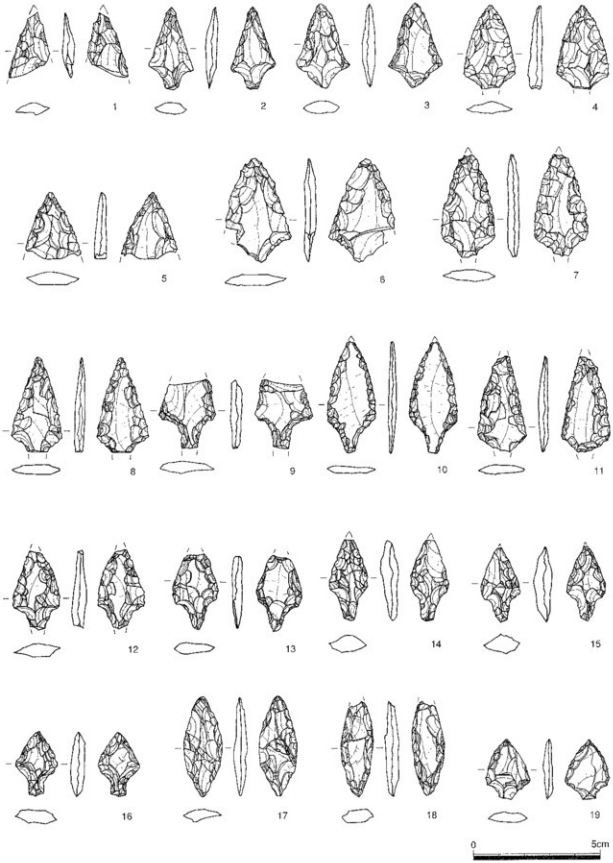
第121図　包含層出土石器 1



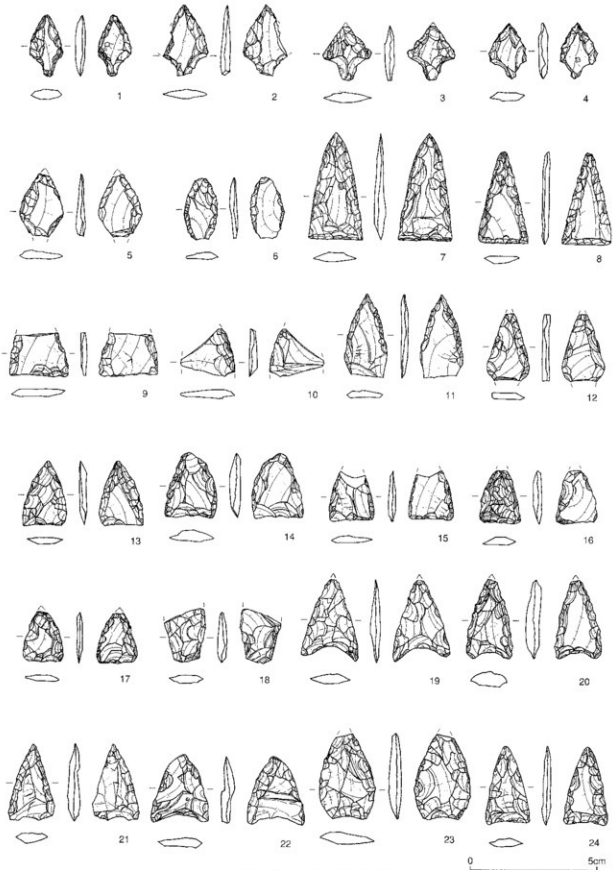
第122図　包含層出土石器 2



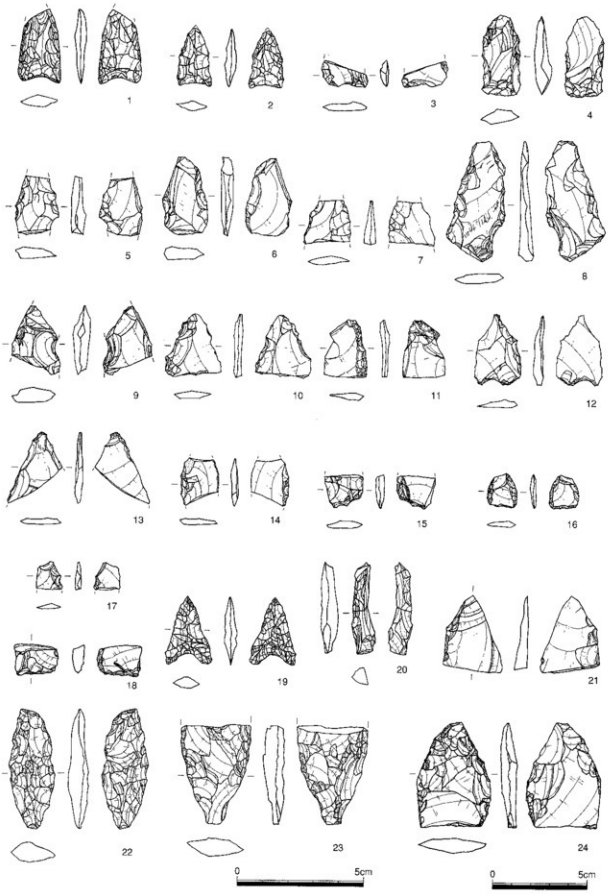
第123図　包含層出土石器 3



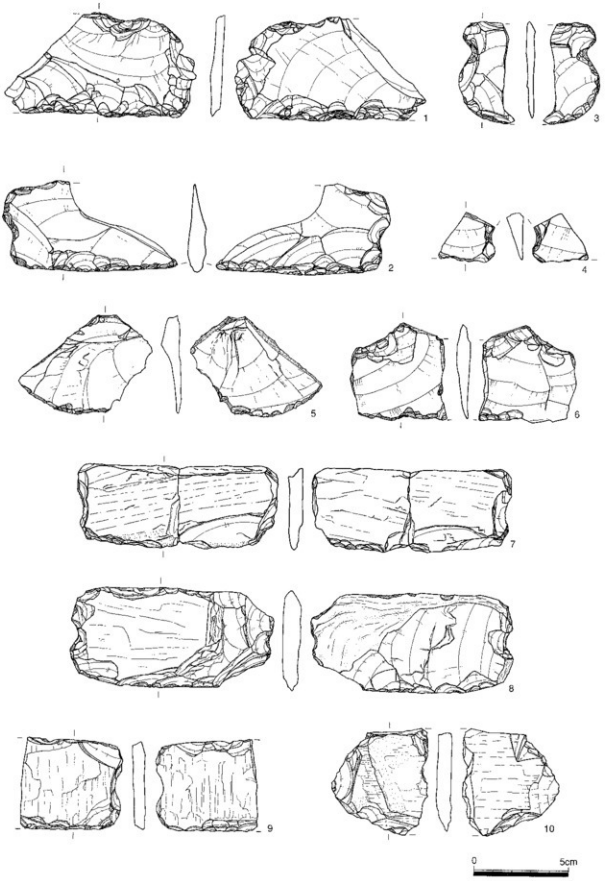
第124図　包含層出土石器 4



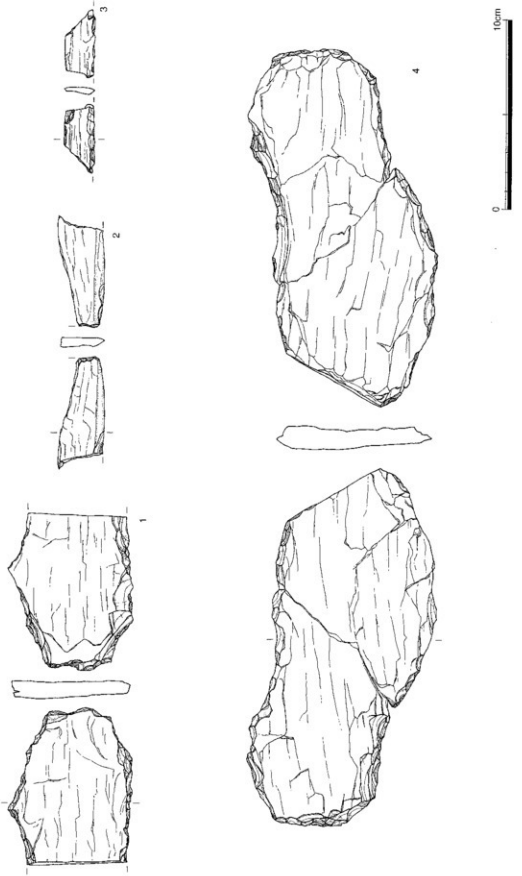
第125図　包含層出土石器 5



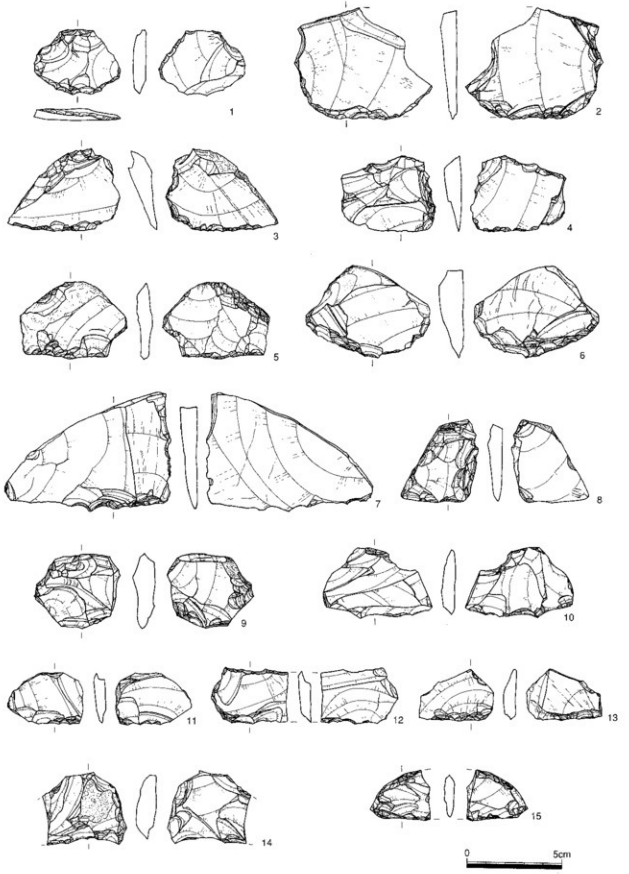
第126図　包含層出土石器 6



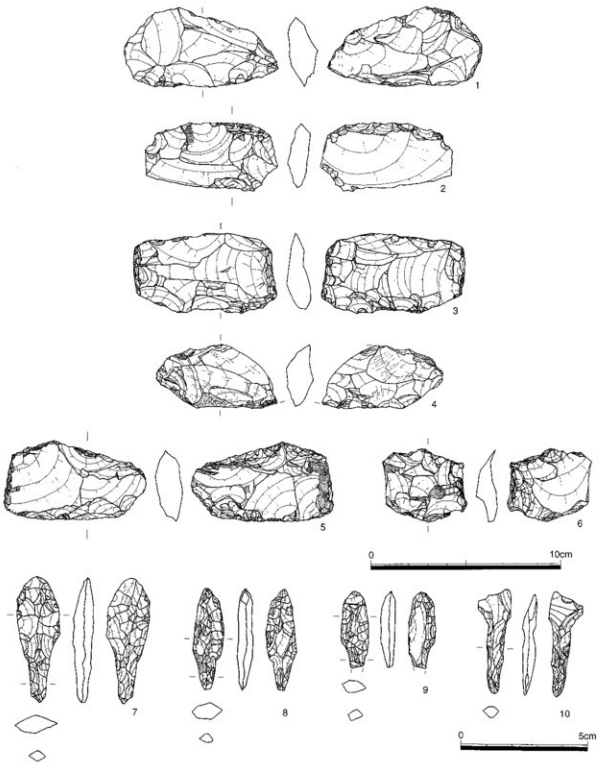
第127図　包含層出土石器７



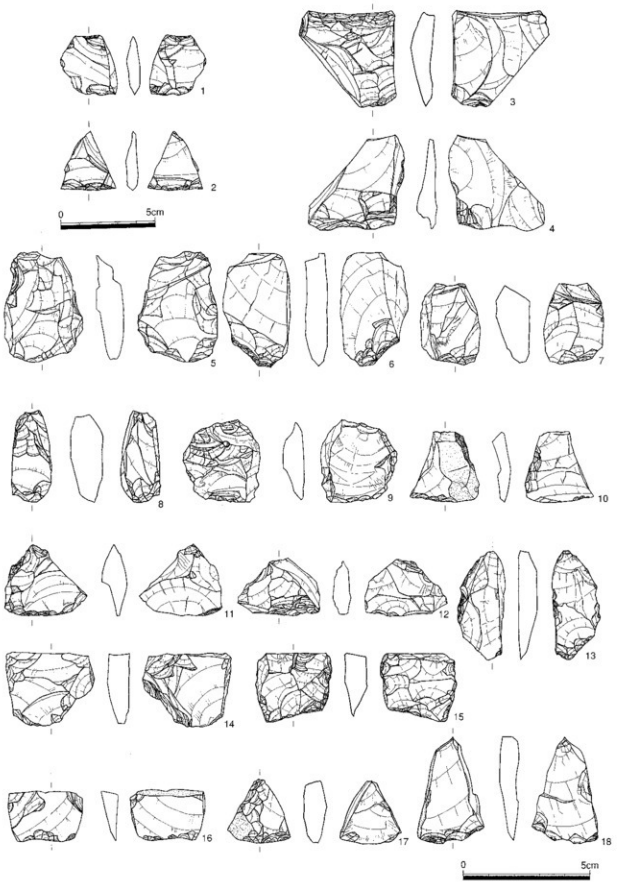
第128図　包含層出土石器 8



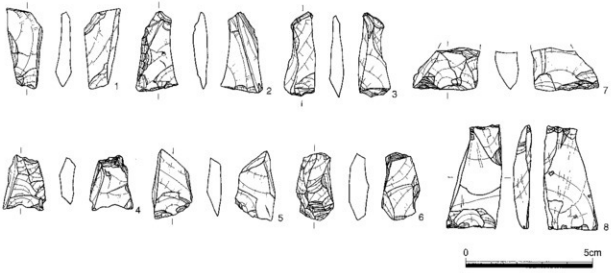
第129図　包含層出土石器 9



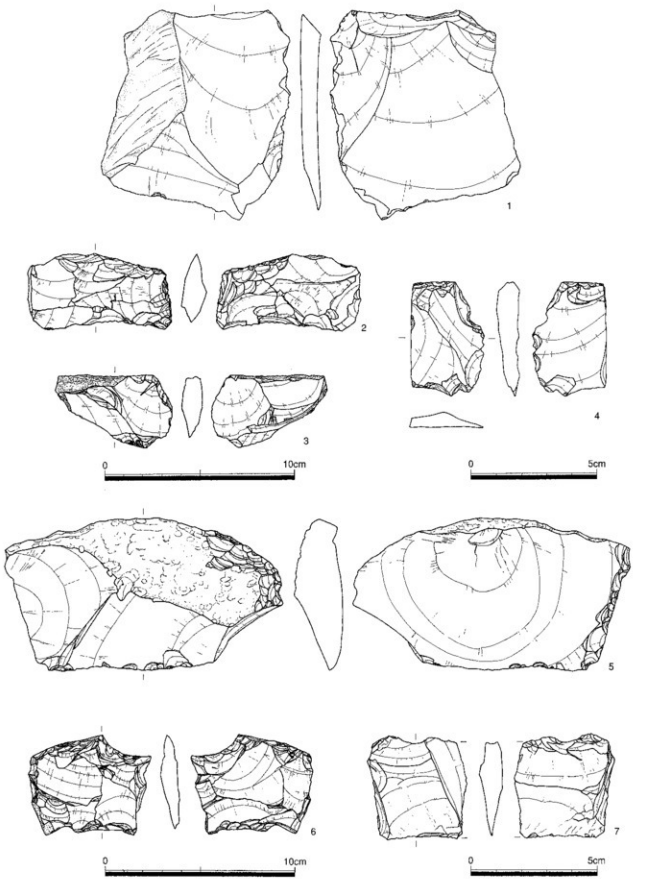
第130図　包含層出土石器10



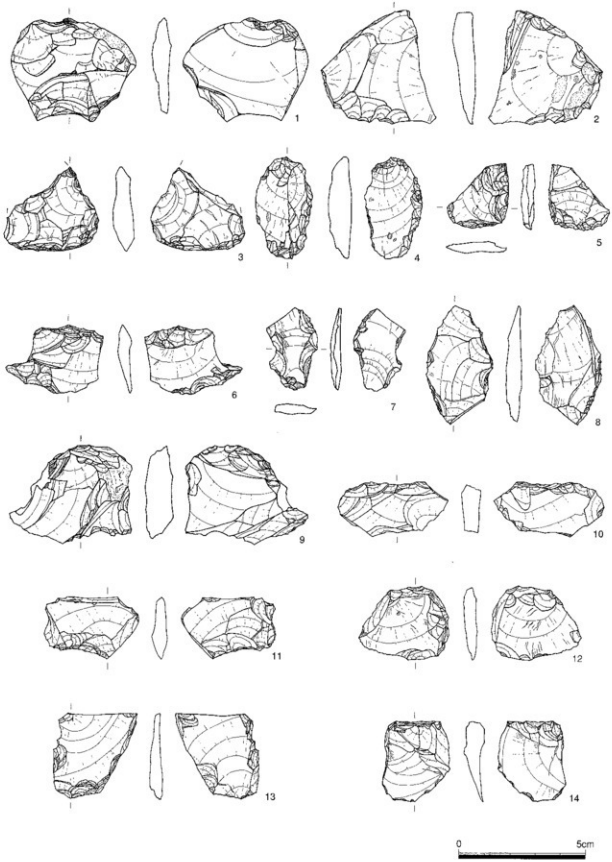
第131図　包含層出土石器11



第132図　包含層出土石器12



第133図　包含層出土石器13

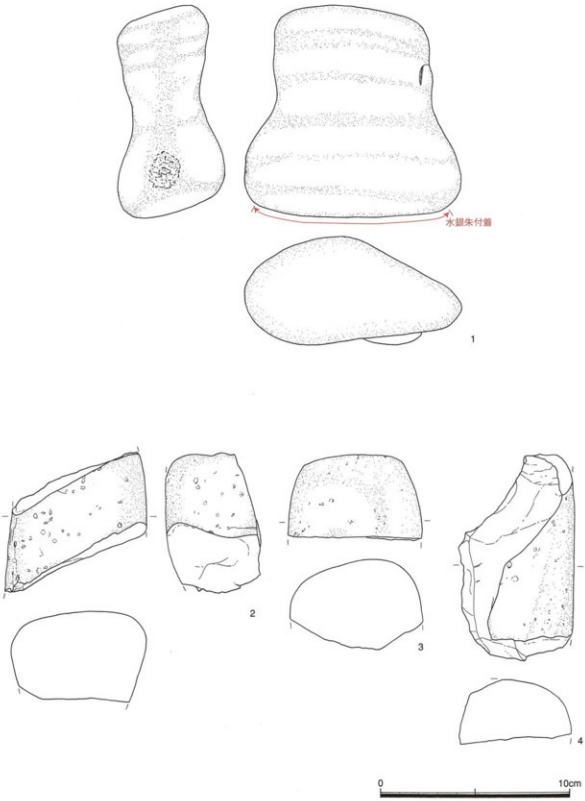


第134図　包含層出土石器14

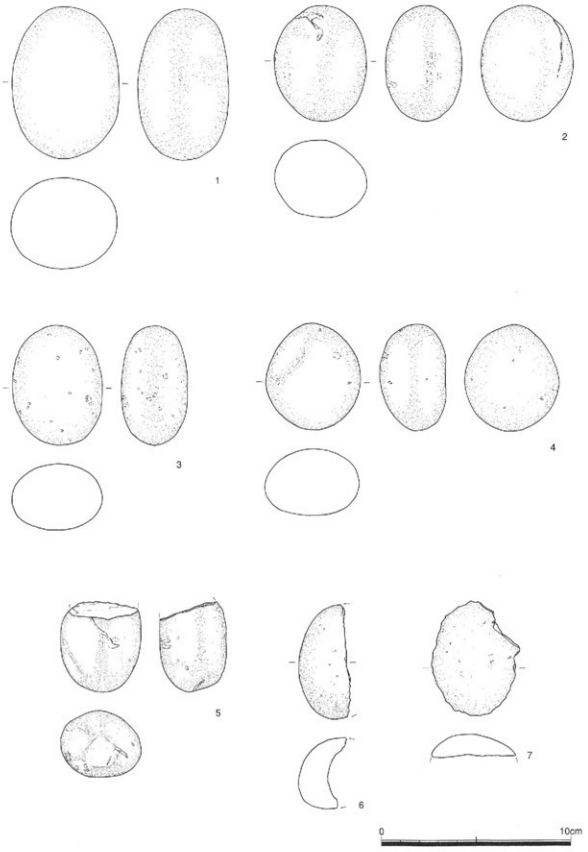
第135図　包含層出土石器15

第136図　包含層出土石器16

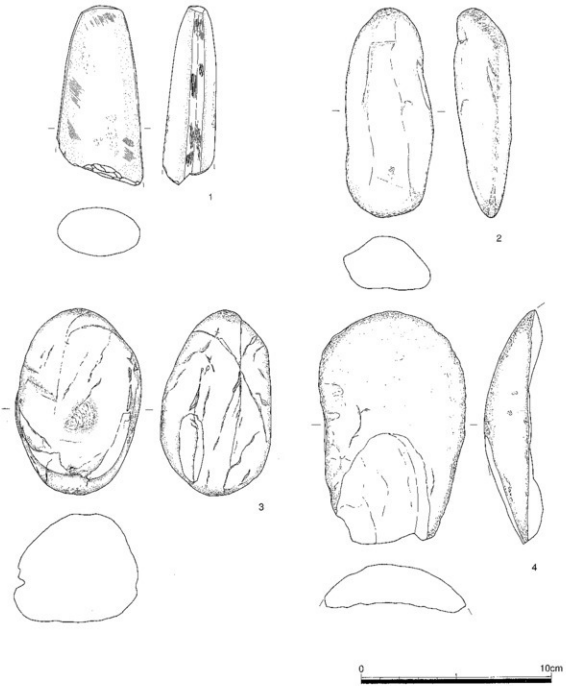
第137図　包含層出土石器17



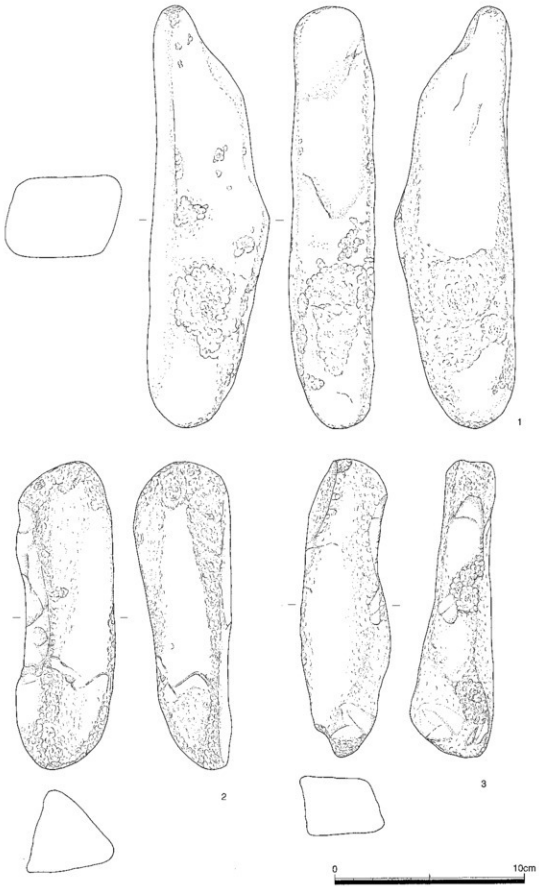
第138図　包含層出土石器18



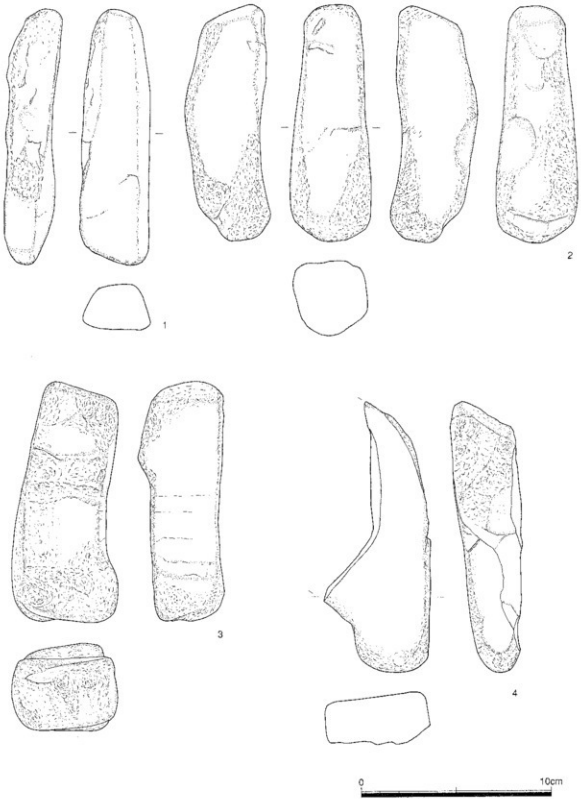
第139図　包含層出土石器19



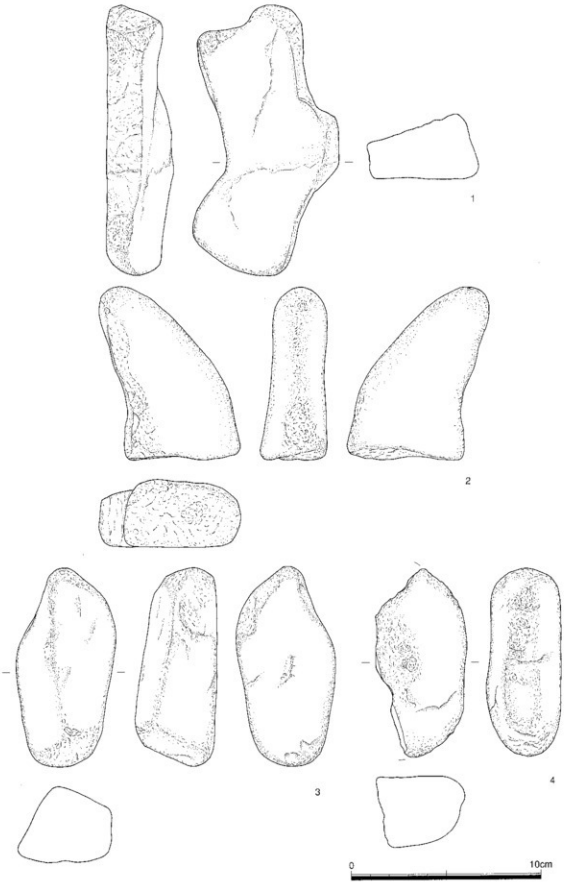
第140図　包含層出土石器20



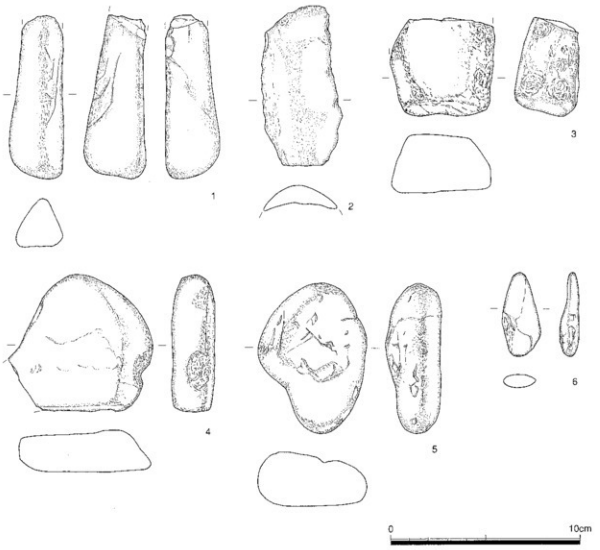
第141図　包含層出土石器21



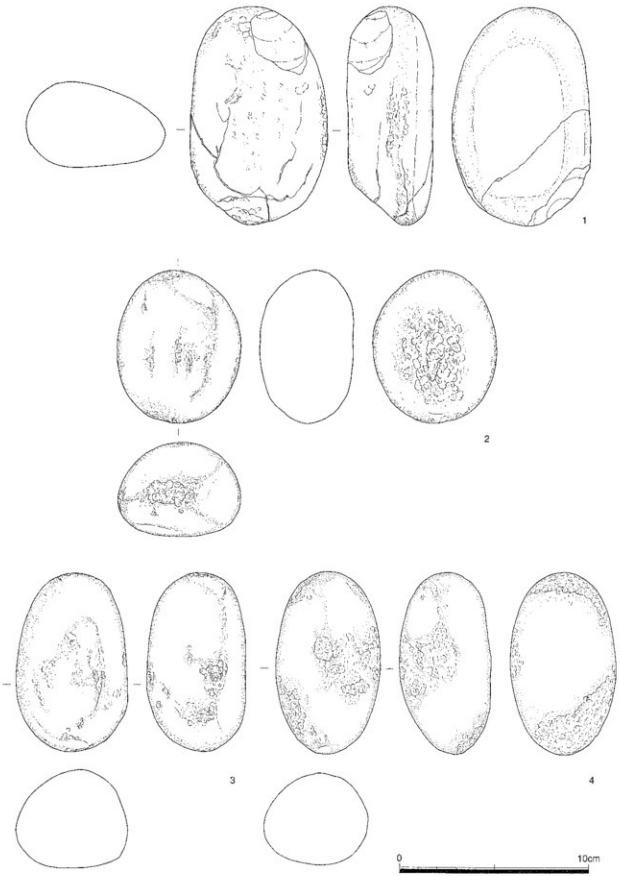
第142図　包含層出土石器22



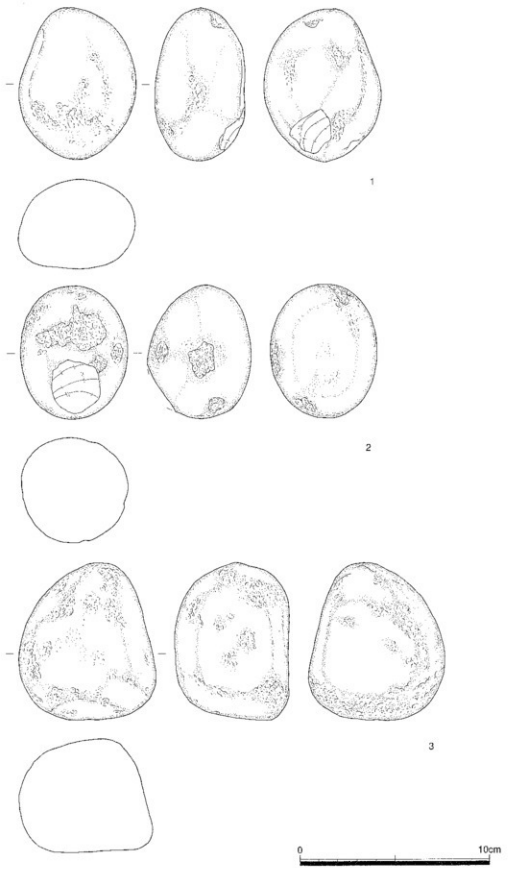
第143図　包含層出土石器23



第144図　包含層出土石器24

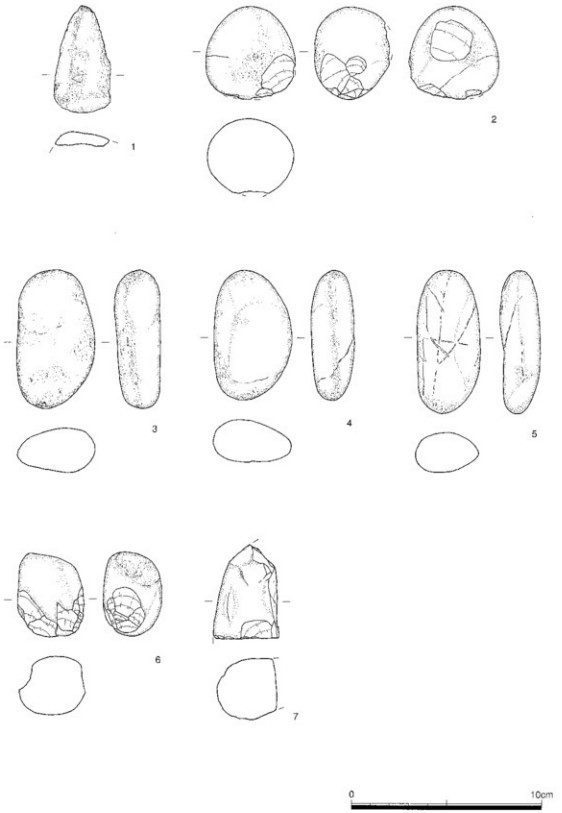


第145図　包含層出土石器25

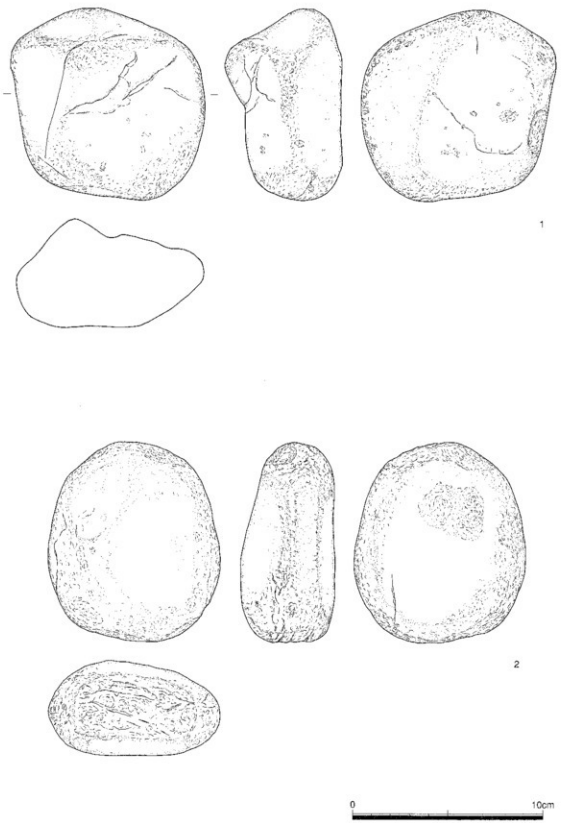


第146図　包含層出土石器26

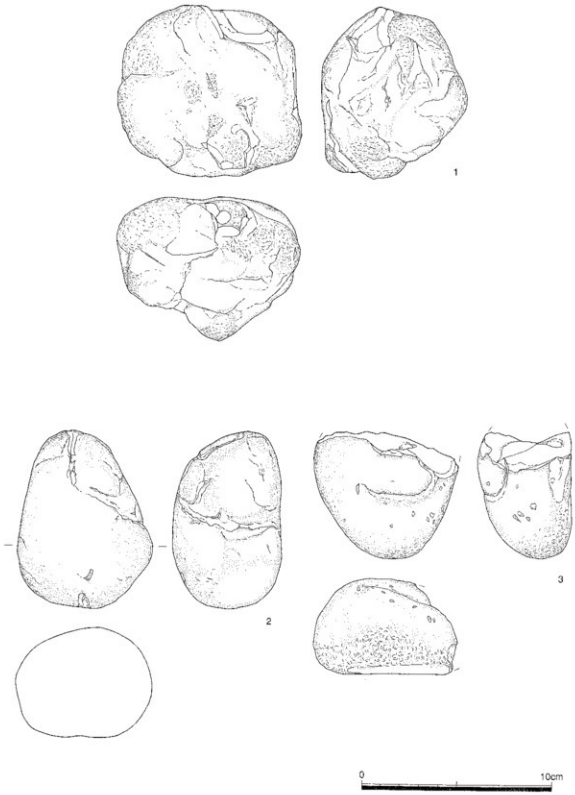
第147図　包含層出土石器27



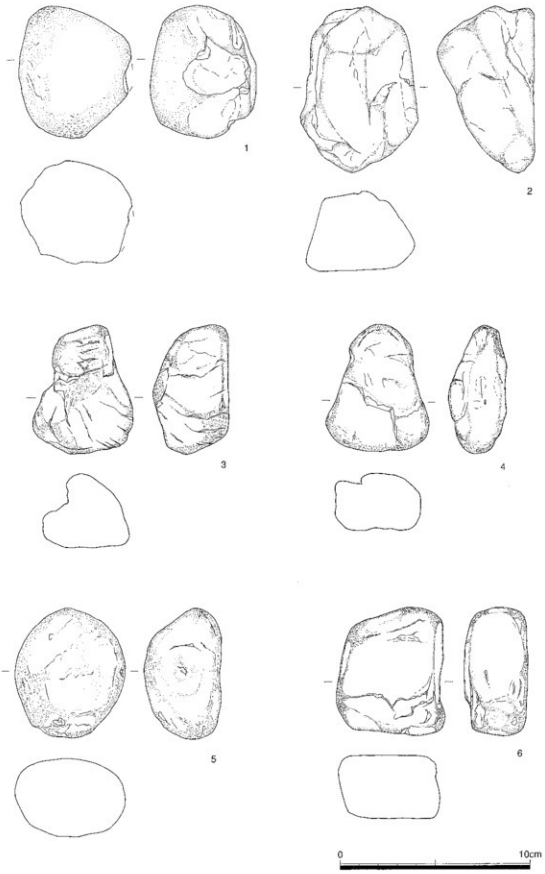
第148図　包含層出土石器28



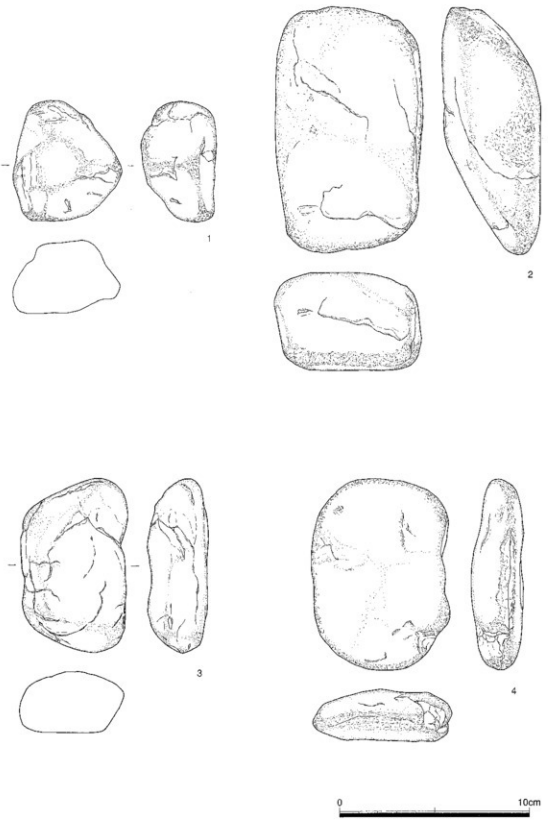
第149図　包含層出土石器29



第150図　包含層出土石器30

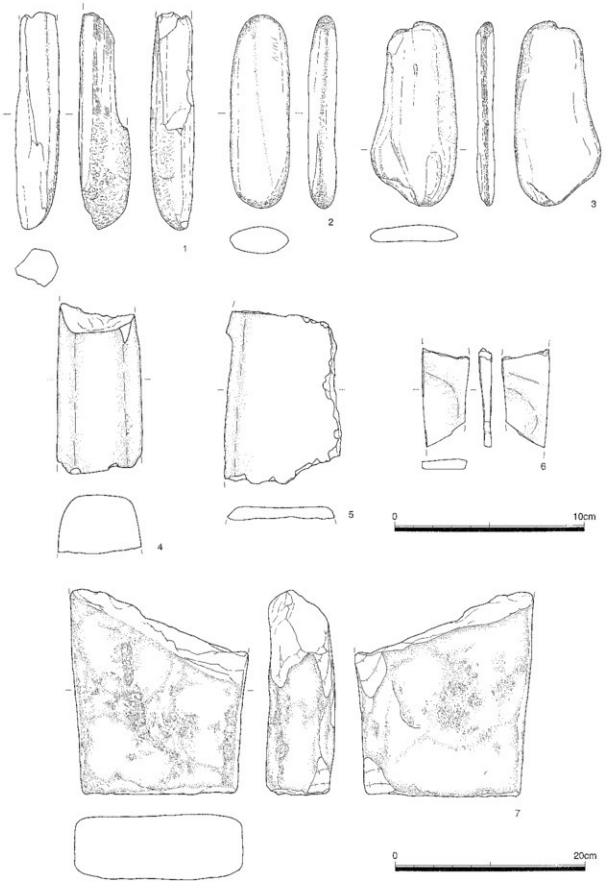


第151図　包含層出土石器31

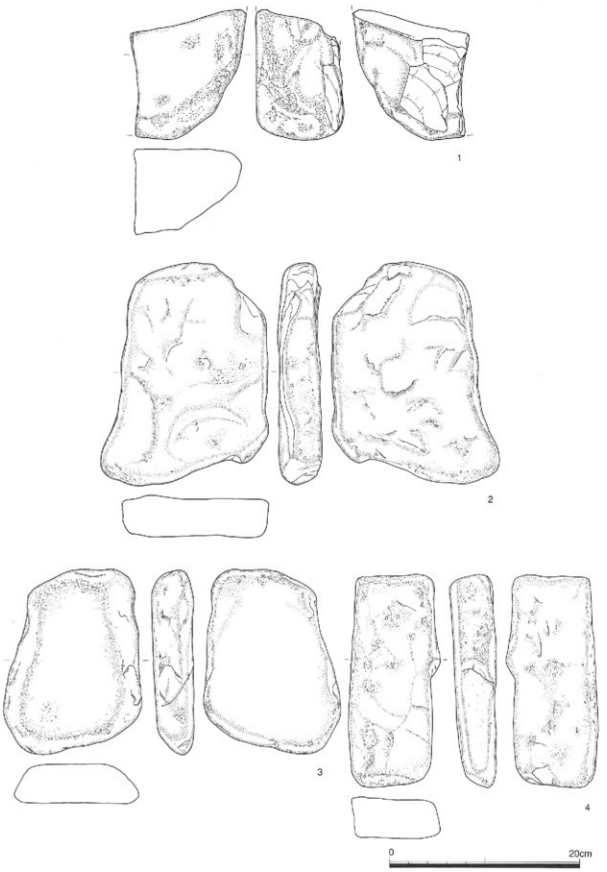


第152図　包含層出土石器32

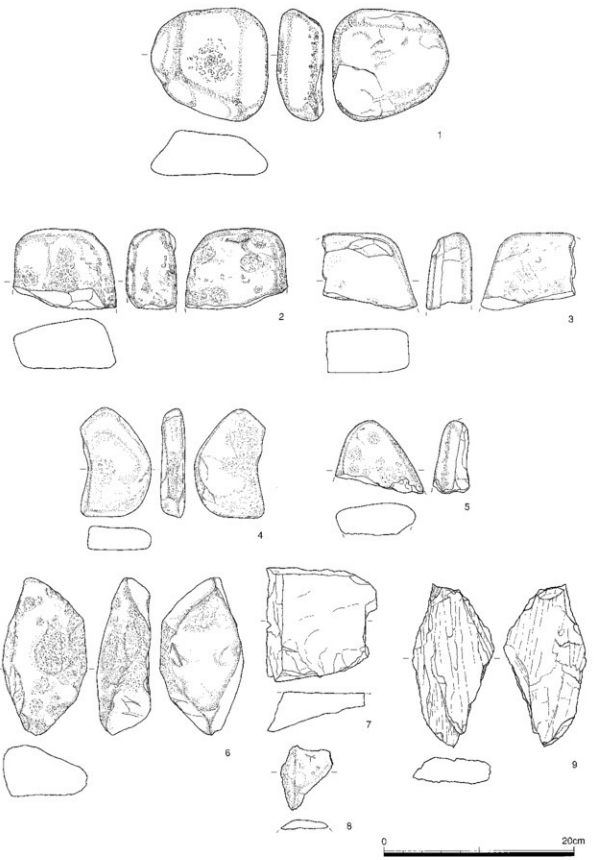
第153図　包含層出土石器33



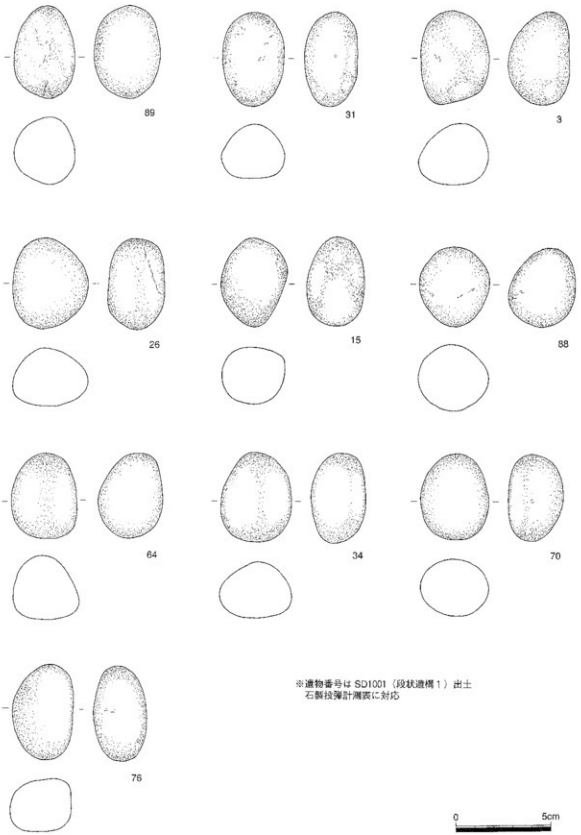
第154図　包含層出土石器34



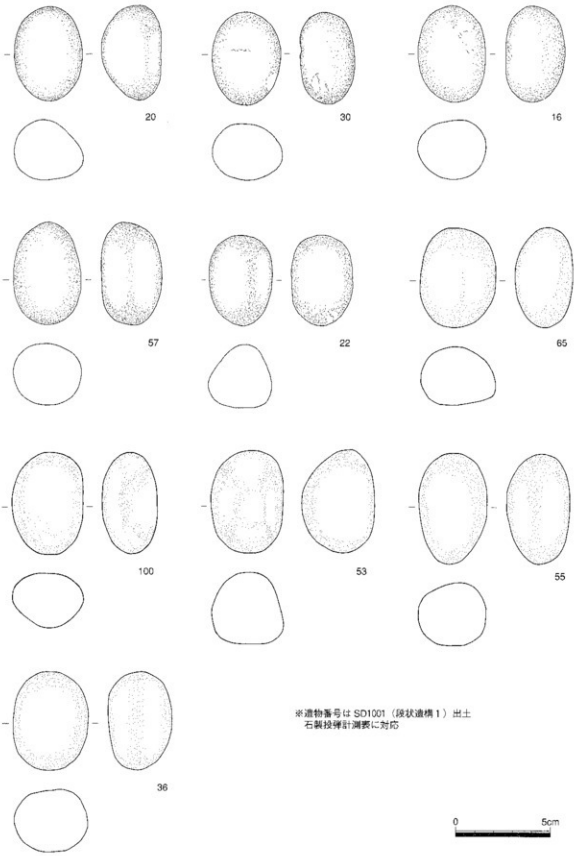
第155図　包含層出土石器35



第156図　包含層出土石器36

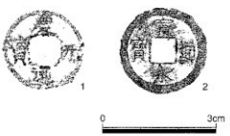

89
31
3
26
15
88
64
34
70
76
※遺物番号は SD1001（段状遺構１）出土
石製投弾計測表に対応
0
5cm

第157図　石製投弾１


20
30
16
57
22
65
100
53
55
36
※遺物番号はSD1001（段状遺構1）出土
石製投弾計測表に対応
0
5cm

第158図　石製投弾2

石庖丁の中には第127図-7のように使用による刃部磨滅の顕著なものが見られる。第128図-4は片岩の剥片である。明瞭な調整加工は施されていないため、石庖丁製作のための素材剥片と思われる。第129図-1～第130図-6はスクレイパーである。石材はサヌカイトである。第130図-7～10は石錐である。第131図-1～第132図-8は楔形石器である。第133図-1～4は剥片である。部分的に調整加工が認められる。第133図-5～第135図-5はRFである。第135図-6～12はUFである。第136・137図は石核である。自然面一部残存する。拳大～人頭大程度の礫を分割して、剥片を剥離したものと思われる。第138・139図は磨石である。第138図-1は下端（下面）に水銀朱が付着しており、朱精製に関連するものと考えられる。第138図-2～4は斑レイ岩の円礫を用いている。その他は砂岩の円礫を用いる。第140図-1は太形蛤刃石斧の基部である。第140図-2～第153図-9・第154図-2・3は敲石である。石材は主に砂岩を用いるが、客体的に泥岩・泥質片岩・片岩・砂質片岩も見られる。形態的にも四角柱状・円礫（卵状）・扁平な円礫等、バリエーションがみられる。第154図-1・4～6は砥石である。1は泥質片岩、その他は砂岩を使用する。第154図-7～第156図-8は台石である。第156図-9は片岩の剥片である。石器素材と思われる。第157・158図は石製投弾である。段状遺構・包含層をはじめ、ほぼ調査区全域より出土している。極端な出土地点の偏りはみられない。石材は麓の河川流域で入手したと思われる砂岩礫を用いる。表面に敲打痕あるいは擦痕をもつ作業面と認められる部位は見られないことから、自然楕円礫を用いているものと考えられる。石製投弾計測表に記載した数量で1,224点という大量の出土がみられ、総重量は57,448.2g（約57.5kg）、平均で1個あたり46.9gを計る。また遺跡の立地や出土遺構などから、武器として使用されたと考えられる。土製投弾と同様、弾弓あるいは投石紐（帯）の玉として使用されたと思われる。形態的には、球状またはラグビーボール状を呈し、大きさは直径4㎝前後、重さ50g前後とほぼ揃っている。出土点数が多いため、平均的なものを20点抽出し掲載したことをご了承願いたい。なお、全点数については計測を実施し、データ化をしているので計測表（第1表　石製投弾計測表）を章末に記載してあるので参照されたい。第159図-1・2は表土出土の銭貨である。1は慶元通宝、2は寛永通宝である。



第159図　出土銭貨

古墳時代

SM1001（1号墳）（第160図）

調査区南側に位置する横穴式石室をもつ円墳である。直径11m で墳丘北側に幅約３m の周壕が巡る。盗掘によると思われる攪乱が著しく、遺存状態は良くない。石室は基底部一段程度しか残存していない。石室石材には40cm程度の結晶片岩板石を用いる。玄室と羨道部を区画する施設はみられないが礫床の分布から右片袖の石室が構築されていたものと考えられる。主軸方向はN-82°-E で、東が開口する。奥壁は残存していないが、礫床の範囲から石室の規模は内法で長軸2.90m、短軸1.15m、墳頂部から礫床までの深さは現存で79cmである。羨道部は現存で2.40m である。石室床面は礫床が構築され、10cm 前後の砂岩の角礫が敷き詰められる。石室床面より須恵器有蓋高杯・提瓶・土師器短頸壺・圭頭形鉄鏃・水晶製玉・ガラス小玉が出土したが、攪乱は床面にまで及んでいるため、原位置は遊離していると考えられる。また床面東側では赤色顔料の広がりが確認された。墳頂部には何らかの祭祀行為をしたと思われる浅い土坑が確認され、須恵器有蓋杯・横瓶が出土した。石室内および墳頂部より出土した須恵器はTK43型式併行の時期とみられ、１号墳の築造は６世紀後半頃のものと考えられる。

墳丘（第160図）

墳形は円墳。直径11m、裾部からの墳丘高は約1.5m を測る。地山を削りだして整形し、墳丘を造り出している。墳丘表面には葺石等の外部施設は見られなかった。墳丘北側の平坦面を掘削し、周壕（掘削溝）を巡らす。墳丘南側は急斜度の若干の平坦面を削出して墳丘裾を構成する。

横穴式石室（第161図）

攪乱は床面まで及んでおり、基底部一段程度しか残存していない。玄室と羨道部を区画する施設はみられないが、礫床の分布から右片袖の石室が構築されていたものと考えられる。主軸方向はN-82°-E で、東が開口する。奥壁は残存していないが、礫床の範囲から玄室の規模は内法で長軸2.90m、短軸1.15m、墳頂部から礫床までの深さは現存で79cmである。羨道部は現存で2.40m である。石室石材には40cm程度の結晶片岩板石を用いる。

床面（第162図）

玄室床面は礫床が構築され、10cm前後の砂岩の角礫が敷き詰められる。礫床は一枚である。床面は玄室部分でほぼ水平であるが、羨道部で開口方向に向けて僅かに傾斜を持つ。

墓壙（第160・162図）

平面形は隅丸長方形状を呈し、地山を約70°の角度で掘り込んで作出する。長軸6.75m、短軸2.60m、深さは現存で床面まで約1.2m である。